
日常物語

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常物語

【Zコード】

N1128U

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

化物語が好きでなんとなく登録して勢いだけで書くので内容・誤字・脱字が酷いかもせんが暇つぶし程度に見て頂けると嬉しいです。

最初に言つときますが本当に適当にグダグダした内容が多かつたりキャラが崩壊したり設定無視があると思いますがそこは「勘弁を」。

この物語は、阿良々木暁の平凡な日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。

「よみテイリー（前書き）」

人はそれぞれ日によつて嬉しかつたり、怒つたり、悲しかつたり、樂しかつたりがある。

それは僕も例外ではない。

これは、彼女である戦場ヶ原、後輩である神原、一番の友達であるハ九時、大事な妹キヤラの千石、愛すべき羽川、一生のパートナーである忍、一番のお人好しの忍野、僕のでつかい方の妹である火憐ちゃん、ちつさい方の妹である月火ちゃんとの日々の何でもない話である。

今回はそんな僕の周りで起きる日常の出来事を晒そつと思つ。

「よみトイリー」

今日はとある夏の平日の最終日である金曜の放課後である。周りではクラスメイトが土日の予定を話合つてゐる子達もいる。

そんな僕はと、戦場ヶ原待ちである。

話があるということで僕は今席を外してゐる戦場ヶ原を待つてゐるのである。

「あら、こんなところに大きな犬の死骸が転がつてると思つたら阿良々君じゃない。」

「人を待たせておいて戻つて來た一言田がそれかよーー！」

「アーワルカツタワネ。 サーセン。 サーセン。」

「謝る氣一切ねえなあーー！」

「何よ、うるさいわね。阿良々木君なんて私の中の人がいなかつたらリクの少年の時の回想が出来なかつたのよ。」

「出てきていきなりメタ発言かよーー！」

「当たり前じゃない。私は戦場ヶ原ひたぎよ。」

「だから何だよーー何堂々と自分が一番偉いみたいこと言つてんだよーー！」

「ギャー、ギャー、うるさいわね。そんないことよつ阿良々木君。」

「自分で振つといでそれかよ。何だ？」

「週末、海に行きます。」

「はじめトライマー（後書き）

とつあえず1ページだけ途中まで書いてみました。
どうだったでしょうか？

まあ思った以上に酷い内容ですが、これから良くなつたらいいな
と思っています。

1. ジャンルトライー 2 (前書き)

早くも挫折しちつとなつてしまつました。
まあほんとうにがんばつてこめます。

「週末、海に行きます。」

この一言を聞いてテンションがMAXになるのはもう時間がかからなかつた。

「違うわ。こりゃないわ。海に……海に行き……海に行き……ませんか?……海に行つ……たらどうな……です。海に行きましょつ、阿良々木君。」

「結局そこは落ち着くんだな。」

「何? 嫌なの?」

「こ、行きます! 行きたいです! 行かして! さー、戦場ヶ原ひたぎさん! 」

「そ、な、う、か、つ、た。」

こいつしてガハラさんとの海デートが決まった。

「一応話はれで終わったのだけれど。」「……阿良々木君はまだ帰らないの?」

「今自分の彼氏を『ハリハリ』たなー?」

「『』めんなさい。つこちやつかり

「わざとじやねえかー!」

「うるさいわね。仕方ないじゃない。歴戦ハリハリして似てるし、紛らわしい名前をつける方が悪いんじゃない。」

「似てねえよー!だいたい戦場ヶ原お前似てる似てない以前に僕のこと阿良々木つて言ってたじやねえかー!てかその前に、名前が悪いって歴つてつけた僕の親に謝れー!」

「はいはい。メンゴ、メンゴ。」

「適當極まりねえなおー!ー!」

そんなこんなあって、羽川とクラス委員の仕事があるため今日は戦場ヶ原には先に帰つてもうつこにした。

そこへ丁度先約の用事を済ませた羽川がやつてきた。

「『』めんな、阿良々木君、遅くなつて。」

「その言葉を戦場ヶ原にも聞かせたいよ。」

と小さく僕は呟いた。

「戦場ヶ原さんがどうかした?」

「あ、いや何でもない。それより仕事なんだけだ。」

「それならほとんど終わらせてしまいながら後は口説を書くだけだから。」

「えつマジー? 一つの間に! ? 悪いな。」

「いいよ、別に。私が勝手にしただけだし。」

「そういうや日誌の今日の感想みたいなとこられて何も考えずに過ぎてたらネタが無くて話を盛つたりしてしまつんだよな。」

「そうだね、話題がないと盛つてしまいがちだよね。私もたまに盛るし。」

「えつ羽川も盛つたりするの! ?」

「盛るぜえ~超盛るぜえ~」

「どうした羽川! ? お前までもしかしてメタ発言か! ?」

「だつて戦場ヶ原さんもメタ発言してたし私も言つた方がいいのかなと思つて。」

「しなくていいよ~てかあの場に羽川いなかつただろ! 何で知つてんだよ! 本当お前は何でも知つてるな。」

「何でもは知らないわよ。知つてることだけ。」

この言葉を聞けただけで僕は幸せだった。

クラス委員の仕事を終え、とはいってもほとんど全部羽川がやつたのだが、僕は学校の門の前を出た時に僕の頭上を人のような黒い影が飛び越えた。

まあ大方の予想はついている。人を飛び越していけるやつなどいつも以外に居れば教えてほしいものだ。

「やあ、阿良々木先輩。奇遇だな。」

「こんな仕組まれた奇遇があつてたまるものか！？」

「そりかなら脱げばいいんだな。」

「出でていきなりやりたい放題すんじゃねえ……なんでお前はそうすぐに脱ぎたくなるんだよ。」

「それは私が変態だからだ。」

反論が出来なかつた。

「それより何か用か？」

「特にないのだが阿良々木先輩と話をしたかつたから待たせて

もじっていた。「

やはり可愛い後輩である。

「わづか。」

「迷惑だつたか?」

「いや迷惑じやないよ。」

「わづいや週末に戦場ヶ原先輩と海に行くらしいな。」

「なんでも知つてゐるんだよ。まあ、戦場ヶ原本人が言つたんだわづけど」

「その通り、さすがは阿良々木先輩だ。戦場ヶ原先輩が門を出てきて私を見つけるなり20分程その話をしていた。」

「どんだけ話したいんだよ、あいつは。」

「いや~羨ましきるぞ阿良々木先輩。戦場ヶ原先輩と一緒に海で露出♪」

「それ以上は言わせるか!~筆者の初投稿の小説でお前の下ネタ全開の会話をとしてたまるか!~!」

「ほお、阿良々木先輩ともお方がメタ発言か。」

しまった。僕としたことがついメタ発言をしてしまった。
いや、しかし神原を止めるには「これしかなかつたんだ…これしか。

「その前に何故私は脱いではいけないんだ。中は同じだつていうの
にベル坊は全裸ではないか。」

「お前もがつづりメタ発言してんじゃねえか…！…だいたい向こうは
赤ん坊だらうが…！」

いや、赤ん坊でも全裸はどうかと愚づが。

「なら私も赤ちゃんになつて赤ちゃんブー」

「 もういいよ…」

周りから見れば冷たい目を向けられそつとそんな話をしながら途中
で神原とは別れた。

「みな」トライリー 2（後書き）

いや～今回もめちゃくちゃで原作レイプに近い形になってしましました。

まあ自己満足で書いてるんで面白くないかもせんが、これからもう少しふくです。

「JALみトイリー 3（前書き）

いや～投稿したやつ見直したんですが酷いですね～。
何がつて全部が酷いです。 www

誤字・脱字・改行ミス。

クソつ1P目いきなりハ九寺がハ九時になつてゐるじゃねえか。
そして1番は内容が酷すぎる www
まあまだ悪あがきはしますけど www
では3話です。どうぞ

今日は何故こんなに畠メタ発言をするんだ。
そんなことを思つてると前髪を田元まで伸ばした見慣れた少女が歩
いてきた。

「あ～暦お兄ちゃん。 どうつどうる～。」

「千石、お前だけはメタ発言をしないと信じていたのに。 一畠田で
言つてしまつてるじやないか。」

「メタ発言? なんの?」

「あ、いや、千石がメタ発言するわけないよな。 ただたまたま挨拶
の仕方が一緒だつただけだな。」

「わうだよ。 撫子がメタ発言するはずないよ～。」

そうだ、千石は僕の中では妹よりも妹キャラなんだ。 そんな千石が
メタ発言をするわけないじやないか。

「それより千石、今学校の帰りか?」

「うん、わうだよ。 暦お兄ちゃんも学校の帰り?」

「ああ。」

「やつだ、暦お兄ちやん麻婆豆腐つて食べられる?」

「まあ食べられるけどどうかしたか?」

「撫子の前美味しい麻婆豆腐があるお店見つけたから教えてあげるね」

あれ?これってまさか某アーメの激辛麻婆豆腐じゃないよな?
いや千石のことだ。純粋に麻婆豆腐が美味しかったところがあつた
から教えてくれるだけだ。

妹よりも妹キャラなんだぞ、さつきもメタ発言?何それ?バカなの
?死ぬの?みたいな反応だつたじゃないか。
それを僕はなんてことを思つてゐんだ。

「せうか、じゃあ楽しみにしてるよ。」

「うん、楽しみにしてて。」

そんな約束をして千石とは別れ、ようやく家に着いた。
そういうや戦場ヶ原のやつ週末に海に行くつて言つてたけどまさか泊

まり掛けではないだらうな。
てか今思えば行くと決めただけで何も決めてないじゃないか。
仕方ない後で電話でもして聞くか。

そして、夕食を食べ、お風呂に入つて今はベットで「ロロロロしながら電話を掛けていると」である。

「もしも」

「もしもし、戦場ヶ原？僕だけ。」

「只今電話に出る」とが出来ません。電話主が阿良々木君なら爆発
しないで。」

「なんでだよ！…爆発する意味がわからねえよ！…でか最初にもし
もしつて言つてたじやねえか！…」

「ひめむせこわね、切り落とすわよ。」

「どこの部位ですか！？」

「冗談よ。爆発しきつてこいつのよ。」

「切り落とすのは事実かよ！？」

「それより何かしら？」

「あ～海の件だけど何も決めてなかつたから聞こいつかと思つて。」

「そうだったわね。本当は土田を使って泊まり掛けで行く予定だつ
たのだけれど生憎明日は予定が入つてしまつていてるから田曜の早朝
に出よつと思つてこいるのだけれどどうかしら？」

「僕は全然構わない。」

てか泊まり掛けで行くつもりだったのかよ。

「なので悪いけれど明日は神原と水着でも買いに行って頂戴な。」

「まあ、新しい水着を買つのはいいが何で神原なんだよ。」

「あの子たまには構つてあげないといけないから明日は代わりに阿良々木君が遊んで頂戴。」

「まあいいけど。」

「とつあえずそつこいつことだから明日は頼んだわよ。」

「ああ。」

「あと日曜は朝4時に私の家に集合とこいつことで」

「了解。」

「それじゃあ、よろしく。」

電話を切つた後に気付いたのだが朝の4時つて始発もないじゃないか。

まさか、またジープの父親同伴！？ てかそれしかないな、時間的に。

そんなことを思いながら次は神原に電話をかける。

「神原駿河、特技は超電磁砲だ。」

「嘘つけ！！お前はどうぞの能力者だよーーー。」

「その声とシシ「ミミは阿良々木先輩だな。」

「お前は相変わらずその判断の仕方かよ。」

「私の電話番号を知ってる人は少ないからな。それよりどうしたのだ？」

「あ～明日なんだけどお前暇か？」

「買い物のことだな。それなら大丈夫だ。」

「なんだ知ってるのか。」

「ああ、戦場ヶ原先輩から連絡があつたからな。」

「そつか、なら話が早いな。明日何時ぐらいがいい？」

「私は何時でも構わないぞ。阿良々木先輩が呼ぶのならいつでもどこでも駆けつけるからな。」

「それは頼もしいな。じゃあ、1時に呼びに行くよ。」

「了解した。」

切つた後、明日の予定も決まつたところで僕は眠りについた。

はずだつた。

「よみトイリー 3（後書き）

撫子との絡みをどうしていいかわからないためガハラさんとバルカン後輩中心になつてゐるんで次からなんとか頑張るようにします。

次回予告

ハ九寺Pと忍が出るかもよ。

「なるみ」トライバー 4（前書き）

今思つたんですが日常物語ついで言つよつて海物語になつたうですね。
海ネタは最初からやうつとは思つてまして、しかし海物語にすると
僕の中でパチンコと被るので泣く泣く日常物語にしました。
さてさて今回も内容は酷いですが見てやって下さい。
ではこよみトライバー 4です。どうれ。

眠つについたはずだつた。
だとシリアス展開に持つてこきなつくなるのでこれからこの展開を考えるところは
眠つについたのにつけておいたのに~

が合つてゐるな、たぶん。

「起きる前様。緊急事態じや。」

「何だよ」さな夜中だ。

時計を見ると深夜2時を回つていた。

「だから緊急事態じやと申つておるのじや。」

「もしかして怪異絡みかー? お前が緊急事態つて申つてゐるべつて
からそれほど厄介なやつなんだな?」

「こや怪異ではない。」

「じゅあ何だよ?」

「こや最近ミスドに行つておらんかつたじやろ? 禁断症状みたいな
のが出て全く我慢が出来ないのじや。」

「知ったこっちゃねえよーーお前はそのために僕の大事な睡眠時間を遮ったのかー？」

「そんなことはなんじゃーー僕にとっては一大事なことじゃよーー！最近行ってない間に焼きドと言つものが発売しとるんじゃよーー。」

「なんこと言われてここの時間帯に起こされてもミスドは開いてねえよーー。」

「マクドは24時間営業があるのになぜミスドは24時間営業の店がないのじゃ。」

「それはドーナツ一個とコーヒー一杯で居座り続ける人が出るからじゃないのか？」

てか実際に24時間営業の場所があるのかないのかは知らないが。

「24時間営業であれば夜中に僕が毎日のように買こに行くの。元のへ行くの。」

「お前が買いに行くんじゃなくて、僕のお金で僕に買いに行かすんだろうがーーてか僕が同伴しないと行けないじゃないか。」

だいたい毎日行かれたらこの歳で借金を背負う人生になるじゃないか。

「「」んな話をしてたら余計食べたくなつてしまつたではないか。」

「だから知つたこつちやねえよ……お前が勝手に話を進めてるんだろうが。まあ確かに最近連れて行つてなかつたからなあ、明日神原との買い物の帰りに買つてやるよ。」

「本当かお前様！？」

「ああ。だから今日はもつ寝よ！」

「やうか……明日は何を買つかの。やうじやの、やつぱり焼きドは全種類は買つべきじやな。

フレーバー焼きドのダブルベリーは必要じやな、まあゴールデンチヨーネートは必ず買つうが。そつじやお前様何が良いと思つかの？」

「知りねえよ……お前が食いたいものを買えばこいじやねえか……」

「本当か！？」

しまつた。こいつ完全に全種類を買つて口めるつもつてこるじやねえか。

それだけは絶対阻止しなければ。
僕のこれから的生活を賭けて。

「やうじやの、『ゴールデンチヨーネートと焼きド全種類とポン・デ・リング全種類と……』

結局興奮した忍を止められるはずもなく夜が明けて朝になつてしまつた。

その忍はと言つと口の出と共に寝てしまった。

全く脳天氣なものである。

僕がベットの上に座つて呆けているところのよう一人の妹の火憐と月火が起こしに来たのだが

「あれ？ 兄ちゃん起きてるじゃん。 今日地球が爆発するんじゃねえの？ 月火ちゃん。」

「それは言ひ過ぎだよ。 真夏なのに雪が降るぐらうだよ。」

本当に朝から失礼なやつらである。

「なんで今日は早かつたんだよ兄ちゃん。」

「あ～ちょっと疲れなくてな。 それよりその右手に持つてゐいかにも重たそうなダンベルはなんなんだ？」

入つて来た時から気になつて仕方がなかつたんだ。

確實に30キロはあるうダンベルをでつかい方の妹は軽々片手で持つてるんだもん。

「これ？ これは兄ちゃん用に昨日買つたんだよ。 結構高かつたんだが。」

「僕の趣味に筋トレはない。 僕用つて一体何に使つて言つんだよ。」

L

「だから今日朝起こうためにこれを持って来たんぢやないかよ。頭に落としたらさすがに起きるかなと思って。なのに兄ちゃんつたらこれを落とす前に起きてるんだもん。この苦労とお金を返して欲しこよ。」

「そんもん落とされたら、一度と础きねえみ」

「何!?」これでも起きねえって言うのが兄ちゃんはーー！」

「やつこつ意味じゃねえよ……」一度と田を覚めたなこつて事だよ！」

全く恐ろしい妹である。

もし昨日忍に起こされず寝ていたら僕は今日命日を迎えていたのか。
これは忍に感謝をしないとダメだな。

「とりあえず起きてるなら朝」はん出来てるから早く食べてね、お兄ちゃん。行こう火憐ちゃん。」

ちつこい方の妹は優しく声をかけた。

ただ気になつたのが手に千枚通しが見えたような気がしたんだが。いやそんなはずは無い…… そうだ月火ちゃんはたこ焼きの練習をしてたんだ。

そうしかない。
そうであつてほしい。

もしあれで僕を起こすために持っていたのなら僕は阿良々木姉妹をヒステリック姉妹として世界仰天コースに応募してやる。

朝からいろいろあつたが朝食を済ませ、これでも僕は受験生なので勉強をするべく机に向かった。

いつもは羽川が戦場ヶ原のどちらかに勉強を見てもらつていて、今日は羽川の番であったが予定があるということを前もつて聞いていたので特に予定に変更はなかつた。

そこで神原と待ち合わせてる時間まで勉強をしようといつわけである。

机に座るとたまに思うのだがこの引き出しから青色の猫型ロボットが出てきて何か楽に記憶が出来る道具を出してくれないかと思ってしまつことがある。

ただ僕はアンキパンだけは勘弁だ。

僕が覚えなければならぬ量は胃がいくつあつても足りない。

しかも、トイレに行くと排出によって効果が無くなるらしい。

前田に全部を暗記しようと思つてもそんなに食べられないし、かと言つて何日か前に食べるトイレに行けなくなるのでお腹が爆発しそうである。

そんな馬鹿なことを考えてから勉強に取り組んだ。
もちろん真面目だ。

何事も集中していれば時間は時が経つのは早く感じる。

まだ時間は少しあつたがキリが良いところだったので勉強を切り上げ少し早めに家を出ることにした。

家を出て少し歩いたところで僕の前に大きなリュックを背負つたツインテールの小学生が現れた。

八九寺であった。

以前までの僕なら興奮しながら猛スピードで八九寺に抱きついていただろう。

しかし、僕は今受験生であり、ましてや彼女がいる。

もうそんな変態ロリコンみたいなことはもうしない。
悪いな、八九寺。

と回れ右をしながらそう心の中で言つた後、僕はさらに回れ右をして全速力で走つた。

八九寺に向かつて。

「よみトイリー 4（後書き）

予告通り忍は出せたんですがハ九寺Pを出すともうと長くなつたので名前だけにして次回に持ち越しです。

ネタがあまり浮かばないためか余計内容が酷くなつたような気がしますwww

次回予告

ついにハ九寺P登場です。

「なるトドリー 5 (前書き)

いよいよハ九寺の登場です。

「は～～ち～～く～～じ～～つ～～～～会いたかつたぞ八九寺～～～ほらもつと触らせろ～揉ませろ～舐めせろ～」

「あや～つ～あや～つ～あや～つ～」

と八九寺は悲鳴と共に

「がぶつ～」

と噛みついてきた。

「がうつ、ぐあうつ～」

「痛え～！何すんだ～～～！」

痛いのも、何すんだ～～～も僕であった。

「シャーツ、シャーツ～」

何ヵ所か噛まれたことで僕は正気に戻つたものの暴走している八九寺は、超サイヤ人のごとく髪を逆立て依然威嚇を続けた。

当たり前である。

「シャーラシヤーシー」

「大丈夫、敵ではないお前の味方だ」

「よし、やつくり深呼吸をしようつ

それにしても初号機もビックリの暴走だな。

もしかしたら初号機よりも強いんじゃねえか?」いつ

「よし、いいぞ。僕だ、わかるか？いつも誰にでも優しく評判の良いごく一般の高校生で…」

「ん...ん...」

八九寺はだんだん我を戻して髪もいつも通りになり姿も戻った。

「大丈夫か？」

「「れは」れはクララ木さんじゃないですか」

「僕をアルプスを舞台にしたアニメに出てくるキャラみみたいな名前で呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

確かに噛まれた後に噛まれたけど今回は僕が悪い。
しかし、いつもの流れをしないと僕の中でモヤモヤ感が残るのでいつも通り返すことにした。

「違つ、わざとだ…」

「噛みまみた」

「わざとじやない…？」

「カビ焼いた」

「そんなもん焼くんじゃねえ…！」

楽しい時間であった。

「阿良々木さんお出かけですか？」

「ああ、神原とちよつと買い物にな

「ああ、あのB」女子高生ですか」

「どんなあだ名だよ

「わづこや今日は明日行く海のために水着を買いに行くんでしたね

「なんでお前が知ってるんだよー?」

「私を誰だと思っているんですか?」

「さすがハ九寺♪」

「その気になればこの小説を終わらせるとなんてちよちよいのちよいです」

「何ー?そこまで権力持ってるのかお前はー?」

「当然です。明日の海の行き先をカリブ海にして阿良々木さんをティヴィ・ジョーンズの手下として働かさせることもできます」

「世界をも巻き込むのかお前はー?だいたいティヴィ・ジョーンズは前作で死んだよ

「なり私の手下として働いてもらいます」

「なんでお前の手下にならなきゃいけないんだよ

「だつて阿良々木さんの一人称つて僕じゃないですか?僕の読み方

つてしもべとも読めるじゃないですか?」

「まあまあですねえ阿良々木さんは。だから最近の若い者はと喧わ

れるんですよ」

「全く関係ないし、なんと言われる代表が僕なんだよ!…だいたいお前も若いじゃないか、僕よりも」

「生きていれば私の方が年上ですし、一二十歳を越えてこます

「申し訳ござりませんでした」

「分かればいいんですよ分かれば」

それにして moyく次から次へと話が出てくるな」こと。まあいつもだけど。

「それせよやく私の出番になつたからです」

「僕のモノローグを勝手に読むな

「前回は予告をっていたにも関わらず出してもらひませんでしたからね

「確かに前々回の予告で出でていたな

「はい、私は終わらせる権力があると言いましたけど自分が出ないうちに終わらせるのは嫌だったので続けさせていたんですよ」

「どうだけだよ！？」

「まあこれで私も出れた」とですし終わらせますかーー。」

「笑顔で語り」とじやねえよー！」

「ここが席だよ。」

僕の物語を中途半端で締め切ってだまるか
興長し重音、奥ナリの重音。

「まあ冗談はここまでで。時に阿良々木さん、傷物語が映画化みたいですね」

「[冗談は終わつてもメタな会話は続くのな」

「メタメタ続きます」

「めちゃめちゃ続きますみたいな言い方をするな」

映像化記念でちよこちよこ映つてもよろしいでしょうか?」

— 良いわけねえだろ！ —

「今考てる場面は阿良々木さんとエピソード君が闘ってるのを見

ている羽川さんの横で一緒に見ると「」と阿良々木さんと忍さん
：傷物語ではキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブ
レードでしたね、お二人が闘つてるのをグラウンドで見てる場面を
考えています」

「どうちも良い場面じゃねえか！－そんなとこで関係ないやつが出
るなよ！－」

「だつて良い場面じゃないと映らないじゃないですか」

「お前は若手芸人かよ！－てか最初エピソード君つて言つたよな？
あいつそんな若いのか？」

「猫物語（白）の時点で誕生日1ヶ月前で6歳だと本人が言つてい
ましたよ」

「何！？あいつそんなに若いのか！？どんだけ成長早いんだよ」

「まあ詳しい」とは買って読んで下さい」

ネタバレになると云ひ不得買つて読んでみて下さい

「ちなみに羽川さんと戦場ヶ原さんがあんなことやこんなことをし
ていましたよ」

「八九寺、僕は用事が出来て今から富蔵書店へ行かなくなつたから
後は頼んだ」

「本当救いようのないダメ人間ですね」

そんなやりとりも楽しかった。

まだ話してはいたかったがこのまま話していくと日が暮れそうなので話を終わらせ神原の家へと向かった。

「はじめトライー 5（後書き）

ハ九寺P 「ようやく私の出番ですか」

クロネコ「仕方がなかつたんです、ハ九寺さん」

ハ九寺P 「まあ出でくるのが遅かつたのは別にいいです。それより何なんですか！？」この薄くてペラペラな内容は！？」

クロネコ「グダグダと適当な話ばつかりなんで話はすぐに思いつきますが内容がペラペラなんで残念な小説になつてしまつてます」ハ九寺P 「自分で言つているとより惨めに見えますよ。あとこれより酷くなると打ち切りにしますからね」

クロネコ「はい、がんばります。」

「みなと」トレイリー 6 (前書き)

活動報告にも書きましたが、見やすさに改行を行いました。

それでは見てやって下さーご。

じよみディイリー 6です。じつ。

ハ九寺と話していたため結局13時丁度に神原家に着きおばあちやんにいつも通り神原の部屋へ案内された。

神原の部屋はドアではなく障子になつてゐる。

その障子を開けた。

「やあ、阿良！」

その瞬間、僕は障子を閉じた。

何故かつて？

そんなもの決まつてゐるじゃないか。

年頃の女の子が裸で仁王立ちしていたら誰だつて閉めると思つ。障子の向い側から声がした。神原の声だ。

「何故閉めるのだ？ 阿良々木先輩」

「なんで裸なんだよ！？ 服を着ろ！..！」

「いけなかつたか？ 阿良々木先輩が呼びに来ると言つていていたから脱いで待つていろという意味だと思つたんだが」

「なんでもうなるんだよ！..？」

「むつ。私は昔誰かから呼びに行くことは脱いで待つてると
いつことだと教わった気がするのだが」

「デタラメを言つたな！！しかも誰かつて誰だよ！！もしそんな奴が
いるなら今すぐ僕の前に連れて来い！！説教をしてやる」

待てよ以前星空データーに行く途中の車の中で神原の師匠は戦場ヶ原
つてことがわかつたよくな……いや、でもあいつに限つてそんなこ
とは……大いにあり得る。

「とりあえず着たぞ阿良々木先輩

「じゃあ、入」

本日2回目の瞬間障子閉めである。

「着てないじゃねえか！！なんで下着のみなんだよ。ほとんど変わ
つてないじゃねえか」

なんだよこのリアルアハ体験みたいなのは。

「私も服を着たとは一言も言つてないぞ」

「そんな屁理屈はいらねえよ。」

「あ～ずつと立つていたら胸が凝つた。誰か揉んでくれる人はいな

いものかな

「それで一体誰が損をするんだーー？」

本当にいつはいきなり何を言い出すんだよ。
いつかこの小説排除させられるが、某知事によつて。
てかPTAが黙つてないぞ。

そうこいつしている間に神原はよつやく服を着た。

「どうりでそのPTAなんだが」「

「お前も勝手に人の心の中を読むな」

僕にはプライバシーつてものが存在しないのか?
どこに行つた個人情報保護法

「読心術だ」

「うるせえーーお前にそんな仕様はねえよーーー」

「そなのかーーつきりあるのかと思つてたが

どれだけこいつは才能を持つ気なんだよ。

「で、PTAがなんだって?」

「PTAの意味は、Parent Teacher Associationだが最近はProtect Teacher Associationを作った方がいいのではないかと思つてな

「教師を守る組合か。確かに最近はモンスター・ペアレンツってやつが増えて教師も大変だつて言つしな

「うむ。これでは生徒が保護されすぎて教師と生徒の禁断…」

「結局そういう話かよ！？」

たまには神原も真面目な話をするんだなと見直した自分が馬鹿みたいだつた。

家を出て向かう先はこの街で唯一のショッピングセンターである。わかりやすく言うとイオンみたいなものである。

着いて早々と神原は

「さうどの「アーメラン型の水着を賣つのだ？」

「なんで勝手に決めてんだよ。普通のハーフパンツデザインのでいいよ」

「それは残念だな。それを着た阿良々木先輩と忍野さんとの絡みを想像しようと思つたんだが

仕方がないので神原をスルーすることにした。

「 わすがに今日は土曜で学校が休みだし子供が多いな」

「 あいいぞ、阿良々木先輩。とてもいい放置プレイだ」

喜ばすだけであつた。

クソつこいつは無敵か！？

無敵艦隊神原駿河。

なんか中国語っぽくなつてしまつた。

「 無敵艦隊かあ。私はフェルナンド・トーレスが好きだ」

「 サッカーのスペイン代表の話をしてんじゃねえよーー！」

「 さすが阿良々木先輩だ。よくわかつたな」

「 だいたいなんでお前がサッカーの話わかるんだよ。バスケの話ならまだしも」

「 それは筆者がサッカーが好きだからだ」

今更だが誰がメタ発言しようとも何の気にもしない。もうシッコま
ないからな。

「あ～なるほどな…………つて納得出来るか！－」

やつぱり無理なものは無理であった。

筆者の話をしながら買つべきものも買い2時間ほどワインドウショッピングを楽しみ、神原はその後、B級小説を買いにどこかへと去つて行つた。

さてこの後は昨日忍に約束をしたミスドに行かないといけない。さてかこのまま買わずに帰つたら僕は心渡を持った忍に襲われるのかな…。

そんな物騒なことを考えてるうちにミスドに到着した。

その瞬間、僕の影から金髪美幼女……いや忍が出てきた。

「お前様早く行くぞ。売り切れてしまつ」

「そんなどぐに無くならねえよ。どこのタイムセール中のスーパーだよ」

と言ひながら店に入ると不思議な田と言つた、不審者を見る田と言つた、なんとも言えない視線が突き刺さる。

そりやそうだな、こんな田舎町に金髪幼女を連れた高校生なんて合はないもん。

いや都会でもギリアウトだらうと思つが。

まあただし、僕は通いなれているため特にほんとにしない。

「お前様よ、これ全部食つていいのかの?」

「良いわけねえだろ……。」

そこまで僕を苦しめたいのかお前は。
さてはお前、僕のこと嫌いだな。

横で頃垂れている僕を横目に金髪美幼女はキラキラした目でドーナツを見つめていた。

今となつては怪異の王の欠片すら見えない。

「お前様よ、焼きドの他にもクールミスドがあるぞ。ぱないのー。」

「いつからだ?」のロリババアがギャル語を喋るよつになつたのは。

「ん? お前様今なんか良からぬ単語を出しそつたな?」

「そ、そ、そんなわけないだろ」

「そうか。ならいいが」

「危ねえ、もう少しどロリババアと言つたことがバレるとこだつた」

「お前様、心の声が筒抜けじゃぞ。まあ今日はミスドだから勘弁してやう」

さすがミスター・ドーナツ様。怪異の王を手なずけるとは。感謝します。

結局忍は、焼きド全種類、ポンテシリーーズ全種類と「ホールテンチョコレートを2つを買わされた。財布は現在とは真逆の季節の冬みたいに寒くなつたけど今日の朝、命を救われてるからこれで借りは返したことにしてよ。」

店を出て家までの帰路を忍は、影の中に入らず、皿皿スドを手で持ち満面の笑みを浮かべながら歩いていた。

「ところでポン・テ・忍」

「儂をドーナツみたいな名前で呼ぶでない」

「いや、だつてなんか3文字なら合ひそうだなと思つて」

「ならポン・テ・暦も合ひではないか」

「何！？まさか忍お前天才か！？」

「我が主様は相変わらず馬鹿なんじゃの」

金髪幼女に馬鹿呼ばわりされた記念日になつてしまつた。

家に着いた僕は夕飯後、明日の用意をした後、また机に向かつて勉強をし始めた。

なんてつたつて僕は受験生なんだもん。

一方忍はといふと、あれだけあつたドーナツを20分もかからないうちに全部食べきりやがつた。

その小さい体のどこにそれだけ入るんだよ。

僕でもそんな食えねえよ。

そして、さつき勉強をし始めたと言つたが何を嗅ぎ付けてか妹達が部屋に入ってきたため勉強は中断した。

「兄ちゃん、海に行くのー? いいなあ…で、一人で?」

「んなわけねえだろー!..」

「どこに一人で海に行く男子高校生がいるんだよ。

「じゃあ、誰と行くんだよ?」

「か、彼女だよ」

「兄ちゃん、二次元に興味を持つのはいいけど現実とは区別つけよ

うざ

「三次元だよー!..人間だよー!..本物だよー!..」

「ここまで信用してないんだよ、このでつかいのは。

「嘘だー!..」

叫んだのはちつこの方の妹である。
てか何？このひぐらし的展開。

「お兄ちゃんに彼女が出来るはずないよ！！」

「ストレートに失礼だな！！」

「じゃあ証拠を見してよお兄ちゃん」

「わかったよ。今度紹介してやるよ」

「それで兄ちゃんがラブプラスとか見せてきたらぶつ飛ばすからな

「だから人間だよ！！」

「こいつには一回説教が必要だな。

そして、勉強もそこそここいつもよつ少し早に眠りについた。

「じゅみトドリー 6（後書き）

今日は私情を入れすぎましたwww

フルナンド・トーレスの流れは完全に思いつきです

そういうやがハリさんと阿良々木姉妹って原作では面識ありましたつけ?

完全に忘れてしまったので会っていない体でお願いしますwww

あとダメ出しどかでも良こんで一言くれるとやる気が出るんで書いてくれたら嬉しいです。

まあやんと最後まで見てくれる人はいないと思いますがwww

「JANM」トドリー 7（前書き）

原作ではガハラさんはまだ阿良々木姉妹とはまだ会ってないみたいですね。たぶん。

偽物語で夏休み明けに紹介すると書いていたので。

あと1日1話ぐらいのペースで進んでるんですが内容が内容ですし
……ね。

じょみティコーーです。じつだ。

翌日、いつもより睡眠時間は短かつたものの寝不足感は全く感じなかつた。

準備を終えた僕は戦場ヶ原の家へ向かつた。

まだ暗い道を一人ママチャリを漕ぎながら戦場ヶ原の家へと向かつていた。

すると目の前に物体が現れた。

その物体が何で誰なのかは吸血鬼の部分が少し残つていて僕にはすぐ認識できた。

ハ九寺である。

なんでここにはこんな時間に歩いているんだよ。

僕はママチャリを置いてハ九寺に向かつてダッシュしようとした瞬間、ハ九寺はこちらを向いた。

その時、僕はビックリした勢いで前に転げてしまった。

「これはこれは語り部さん」

「確かに僕はこの話の語り部ではある。しかし、もつ一度だけ言つ、僕の名前は阿良々木だ」

「すみません、囁みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざわざじゃないーー？」

「夏季間近」

「真つ只中だよーー！」

いや、筆者のリアルタイムだと本当に間近だな。6円下旬だし。

「偶然ですね、阿良々木さん。私は今たまたま散歩をしていたんですけどよ」

「そんな仕組まれた偶然があるかーー！そんな偶然神原だけで間に合つてるよーー！てか子供が散歩するような時間じゃねえよ。散歩と言うより徘徊だよ」

今何時だと思つてるんだよ。

まだ午前4時前だね。

「徘徊とは高齢者扱いですか。これで私も口リから口リババアの部類に移籍ですか」

「お前のどこにババアの要素があるんだよ。がつづり子供じゃねえか。」

ロリババアと叫ぶのは、じつ…せつと危ねえ。

もう少しひいスピードを出すと買われるとこだつたぜ。

冷や汗をかきながら街灯で出来てゐる僕の影を見ると忍が田元まで出して睨んでいた。

何だよこの光景…子供の幽霊こ、影から田元まで出でてゐる金髪幼女。完全にホラーだよ。
貞子もビックリだな。

「まあ、ここで待ち伏せしていたのは事実ですけどね」

「田的はなんだよ」

「決まつてゐるじゃないですか阿良々木さん。出番ですよ！で・ば・ん！…これを逃すと阿良々木さんは海に行つてしまつますので私の出番はしばらく無いこと諦こますので眠氣を我慢して待つていました」

「どんだけ体張つて出たいんだよお前はー」

しばらくつて1話か2話ぐらいじゃないのか?
僕にはメタ的なことはわからないが。

「出番が欲しかつただけで話はないんですけど…氣をつけて行つて来て下さい」

「ああ。土産話でも期待しておけ」

戦場ヶ原の家に着くと戦場ヶ原は家の前で待っていた。

「おはよう。ムササビ君」

「僕をグライダーのよひに滑空する動物みたいな名前で言ひな。僕の名前は阿良々木だ」

「「めんなさい、噛んだわ」

「違う、わざとだ。てかそれはハ九寺のネタだ！！」

「ええ、わざとよ。何？何が文句あるの？」

「逆切れかよ……」

「何よ。どうせ阿良々木君なんかポケモンを初めてする時に何も持たずには草むらに入つたら普通はオーキド博士が止めて来てポケモンをくれるけど阿良々木君は草むらに入つたけど誰も止めてくれなくてそのまま、ポケモンと戦闘モードに入れぱいのよ。」

「ダイレクトアタックで死んじゃうよ……常に目の前が真っ暗になつた状態じゃねえか。てかこうなつたら状態じやない、常態が合つてるよ！なんで僕だけ丸腰で戦わなきゃ行けねえんだよ！」

生身の人間が鼠や鳩と鬪つてシユール過ぎだろ。

てか下手したら、動物愛護団体が黙つちゃいねえぞ。

「大丈夫よ。ポケモンには、道具にげんきのかけらがあるからそれを使えば」

「その主人公が瀕死で動けねえんだよーー！」

だいたいそんな序盤でその道具は出ないよ。

「まあ、私は家を出た瞬間に手持ち6匹で6匹ともLV100だけど」

「お前プロアクションリプレイ使いやがったなー！ てかそれの何が楽しいんだよ。ああいうのは育てながら越していくからこそ楽しいんだろうが」

てかプロアクションリプレイってまだあるのか？

「だつて強いポケモンを使って弱いポケモンを倒すと尋常じゃない早さでライフが減つて瞬殺でスカッとするじゃない」

「小さい頃からそんなこと思つてたのかよーー！」

未恐ろしい子である。

「何か今余計なこと思わなかつた？」

「い、いや何も思ってないよ」

相変わらず鋭いやつだ。

「そ、ならいいけど」

「そうだ戦場ヶ原、今度会つてほしいやつがいるんだけど」

「何? 結婚するの?」

「お前は僕の何なんだよーーー!」

「恋人よ」

僕が悪かつたよ戦場ヶ原。

「妹だよ。妹。あいつら僕に彼女がいることを信用してないんだよ

「そりやそりよ。だって阿良々木君だもの」

「何だよ、その僕の全てを否定する方に私はーーー」

自分の彼氏をそんな風に言つのはお前ぐらいいだよ。

「それより、そろそろいいかしら？お父さんも待たせているし」

「ああ、そうだな」

つてやっぱ父親同伴ジープかよ。

車に乗り込むと

「言つておくれけど阿良々木君、今はまだ深夜・早朝割増料金だから」「

「金取るのかよー！」

「へんなもいねね。少しの間だけお口やメタインにしてくれる?」

「一度と開かねえよ。」（うんた）たらお「チャッケだろ？か！…」

お金は儲けてはもちません」「冗談よ」

阿彌々木君の素行次第よ

「僕がいつ悪い行いをしたって言つんだよ。どちらかと言つてお前の方がよっぽど悪い子だよ」

「お父さん、あなたの娘は素行が悪い子らしきわよ」

なんだよ、前にもあつたような似た展開は！－。
これがデジヤヴか！－？

「それより戦場ヶ原、気になつたんだけじ神原と遊ぶ時つていつも
どじ行つてんだ？あの部屋にいるのせひすがに無理だと想つから」

「それは私に言つてゐのかしら？それともお父さんかしら？お父さ
ん、阿良々木君が神原といつもどく

「ひたぎさんです！－僕が聞いてくるのはひたぎさんです」

まあ、逆に戦場ヶ原のお父さんと神原の絡みも見てみたいつちや見
てみたいけど。

「やうねえ、ショッピングセンターでぶらぶらするべりこかしら。
他に何もないし」

「どうか。あとあいつを呼びに行つたらこつも裸なのか？」

「こつもあの子が私の家に呼びに来るからわからないけど、今の部
分は流せないわね。どじこじひとつまたか私の可憐い後輩に手を出
してないでしょ？」

「出すわけねえだろ！－！」

そんなことしてみる。

以前のホツチキスひたぎに逆戻りじゃねえか。

「ならいいのだけれど」

「少しごらりこ僕を信用しろよ」

「信用してなかつたら神原のことを任していいなし、こんな話もしないわよ」

「そうか、ありがと」

「何よ。気持ち悪いわね

「気持ち悪いとは何だよ！人人が感謝しているのに

「今日は暑いわね、つて言おうとしたら噛んだのよ。私がそんなはしたないこと言つわけないじゃない。変な言いがかりはやめて頂戴たじやねえか」

「それは遠い昔の話よ。あの頃は若かったから」

「近いー昨日の話だよーー」

こうした話を繰り返してゐるうちに海に着いたのであった。

クロネコ「勝手に出てこないで下をこよ~。」

八九寺P「といふか阿良々木さんと戦場ヶ原さんを会わすまでの繋ぎが欲しかったんでしょ?」

クロネコ「バレたか」

八九寺P「バレバレです」

クロネコ「ちなみにP~2000、ユニーク300を越えました。こんな駄作に付き合つて頂いて本当にありがとうございました。」

八九寺P「本当そですよ。てかあなたP~とかユニークの意味わかつてないでしょ?」

クロネコ「うん。なので誰か知つている親切な方がこのページを見たら教えて頂けたら僕は嬉しくて泣きます」

八九寺P「そこまでですか」

「はじめトライバー 8 (前書き)

いや～そろそろネタが思いつかなくなってしまったつまました。

とか今更ですが標準語つて難しいですねwww

いつもは関西弁なんど向か返になつてしまこます。

では、はじめトライバー 8 です。どうぞ。

海に着くと戦場ヶ原のお父さんが帰つて行つた。

これから仕事らしい。

仕事があるのに早い時間から送つてもうつて本当ありがとうございます。

「ところで阿良々木君」

「あん?」

「朝食まだだつたわよね?」

「ああやつこややつだな」

現在7時前である。

「思つたよつ早く着いたので朝食にしてましょつ」

「朝食つて言つたつて、海の家はまだ開いていないし、近くに店やコンビニもない」

「だからそのためじゃない」

まさかこれは、手作りのサンドイッチを作つて来てるから食べましょつ的展開!?

「それつてもしかして」

「そうよ、今から阿良々木君に海に潜つてもうつて魚を探つてきて
もらいます」

「なんでだよ……なんで僕が黄金伝説的なことを朝一でしなきゃい
けねえんだよ……」

「クソつ少しでも喜んだ僕が馬鹿だつたのか?……不幸だ

「じゃあもう一つ選択肢を増やしてあげる。」この道を5キロ程行つ
たとこに「コンビニ」があると思うから全力疾走で行つて来て頂戴。」

「どつちもやだよ……だいたいなんで全力疾走だよ。倒れるわ……
あとあると思つてて知つてるのかよ?」

「ええ、感よ」

「知らねえんだな」

「なんで海の家開いてないんだよ。僕つてやつぱ不幸な人間なのか?」

「そうね、阿良々木君に幸福なんてやつてくるわけないじゃない

「だから人の心の中を勝手に読むなよ。しかも言つてる」とは失礼
極まりないし」

「違ひわよ、モノローグを読んだのよ」

「ほとんど一緒にや……」

「まああれね、不幸中の災いよ」

「何も上手くねえよ……」

「冗談よ、ちやんと作って来てるわよ。サンデイイッチだなび

「えー…マジで…? 本気で嬉しい

「ベ、ベジニアントタメニシクッタンジャナインダカラネ。」

「別にシンゲラなくてもいいよ……」

てか出来ないんだつたらするなよ。

カタコトで棒読みじやねえか。

「や、食べましょ」

「おひ

戦場ヶ原手作りのサンドイッチはお世辞抜きで抜群に上手かつた。こいつ料理の練習でもしてたのか?

そういうじてこるうちに人も集まりだし、海水浴らしい賑わいにな

つてきた。

到着して1時間半、僕達はようやく着替えることにした。

本当1時間半も何してたんだ僕達は。

着替え終わつた僕らは会流した。

戦場ヶ原の水着姿は初めて見たが……まあ文句なんてあるわけないじやん。

と見ていると

「何ジロジロ見てるのよ、」の変態ロリコン野郎

「人聞きが悪いぞ。僕がいつもロリコン紛いなことをしたつて言つんだ!!」

「略してクズ」

「何も略してしないよ!!違つ悪口が出てきただけだよ!!」

「変態ロリコンクズ野郎」

「繋げるな!!」

「こいつは悪口を編み出す天才か!?

「それより夏つてテンション上がるわよね」

「僕には年中同じように見えるんだが」

「失礼ね、私だって夏の曲を聴くとテンション上がるのよ」

「へえ、それは初耳だな。どんな曲聴くんだよ」

「a.ik.oとか結構好きね。歌詞が可愛いし」

「a.ik.oのオススメとかあるのか?」

「この流れからしたら夏には関係ないけどカブトムシとか好きね」

「あああの曲か。確かに良いなあ」

「少し背の高いあなたの耳に寄せたおでこへ」

なんか歌い出したぞ。

まあガハラさんの歌なんて聴くことなんてないし、このまま歌わすか。

「甘い匂いに誘われた私は下柳」

「カブトムシだよーー！オッサンが誘われたら気持ち悪いだけだらうが」

てか何で阪神タイガースの投手の名前なんか知ってるんだよ。

「あと大塚愛のスマイリーもいわね。」

「まあ夏らしくテンションも上がるが」

また替え歌するんじゃねえだろ? なあ。

「殴りたい時には~そつと側に移動する 笑つて~笑つて~君と明日会いたい~」

「そんなの歌われて会いたくなるわけねえだろーーー。」

なんだよこのロクな曲は。
お前にぴったりな曲だよ。

海に入るまでにツツココ疲れが出てるやうだ。

「いやなんもんで疲れるとは阿良々木君も落ちたものね」

「だから平然とモノローグを読むなって言つてるんだよ」

「神原の師匠はやっぱお前だつたかーーー。」

「先に言つとくけど神原を口くしたのは否定しないけど変態にな

つたのは知らないわよ

「まあお前は少しは関心してるよ」

「話は変わるけれどこの話の筆者も結構シシ ハリの場面に出くわすらしさわよ」

「そななのか?なんか話が合つかもしれないな。

「本当に変わるなあ。例えばどんなだ?」

「その前に、この筆者は「ブクロが大好きだと」ことを覚えておいて頂戴」

「ああ」

「以前「ブクロがCD発売の時にライブ映像をプリントした箱のティッシュ」を2種類、数量限定のローソン限定で発売したのよ」

「ああ」

「3件周つてよつやく1種類は買ったのだけれど、あと1種類がどうしても売つてなくて、仕方がないからバイト終わりに近くのローソンに行くことにしたの。夜12時ぐらいに行つたら探しても無くて、ダメ元で聞いてみよつとレジに行つたら丁度若い人からおじいちゃんに変わつたのよ。まあこの時点で誰でも嫌な予感はするわよね」

「正直おじいちゃんよりかは若い人の方が良いな」

「その時に「すこません。」とクロのティッシュを買ってもらいましたか?」と聞いたら「はいはい、」とクロのティッシュね。こっちこっち」と返事が返ってきて筆者はテンションMAXで付いて行つたら、鼻セレブのポケットティッシュを渡されたの」

「「」とクロのティッシュじゃなくて、小袋のティッシュじゃねえか?一文字にしねえと分かりづれえよ?」

しまつたツツ「」を入れてしまつた。

「話のオチを一文字も間違になく言わないでくれるかしじ?」

「あ...悪い」

「KYOね」

「空氣読めないか?...今のは言われても仕方がないな」

「違ひわよ、曆ヤダよ」

「僕自身を全否定ー?」

「まあ筆者と阿良々木君が違うところは、筆者は心の中でそれをなんだそつよ。周りのことを考えて」

「その言い方だと僕が周りを考えていないと聞いちゃうんだが」

「え...いや...その...」

「濁すなよー...どうせならちやんと言えよ」

「わかつたわ。邪魔」

「その選択肢は間違ってる……。」

「そんなことより泳ぎに行きましょ」

「うやむやにやるな……。」

と言いつつも泳ぎに行く僕であった。

「みなみトレイラー 8 (後書き)

話が進まねえ ｗｗｗ

文字稼ぎに僕の実話まで入れるとかもうこの小説終わってるな ｗｗｗ

まあ地道に頑張りますよ。

てかそろそろ凹物語発売じゃないか！！

「じょみトイリー 9 (繪畫セ)

早くも9話なんですが普通小説つてこんな早く書くものじゃないですかよね？

いや……あ……これは小説とは言えませんがwww

とか、グダグダな会話ばっかやからすぐ書けるんか／(<〇>)＼
とつあえず、じょみトイリー9です。ビリビ。

よつやく、海に来て初めての水に触った。

いやーやはり夏の海は気持ち良いくいな。

どうせなら神原も誘つてあげればよかつたかな。

「そういや戦場ヶ原、お前つて泳げるのか？」

「ええ泳げるわよ。あの出来事以来泳いでいないけど

あの出来事とは「存知の通り蟹の件である。
蟹に行き逢つた少女、戦場ヶ原ひたぎである。
戦場ヶ原は以前おもし蟹に憑かれ、重さを根こそぎ持つていかれた。

しかし、現在はその件も解決し重さも戻つている。

まあ適当な神様だったため一時的に僕の体重が増え100キロになつたのはビックリだつたが。

だが、シリアスな話は今回はNGだ。
本当にKYになつてしまつ。

「へえ意外と泳げないのかと思つてたよ」

「見ぐびらないで頂戴。私のあだ名はかっぱみぱみ」

「お前はどいじやの喜翠荘の従業員だよーー。」

人のあだ名を勝手に自分のものにするんじゃねえよ。
てか、いろいろなマンガやアニメを出すなよ。
いつかギヤラが発生するだ。

「嘘なんて言わなきゃバレないのよ」

「今、自分で嘘だと嘘いつとを言いつしまつてるの」

もしかして、ここつて案外天然なのか?

少し遊んで時間を見に行くと時間は正午を過ぎていた。
まあ、あれだけ喋つていたからな。
一体何しに来てるんだよ僕達は。

「お皿にしみしそう、阿良々木君」

「やうだな」

僕達は海の家で昼食を食べることにした。

僕達は、たこ焼きと焼きそばと冷やし中華を一つずつ頼んだ。

「阿良々木君、たこ焼き食べさせてあげる。あーん」

前もこんな状況あった気がするが、悪い気なんてするはずがない

「あ、あーん」

その時、戦場ヶ原はたこ焼きを床に落としてしまった。

「いめんなさい、私としたことが滑ってしまったわ」

まあ、今はまだ見てもわざとじやないよ見えたので

「ああ別にこよ」

戦場ヶ原は、その後ゆっくりたこ焼きを拾つとそのまま

「ではまた一回、あーん」

「あーん。じゃねえわ！落としたものを食わすんじやねえよ」

「何？阿良々木君、もしかして30日ルール知らないの？30日以内だったらセーフなのよ」

「アウトだよーーー。詰うんだつたら3秒ルールだらうがーーー。30日も経ついたら菌が付くぞ。」

「か30日も落ちたらただのゴミだよ

「とにかくは阿良々木君は30日経った状態でことね」

「誰がゴミだよーーー。」

もうモノローグを読まれることに關してなんの抵抗も無くなつた僕であつた。

昼食を食べた後、戦場ヶ原は

「そういういや私つてスイカ割りつてしたことないのよ

「そういういや僕もやつたことないな

「というわけで今からスイカ割りをします

「唐突過ぎだろ。あとスイカなんてないじゃないか

「大丈夫よ。阿良々木君の顔を緑と黒で塗つてスイカの代わりに割ればいいじゃない

「事件だよーーー。割つて流れてくるのは果汁じゃなくて血液だよーーー。」

「いいじゃない、色は一緒に」

「そういう問題じゃねえーー！」

「じゃあ、今回は許してあげる

今回はつて、次はするのかよ。

とりあえず僕は、なんとか身を守ることができた。

「それより誰かジョーズみたいなサメに襲われるグッディベントは起きないかしら」

「バッディベントだよーー何を恐るじいこと言つてんだよーー」

「かこにつの誰かつて絶対僕のことだな。

「ひたきクラブよりひたきシャークの方がよかつたのだけれど」

「知るが、そんなことーー！」

ヤダよ、鮫に行き逢つた少女つて。

恐ろしい話をされたものの、その後は当然平和に過ごせた。

てか僕に何かあつたらこの話が出来てないし。

楽しい時間はすぐに過ぎるもので気付けば海が太陽でオレンジにな

る時間になつていた。

「戦場ヶ原、そろそろ帰るか」

「やうね」

そつして、僕達は着替えを済まして駅へと向かつた。

電車の中で戦場ヶ原は、

「冬は以前言つてた通り北海道に行くから予定は空けときなやこ」

「北海道？」

「忘れたのかしら？私の家で阿良々木君に私が裸を見られた時に言つたじやない」

「僕が無理矢理見たみたいな言い方をするなーーお前が勝手にあの状態になつたんだろうがーー！」

「女性の方が立場が弱いのを利用して泣き寝入りにさせようて魂胆ね。酷いわ阿良々木君」

「人聞きの悪いこと言つんじゃねえ！ーてか僕とお前とならお前の方が立場上じやねえかー！」

「自分で言つて情けないと思わない？」

「うるせーーー！そんな哀れな田で見るな」

言つた瞬間に思つたよ。

思つたけど事実じやないか。

「それより思つ出したかしりっ！」

「思つ出すもなにも、あれ本氣だつたのか？」

「当たり前じやない、私は嘘をついたことがなーのよ

「その言葉が既に嘘だよ」

「私が言つてこるのは嘘じやないの、冗談よ」

「屁理屈だーーー！」

「物は言つてよ」

「どうちりでもこーよーーー！」

「とつあえず冬は北海道行くから」

「行くつて言つたつて推薦で決まつていい戦場ヶ原とは違つて僕は受験がある」

「そんなもののセンター試験で受かりやなんの問題もないわよ。そつ

すれば2円中旬ぐらいにこなは行けるわよ

「簡単に言つなよ……。」

「何? 私と羽川さま… 羽川さんが見てあげてるつて言つては受かる
気配もないって言つの?」

「今、また羽川様つて言つたか!?」

「言つてないわよ、変な言つてがかりはやめなさい。それよりじつ
すうの? 受かるの? どうなの?」

「うつ… たしかにこれで受からなかつたら僕はもう少しも受からな
かもしねいぞ、本当に。」

「う… 受かるよ! します」

「当然よ。」これで阿良々木君が滑つたらもう人生終わりよ

「そんなこなのかー?」

「うつむせえーーー! 僕の話が滑つたんだよーーーあと向回も滑るつもつ?」

「え… そんな… 本人に言つと… ねえ」

「え… そんな… 本人に言つと… ねえ」

「何だよそのリアルな感じは！？」「

落ち込むぞ。本気で落ち込むぞ。

そして、地元の駅に着き、戦場ヶ原を送った後、自分の家に帰宅した。

「よみトイリー 9（後書き）

ついに裏サブタイトル「海物語 - こよみシー」が終わりましたwww

次はどんな展開にしようか今考えています。

次回、久々にファイヤーシスターズの登場です？

ついに一桁になりました。

さて、今回もおふざけが過ぎてますが見てあげて下さい。

「あなた、イニー、10歳す。」「うわあ。

家に着くやいなや妹達が駆け寄つてきた。

こんな風に書くと兄の帰りを待つていた感じで微笑ましく思われそうだがここからは絶対違つ。

いや、ある意味待つていたか？

「（お）兄ちゃん、お帰りー」

「ああ」

「で、何か面白ことあったか？」

「面白ことって？」

「例えば、ジョーズに襲われたりとか」

「お前は戦場ヶ原か！？」

「このでつかいのもいつか戦場ヶ原みたいになるのか？」

……てか、ダンベルを頭に落とそうとしてる時点で同じよひなもんじゃないのか。

「じゃあ、イカが侵略してきたり

「しねどーーー！」

「どこのそのイカ娘だよ。」

「なーんだ、イカは侵略しないでゲソか

「語尾がおかしいー?」

「それより、お兄ちゃんいつ彼女さんを紹介してくれの?・今田は連れて来てないみたいだけ?」

「ああ、そういうのそんなこと言つたなあ。今度な今度

「兄ちゃん、そんな」と言つて本当まいないんじやねえの?・

「いのよーー戦場ヶ原ひたきつてお前でこるよ

「一二次元で?」

「現実リアルだよーーしかも」の話は二回目だよ

「あ~私、都合の悪いことと良悪いことは作られるように作られてるだよ」

「全部じゃねえかーー」の鳥頭ーー

「何言つてんだよ兄ちゃん、私ポーネテールだからどうちかと言つたら馬だぜ。それぐらいわかれるよ」

「その頭の」と言つてんじやねえよーー

「ここつは馬鹿なのか？真正馬鹿か？」

「先が本当に心配だよ、ここつ。」

「とつあえず、約束だから忘れないでよ、お兄ちゃん」

「ああ、わかつてよ。僕は火憐りやけんなからすぐ忘れてるじやないか。」

「なによ？」

「私がここつすぐ忘れるようになじをしたつて聞いたんだよ。」

「おこ、でつかいの。すぐ忘れたじをすぐ忘れてるじやないか。」

「ここ今までのじで話してたじやないか。」

とつあえず、このまま話してると疲れそつだつたので自分の部屋に戻ることにした。

部屋でくつろいでいると携帯が鳴つた。

ディスプレイには

「戦場ヶ原ひたぎ」

の名前が表示されていた。

「もしもし、やつは？ 戰場ヶ原

「おひ、やの声とアホ顔は阿良々木君ね」

「テレビ電話じゃないんだから顔が見えるわけないだろ……」

「か自分でかけてきたのにわからないのかよ。
さすが神原の師匠。」

「冗談の反対よ」

「事実じゃねえか！！」

「それより今日はありがとう。楽しかったわ」

「ああ、僕も楽しかった」

「それで考えただけれど夏休みに勉強の息抜きに今度は山に行こうと思うのだけれど」

「ああ、僕は全然構わないが」

「私あのアニメみたいに一回アルプスの山で大きいプランコに乗りたいのよ」

「あれは実現不可能だ！！」

「何のアニメだつたかしら……思い出したわ。大自然の女ハイジね」

「アルプスの少女ハイジだよ！！」

なんだよその野性味溢れる生活をしてそうな女は。

「クララもビックリですぐ立つよ。

「知ってるわよ、一緒にいる犬の名前も、

「なら聞いてみようじゃないか」

「パトランシス」

「ヨーゼフだ……最終回になつてもハイジは天に召されねえよ……」「ちょっとフランダースの犬とアルプスの少女ハイジが混ざつただけよ。これでも私はアーラタよ。」

「ほお、自信ありげだな」

「ええ、昔のアニメも今のアニメもどんと来い超常現象よ」

「お前、誰がTRICKの上田次郎を知つてんだよ」

「それより問題を出してみなさい。阿良々木君をギャフンと呟わしてあげるわ」

「じゃあ、アップ程度に…「マル」が母アンナを尋ねるためにアルゼンチンへ旅に出る物語は?..」

「馬鹿にするのも大概にしなさいよ。ほととど答えが出てるじゃない

「だから、アップだよ」

「答えさせ、母をたずねて二千歩」

「近えよ……」近所じゅねえか……」

「今のはわざと間違えてあげたのよ」

「じゅあ次は、女子高生が武道館を田標に音楽をしたり、高校生活の日常を描いたのはのぼのアニメは？」

「へいおん」

「けいおんだよ。確かに平穏だけど」

「わつと簡単な出しなさこよ」

「逆ギレー? てか、けいおんも結構簡単だよ……」

「化物語でひたぎクラブの主役は誰でしょ?。とか阿良々木暁の彼女は誰でしょ? とか西尾維新さんが書いてる小説の中で斎藤千和が担当してるキャラは誰でしょ? とか出しなさこよ」

「全部お前じゅねえか……」

そんなひたぎ無双な問題がどいこにあるんだよ。

「話は戻るけど云つて云つたけどキャンプみたいな形で一泊するつもつだから」

「なにかの恋のキャンプ場じゃダメなのか？」

「阿良々木君、この前私が連れて行った天文台覚えてる?」

「ああ、星が最高に良かった」

「あれを超えるぐらいの星をもつと近くでみたいの。だから山がいいの」

「なるほどね」

「だから阿良々木君、それまでに探しておきなさい」

「はいはい、わかったよ」

「はこせの回よ」

「それじゃ無視だろ? がーーーお前絶対怒るだろ」

「当たり前じゃない。誰だつて無視されたら怒るわよ

「無茶苦茶言つんじゃねえーーー。」

「探して見つかったら、いつも通りのある田に今夜星を見に行こうつて言いながら立ち上がって言つてよ。そうしたら、皆でたまには良こ」と囁つんだねつて笑つてあげるわ

「完全に君の知らない物語じゃないかーーー。」

「いや、ホント名曲だよあれは。

次世代の子供達へと伝えていきたい曲だよ。

「いや、名曲を出すなよ。

「まあ、探しておくれ」

と電話を切り何気なくカレンダーを見た。

今日は7月3日の日曜日か。

あれ？僕なんか忘れない？

それも重要なこと…。

その時、忍が出てきた。

いきなり出でなよバツクリするなあ。

「お前様よ、重要なことっていつのま、あの蟹の娘の誕生日じやないのか？」

「そうだそつだガハラさんのお誕生日……だ！？」

「そうだ、戦場ヶ原の誕生日だ！？」

「ナイスだ忍！？」

「ファインプレーだよ

「忍よく気付いた。」褒美にチューをしてやろう

「それで儂になんの得があるのじゃ！？」

とりあえず、明日何かプレゼントを買いに行くか。

え～図物語発売といつひとで読破してきました。

なんていうか…うん…まさかの展開といつか…あまつまつとネタバレになるんで言わないです。

わすが西尾維新さんですよ～

あれを見たらここんらばせたやつを書いて良いのかを本気で思います。

書くのを止めよつかとも え

ひとつあえず、次回をお楽しみに～

「じょみ」トイリー 11 (前書き)

まあ、特に前書きではないです。

いつも通りのグダグダ感です。

では、じょみトイリー 11、こつてみよー。

僕は気付けば寝ていたらしく今日は妹達に叩き起された。

叩き起されたのには普通は無理に起されたことだが僕の場合は文字通り叩き起されたのだ。

ここで叩き起されたまでの回想を教えようと頑張つ。

昨日、お風呂に入った後、忍に「褒美のキスをしてやる」とした時、吸血鬼パンチをアゴに喰い、1R、TKOとなつたのだ。

その時、氣絶したまま眠りについたらしく。

永遠の眠りにつかなくてよかつたよ。

そして今朝、妹達に叩き起されたのだが、起こし方が、ちつさい方の妹が、耳の横でフライパンを叩いて、僕がビックリして起き上がつたところをでつかい方の妹の右ストレートを喰らつたのだ。

どんなコンボだよ。

月火ちゃんのはまだ百歩譲つて良いとしよう。

「おー。」

「あ、兄ちゃん起きたか！？」

「ああ、起きたよ。お前達に対する怒りがな

「なんでだよー。私達は兄ちゃんの為に起こしてやつてんのこむる。
後、前兄ちゃんに怒られたからダンベルは使わなかつたのに」

でつかい方の妹はブーブー横で言つている。

ダンベルを使わるのは当たり前だよ。
お前は僕を人間だと思つていなideる。

いや確かに純な人間じゃないんだけどな。

「おい、でつかいの。起こしてくれるのは良いよ。ただ、お前が殴
る必要はなかつたよな？」

「えー！…だつてフライパンだけで終わつてたら私の出番ないじや
ん」

「お前の出番なんか知つたこひちやねえよ！…」

僕は月火ちゃんを先に下に降ろし、でつかいのには軽く説教をし、
学校へと向かつた。

しかし、説教と言いながら例の歯ブラシ勝負になりかけたのは口が
裂けても月火ちゃんには言えない。

何で言えないかって？

だつて言つたら僕の体が裂けそつだもん。

通学路を歩いていると田の前に大きいリュックを背負ったクワガタ…ではなかつた。

ツインテールの少女がキヨロキヨロしている。

八九寺である。

しかし、僕は学習能力はある。

この前の件で、悪いことをしたと思っている。

だいたい僕は八九寺のことそんなに好きじゃないし。

仕方ない、遠回りして行くか。

僕は走り出した。

八九寺に向かつて。

「はーちーくー」

その瞬間、僕の右足を何かが掴んだ。

と同時に、アスファルトの上で綺麗なヘッドスライディングをすることになつてしまつた。

犯人は、わかつてゐる、忍だ。

「痛え。おい、忍何するんだ！？」

忍に小さこ声で聞くが返事はない。

その時、八九寺が近づいて来た。

「何を一人でアスファルトの上でヘッドスライディングを決めているんですか？斧乃木さん」

「おい、八九寺、僕を「僕はキメ顔でそいつ」とこいつ語尾を付ける僕つ娘みたいな名前で呼ぶな」

「失礼、噛みました」

「違ひ、わざとだ」

「噛みました」

「わざとじゃない！？」

「針撒いた」

「危ねえよ！？」

お前はまきびしを撒く忍者かよ。

てかお前その時いないじゃないか。

なんで、余接ちゃんのこと知ってるんだよ、さすが八九寺P。

どこもかくにも今日も楽しかった。

「海はどうしたか？ 阿良々木さん」

「ああ普通に楽しかったよ」

「やうですか、残念です」

「なんでガッカリしてんだよー」

「だつて阿良々木さん」とだから当然ジョーワーズ並のサメに襲われたりとかしたんじゃないかと思つてましたもので」

「なんでお前までやうなるんだよー」

「阿良々木さんは襲われる以外に需要があると思つてゐるのですか？ それって一体誰得なんですか」

「得もクソも関係ねえよーー何だよ需要つてーーお前らは僕をどうまで不幸にする気だーー」

「それは阿良々木さんの右手に宿る幻想殺しのせいです」

「やうこまで言つたら完全にアウトだよーーお前はゼリの世界と混同させいやがるーー」

「私を誰だと思つてるんですか？ 別の世界を持つてくねぐらに私に

は容易ことですよ上条

「アウト……それ以上喋んじゃねえ」

これ以上ハ九寺と話していると、とある世界に飲み込まれそうだつたので僕は無理矢理話を終わらして学校へ向かうことにして。あくまでもとある世界つてこいつのは僕はわからないので皆さん想像で補つてもらおう。

だつて、わからないから「とある」と言つてこるのだから。

と心中で一人で思つていると

「まあ、とある世界とこいつのは魔術や科学が交差してゐるよ

「僕がせつかく濁していたのに綺麗に説明してんじゃねえよ、戦場ヶ原！」

「綺麗だなんて朝から大胆ね。そんなこと朝からストレートに言われたらさすがに私でも恥ずかしいわよ、阿良々木君」

「お前のことを言つたんじゃねえ……」

「そうよね、阿良々木君」ときの虫けらが私の魅力に気付くはずないわよね

「気付いてるよ……僕には勿体無いことぐらい知つてるよ……」

「や、ありがとう」

気付けば周りのクラスメイトは僕達の方を見ていた。

やられた、完全に戦場ヶ原に嵌められた。

モロく

「朝から楽しそうだね、阿良々木君」

「おお、羽川」

「おはよう」

「ああ、おはよう。てか楽しくもなんともねえよ。どうせやてもいつもが僕をいじって楽しんでるだけじゃないか」

「そんなこといつづけやつて」

「こやこやマジだつて。あと今日の勉強の担当って羽川だったよな？」

「うん、やつだよ」

「すまん…今日は休みにしてくれ」

「それはこいつ何があるの？」

「実は、戦場ヶ原の誕生日プレゼントを貰こられた」と呟つて

「そりやもうすぐ戦場ヶ原の誕生日だつたねえ。それなら今日は特別に休みにしてあげる」

「サンキュー羽川。その分夜にしつかりやります」

「それより誕生日覚えてるつて阿良々木君偉いね」

「え…う、うん。ア、アタリマエダロ」

「カタコトになってるよ」

「ソソナコトナナイゼン」

「どこの時代のどこの人よ。まさか忘れてて忍ちゃんが教えてくれたとか？」

お見事です、羽川さん。

てか羽川がツツコミを入れた！？

なんでこんな時にボイスレコーダーを回してないんだ僕は。

「何でも知ってるな、羽川は」

「言わないよ？」

クソッバレたか。

良いパス出したと思ったのになあ。
オフサイドになってしまったか。

「忍ちゃんに今度お礼にマスク買つてあげなよ?」

いや、羽川。すでに土曜日に購入済みだ。

てかなんてことを言うんだ！？

これで忍が起きてたら今日の帰り大変なことになるぞ。
頼むから寝ておいてくれよ。

やつして僕は、忍が起きていないことを祈りながら学校での一日を過ぎした。

八九寺「不覚です」

クロネコ「いきなり何をでせうか！？」

八九寺「以前出た時に後書きで出るのを忘れていました」

クロネコ「いやーおかげで書くのが楽でしたよ」

八九寺「もうこれは死ぬしかないです」

クロネコ「そんなにですか！？てかもう死んでるじゃん」

八九寺「幽靈は2度死ぬんですよ」

クロネコ「死なねえよ」

八九寺「成仏する時です」

クロネコ「僕が悪かつたです。それだけは勘弁して下さい」

八九寺「まあ、こんなクソ小説で私は成仏しないですよ。それこそ悔いが残ります」

クロネコ「う…」

「じゅみ」トドリー 12（前書き）

補足ですが前話での阿良々木君とバサ姉が話している時、ガハラさんは席を外しています。

ガハラさんがいるのにガハラさんの誕生日の話をする時、阿良々木君は馬鹿になつてしまつので一応補足をさしてもらひます。

授業が終わり、戦場ヶ原に一緒に帰ろうと誘われたが、なんとか誤魔化して現在、例のショッピングセンターにいる。

さて何を買つたら良いものか。

誰か連れてこればよかつたかな。

神原は、暴走するからアウトだし、羽川はわざわざ勉強を休ましてもらつてるから何だか悪いし、千石はそういうなわからなさそうだし、八九寺に關しては小学生だしどこにいるかすらわからないし。僕つて本当友達少ないな。

なんだかアンニコイな気分になつた僕であった。

「あ、兄ちゃん」

なんだか聞いたことのある声だなあ。

振り向くと僕より身長の高い女の子が立つていた。

「「じゅみ」で何してんだ？ でつかいの。また正義「じゅみ」か？」

「だから「じゅみ」じゃねえって、正義そのものだ」

「まあ、どうでもいいけど。月火ちゃんは一緒にじゃないのか？」

「うん？ そりゃ時には別行動もあるつてもんだぜ兄ちゃん」

「ふーん。で、何してんだ？」

「何つてショッピングセンターなんだから買ひ物に決まつてんじやん。そんなこともわからねえのか？馬鹿だなあ、兄ちゃん」

鳥頭で馬鹿な妹に馬鹿呼ばわつをせれてしまつた。

「いや、それはわかつてゐるけど……まあいいや」

「それより兄ちゃんは何してんだよ？」

「何つてショッピングセンターなんだから買ひ物に決まつてんじやん

しまつた。馬鹿な妹と同じ返しになつてしまつた。

「ああそつか……買ひ物か。なんで私は気付かなかつたんだよ」

それはお前が馬鹿だからだよ。

ほんの十数秒前の自分の言動を覚えてねえのかよ。

「で、何買ひに来たんだよ？兄ちゃん」

「まあ、誕生日プレゼントだよ」

「自分の？」

「んなわけねえよー！彼女のだよ」

「兄ちゃんいい加減田を覚ませよ。存在しない人物に買つても金の無駄になるだけだぜ」

「だからこいつらんだらうがーー！」

「じゃあ証拠見せりよ」

「だから今度会わすつて言つてるだろ」

「[写真とかないのかよー」

「[写真？」

[写真なんてあつたか？
と携帯のフォルダを開く。
すると1枚のツーショット写真が出てきた。

あーそりゃ海に行つた時にテンション上がり過ぎて撮つたんだつたけ？

「INの前海に行つた時のやつなら」

と若干ドヤ顔で見せる。

「う、う、嘘だー。嘘だー。こんな綺麗な人が兄ちゃんの彼女なわけない！…あーそうだ。これは夢なんだ。兄ちゃんビンタをしてくれ

僕は実の妹にビンタを食らわした。

しかも往復。

「ほり痛くないってことはず夢だ。よかつたー

「お前はどこまで頑丈なんだよ…本当に神経通つてるのかー？」

「じゃあ、次は兄ちゃんが叩かれろよ
「なんでそうなるんだよー？お前がビンタしきつて言つたからや」

「パチーン」

説明しなくてもわかるだろう。

ビンタをされたのだ。

実の妹に。理不尽な理由で。

「痛えー！…何しやがる」このでかいのは…。

ショッピングセンターで実の妹をビンタしひんタをされる。痛くて痛い人になってしまった。

「わかったよ。兄ちゃんに『彼女がいるのは認めるよ。てか[写真見せられた時点で認めていたよ』

「じゃあこのビンタは意味ないじゃねえか」

「えー? 私は兄ちゃんにビンタされただけで得したと思つてたが」

「Mかつけー」

「うん。実にMカツコイイ妹であった。」

「で、何のプレゼント置いたんだ?..」

「いや、それで今迷つてて。ま、プレゼントとかあげたことないし」

「無難にペンドントで良くな?..」

「ペンドント?..」

「そう、ペンドント。自分もお揃いのやつ置いたらこいつちゃん」

「やうか。サンキュー我が妹よ」

「なになに礼なんていらな?..よ。お金さえくれれば

「がつつつ貰う気じゃねえか!..」

その後、結局妹と一緒に買い物に行つたのだが、というか勝手に付いてきただけなのだが、店員に「彼女さん大事にしてあげて下さい」と言われるハメになつてしまつた。

その言葉に火憐ちゃんは何故か上機嫌になつていた。
こいつは一体なんなんだ。

「私達恋人同士に見えるのかな？兄ちゃん！！」

何を満面の笑みで言つてやがる。

「彼氏のいるお前が何でも喜んでるんだよ！…しかも、実の兄相手に」

「それは心配ない。瑞鳥君は好きな人で兄ちゃんは愛する人だからセーフだ！！」

「アウトだよ！…」ふうふうとアウトだ！…

こいつには一回、話し合いが必要だな。

ショッピングセンターを出て、火憐ちゃんは走つて帰るといつこと別々に帰ることにした。

途中家へ向かって歩いていると

「お前様よ。ミズドせりけじやないだ？」

「うん。影の中から影をみる。」

「ミズド、ミズド！」こつれこつれと狙つてくるな。

「え？ こや、別にミズド寄る予定なんてないが」

「何じじやヒー？」

と忍は水族館のショーアイルカ並のジャンプをしながら影から出でた。

「儂が蟹の娘の誕生日をせつかく教えてあげたつて言つてはやんな
扱いをするかの？ あの委員長も言つておつたじやね。礼をしろと

起きてたのかよ。聞いてたのかよ。

なんであの時間に起きてるんだよ。
いつも寝ているのに。

「EJの前買つたとこだら」

「それとこねては別じやよ」

「今度買つてやるよ

「ほお、恩を仇で返すんじやな

「そんな大それたことじやないだら」

「儂にとつては重要なことじやよ」

「わかつたよ。うつぐらこでいになら買つてやる

「10個

「なんだこらないのか」

「5個でお願いします」

結局ミスドで忍にドーナツを買つて家へと帰つた。

家に帰ると玄関にびしょ濡れの火憐ちゃんが立つていた。

「なんだ? 風呂にでも入つたのか?」

「いいや、全力疾走で帰つて來たから汗かいたんだよ

いや、それは汗つてレベルじやないぞ。

完全に水をかぶつたみたいになつてるじゃねえか。

そんなことを思つてこらつちに僕の体が一気に湿つた感触を帯びた。

でつかい方の妹が抱きついてきたのだ。

「いきなり何しやがる！！」

「いやー」の不快感を兄ちゃんにも味わつて欲しくてー

「味わいたくねえよ!! なんの嫌がらせだよ。離れろーーー!!」

その時、2階からちつこい方の妹が降りてきた。

「何してるん?」

なんで関西弁なんだよ。

「頼む用火ちゃん、二ハツを引き剥がしてくれ」

「玄関で兄妹で何イチャイチャしちゃんねん。ちよい待つとき

だから、なんだよその関西弁は。

そう言いながら奥へと歩いていった。

「ん?」れつてヤバいんじゃね?

「おい、でつかいの一今すぐ離れる。離れないと大変なことになる」「何言つてんだよ兄ちゃんは。まさか抱きついたことで欲情したとか!?」

「するわけないだろ!うがーー!」

そんなやりとりをしてるうちに用火ちゃんが戻ってきた。

右手に果物ナイフを持って。

「こつまでそうしてるつもりなん?」

僕は本気で身の危険を感じたため火事場の馬鹿力といつやつが出たのだろうか。

でつかいのを引き剥がすことができた。

その後、僕と火憐ちゃんは用火ちゃんに説教をされたのは言つまでもない。

その後は何事も無く日々が過ぎ、7月7日、戦場ヶ原の誕生日を迎えた。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なあなあ月火ちゃん、今日関西弁使つてたよな？」

月火「そうだねえ。私自身は関西弁よくわからないけど」この筆者が勝手に使つちゃうから使うハメになつちゃうんだよ」

火憐「とんだ迷惑やろうだな」

月火「本当そうだね」

火憐「それでは予告編クイズ♪」

月火「クイズ♪」

火憐「最近ではこの小説の癖が出てるのか田常でも標準語でツッコミをいれてしまう筆者だつて」

月火「クイズじゃなくて筆者の現状報告だね」

火憐&月火「次回、『よみデイリー』12」

火憐「次は沖縄の言葉とか言われたら大丈夫か？」

月火「なんくるないさー」

「じょみ」トライリー 13（前書き）

なかなかネタが思いつかず間が空いてしまいました。

今回は少し短いですが「じょみ」トライリー 13 です。どうぞ。

7月7日、今日もいつも通り妹に叩き起された僕がいた。

今日はハ九寺に会わなかつたためかいつもよつ早く学校に着いた。
うーん、ハ九寺に時間を合わして会わなかつた時のことを考えてい
なかつたなあ。

そんなことを考えていると

「あら人の死体が転がっていると思つたら阿良々木君じゃない」

「前より酷くなつてる…？てかそれは事件だよ…！人の死体が転が
つてたら」

「商談よ」

「キャリアウーマンだつたのかお前…？」

「私にかかれば交渉事なんてあつとこつ間よ」

「お前に任せると全て破談になりそだよ」

「失礼な。阿良々木君も私の件の時にわかつたはずよ。沈黙と無関
心を約束してもらう時、阿良々木君つたら言葉を発するど」口を
を閉じて2回頷いて交渉成立したじやない」

「無理矢理じゃねえか！－口は閉じてねえよ－－てかお前が閉じたんだろ。ホッキキスで」

「わあ、なんの」とかわつぱりだわ

「どまけんじやねえか－－」

「私の脳は阿良々木君に関しての記憶は消えるよつてあるの上」

「パンポインツかつ悪質な脳だな－－。」

「冗談よ。阿良々木君の良こと」りだけ忘れるだけよ

「それだと僕が残念な子にしかならないじゃないか－－。」

てかマイナスなイメージしか残つてないじゃないか。

「残念な子は今更始まつたことじやないから安心してもいいわよ」

「なんの安心だよ－－。」

戦場ヶ原が「冗談を商談と噛んだ」とて僕への口撃はヒートアップしていくとは思わなかつたな。

そんなこんなでいつの間にか時間は過ぎて次の時間にならうとしていた。

とりあえず、戦場ヶ原からは誕生日のキーワードが出なかつたので
僕が動搖することなく、今日の授業を終えることができた。

授業を終え、僕は戦場ヶ原の家へ向かつた。

「お邪魔します」

「邪魔するなら帰つて頂戴」

「いきなりなんだよーー！」

「吉本新喜劇みたいな流れになるかなと思って。本当ノリが悪いわ
ね阿良々木君」

「僕は関西人じやないから知るわけないじやないか」

「嘘よ」

それからじしまじめ田的である勉強をしたが

「そろそろ休憩にしまじょー」

「ああそうだな」

「やつしないと阿良々木君の脳がパンクするわ

「一皿余計なんだよ」

「阿良々木君の頭の容量って100キロバイトよね？」

「少な過ぎだよ……携帯だと『』メ1枚で終わるじゃないか。ギガとかテラですら足らないよ……そんな値も越えてもつとあるよ……」

「えー？ 何うなの？」

「なに真面目にビッグクリしてやがんだ……」

「だつて阿良々木君の口からギガとかテラつて単語が出たから」

「お前僕を馬鹿にしてるんだな……やつだな……？」

「馬鹿にしてるんじゃないわよ。馬鹿なのよ」

言ひ返せなかつた。

「お茶入れてくれるわね」

「ああ、あつがとう」

いや、言ひ返すとより酷くなつて返してくるので諦めたが正解だ。

戦場ヶ原がお茶を入れて返つてきたといふでプレゼントを渡した。

「戦場ヶ原、誕生日おめでとう」

「えー? 何ー? 爆弾? それとも何か悪い? 」ともしたの?」

「素直に喜べよ……」

「冗談よ。ありがとう。とても嬉しいわ」

「ならよかったです」

「阿良々木君は誕生日プレゼント何が良い? ゲーム?」

「お前は僕の親か! …」

「だつて阿良々木君つて友達少ないからゲームの中だけでも友達を多く作つてもらおつかと思って」

「そんな気遣いは要らないよ……」

「ならどんな文房具がいいのかしら? …」

「僕は以前のお前じゃない」

「いや、私も今では使わなくなつたから処分に困つててゐるのよ。こんなにハサミやらホツチキスは要らないもの」

「僕はお前の「」収集業者じゃな……」

「当たり前じゃない。阿良々木君は「」そのものよ。燃える「」よ」

「また」ゴリ扱いかよ。僕は燃えるゴリじゃない……。」

「えー？燃えないの？ならお葬式の時は火葬ではなくて埋葬ね」

「やついつ意味で言つたんじゃねえよ……。」

「なら何が良いの？婚約廻？」

「急に重たいよ……。」

「ガハラジョークよ」

「なんだガハラジョークつて！？」

いや、正直ガハラジョークつてネーミングセンスは有りだな。

「まあちゃんとしたやつプレゼントするから楽しみにしていて頂戴な」

「あ、ああ、楽しみにしてるよ」

色々な意味で楽しみだよ本邦！」。

この後、僕達は何事もなかつたかのように勉強に戻った。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「実はこの『よみデイリー』13つて戦場ヶ原さんの誕生日に合わせて7月7日に投稿するつもりだつたらしいぜ」

月火「結局、間に合わなかつたみたいだね」

火憐「その理由が間に合いそうだつたのに一コ動を見ていたらいつの間にか日付が変わつてたんだつて」

月火「とんだ間抜けバカ野郎だね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私は来週出るでしょ？？」

月火「筆者すらわからない答えを読者がわかるはずないよー」

火憐&月火「次回、『よみデイリー』14」

火憐「短冊には神様が昇進します様にと書いたぜ」

月火「神様が最高位だよー」

「おみトレイー 14 (前書き)

最近ネタが本当に浮かんできません。

でも見てくれている人が一人でもいる限り書き続けます！――！
う
るせえ

戦場ヶ原の誕生日も無事に済み、早くも週末を迎えるとしていた。時は金曜日の夕方、僕は一週間の疲れを感じながら帰宅をしていた。

「なんか僕って一週間を早く感じる割にはやたら疲れるな」

と一人言を呟いた時

「やつなのか？」

そう言いながら僕の横を駆け抜けて田の前で急ブレーキをかけたようすに止まる少女

「やあ阿良々木先輩、奇遇だな」

神原である

「お前これに関しても奇遇じやねえだろ」

「さすが阿良々木先輩だ。お見通しつてわけだな。いや、なに、学校にいると阿良々木先輩が呟いたのが聞こえたのでな。走ってきたのだ」

「お前の耳は地獄耳か！！」

地獄耳でもそんな聞こえねえよ。

「何を言つてゐんだ阿良々木先輩。阿良々木先輩の声が聞こえるの
だぞ？ 天国の耳ではないか」

「そういう意味で地獄つて言つたんじゃねえよ」

しかも、道端で堂々と恥ずかしい」と言こやがつた。
てか聞いてるこひが恥ずかしいよ。

「やうじいや今週、戦場ヶ原先輩の誕生日だつたな」

「ああ、やうだよ」

「本当偶然だな。」ればかしは

「え？ もしかしてお前も誕生日だつたのか？」

「ああ、私の愛読してゐるB」本の新巻の発売だつた

「知るか！ そんな」と……

その言い方だつたら完全に誕生日が一緒だろ。

なんの偶然でもないよ。

「しかも口にちも戦場ヶ原先輩と一緒にぞ

「だから聞いてねえよ……」

誰かこいつを止められるやつはないのか。

「それより神原、今週の口曜空いているか？」

「空いていなくとも阿良々木先輩のためなら無理矢理にでも時間を
作る」

相変わらず頼りになる後輩だ。

「そろそろ部屋を片付けに行こうかなと思つてな

「それは助かる。そろそろ部屋が変態…おっと、私があまりに変態
なために大変を変態と噛んでしまつた」

「無理矢理過ぎるだろ。あと少しがらこは自分で片付けてみるよ」

「いや～ほんとうにじやないか、片付けより二度の飯つて

「ただの規則正しい生活してるやつじやねえかーーー！」

まあこれが神原なんだが。

「まあやつこいつだから頼むよ」

「ああ、了解した」

その後颯爽と去つて行つた。

家に帰ると家の前に一人の少女が逆立ちの状態で立つていた。

いや、あいつしか居ないんだけど。
あのでつかいの方の妹である。

「おい、でつかいの。一体何をしてるんだ？」

「おお兄ちゃん、お帰りー。今丁度逆立ちで街を一周してきたところだ」

「頼むから僕をこれ以上疲れさせないでくれ

「勉強できない兄ちゃんがなんで疲れるんだよ」

「勉強はできなくても勉強はするわーー！」

「保健体育の？」

「中学生かーー！」

このまま逆立ちをした女の子と話す男子高校生がいるのを見られては阿良々木家の評判にも繋がるのでとりあえず家に入れた。

「お兄ちゃん、火憐ちゃんお帰りー！」

「ああ、ただいま

「ただいまーーー！」

「珍しいね、お兄ちゃんと火憐ちゃんが一緒つて

「ああ、帰つてきたら家の前でこいつが逆立ちでいたんだよ

「今日もトレーニングお疲れー！」

「どんなトレーニングだよ。

「なんて言つたつて火憐ちゃんはファイヤーシスターズの神風特攻隊だからね」

「ほお、片道分の体力だけを持つて行くのか

家に帰つてこれないじゃねえか。

この街にどんなだけ命をかけてんだよこの妹達は。

「わつだお兄ちゃん、最近この辺で都市伝説が増えたの知つてる?」

「都市伝説?」

「うん。学校のパソコンで調べてたら見つけて、今度はその調査する。それで火憐ちゃんはトレーニングしてるんだよ」

「へえ。どんな都市伝説だ?」

「えーとねえ、今わかつてているのが、文房具を武器にして襲う女子と電車より速く走る女子とリアル猫耳の女子とツインテール女子小学生にセクハラをする男子高校生」

なんなんだそいつらは?

てかそんなやつら本当にいるのかよ。

あれ? てかなんか変な汗が溢れてきたぞ。
おかしいなあ、風邪かな。

「へ、へ、へ、へえ」

「お兄ちゃん何か知らない?」

「し、し、知らねえなあ。僕は全然知らないぞ。知るわけないぞ。うん」

「やつかあ。でも」の中でも一番許せないのはセクハラ高校生だよね、お兄ちゃん?」

「や、そ、そ、うだなあ。本当に最低なやつだよなあ」

月火ちゃんのそのタレ目が何か知つてそうで本当に怖いよ。

「セ」で、私がセクハラ高校生を見つけてちょっとお炎を据えてやるつかと思ってトレーニングしてんだよ」

「お、お、お、やつ、そ、うか。あ、あんまり無理するなよ」

「おつーてが兄ちゃんなんか顔色悪いぞ」

「い、い、いや大丈夫だよ」

「疲れてるんじやねえの?兄ちゃんもあんまり無理するなよ」

なんとか」の場を抜け出し、自分の部屋に戻った。

「なんだよ都市伝説つて!ー!全部僕の周りにいるやつじやねえか!」

「あ、ああ」

「！」

「良かつたのよ、お前様よ？まだ金髪美幼女を連れた男子高校生がミスドに来るとかが無くて」

忍である。

「ああ、それが出たらすぐにおいづらは僕だと答えに辿り着くだろうな」

「お前様も大変じやな」

忍は笑つている。

うん、こいつ僕のピンチを楽しんでやがる。

「クソハレハナつたらあいつらの口を塞ぐしかねえな。忍、血を吸つてくれ」

「何を怖いことを言つておるのじゃお前様！一実の妹君じやううが」

「大丈夫だ。火憐ちゃんはタフだし月火ちゃんは不死身だから」

「あの下のしでの鳥の妹のことは良いとして、上の妹の理由がタフつてどんな理由じや！？」

「なんだよお前だつて羽川のこと携帯食料つて言つてたじやねえか」

「あれは若氣の至りじやよ」

「うるせえーー。500歳の老婆の本気だつたじやねえか！！」

「まああの蟹の娘はもう更生したみたいじゃし心配はないじゃね？猿の娘は速いといつだけじゃから逆に凄いと思われるじゃ。委員長は筆者が猫物語のことがあつた体で書くかが問題じゃな」

「久々のメタ発言かよ。バツクリするなあ

いや、でもそりだな。

うん、たぶん日が進んで猫物語の日こちと同じ日になつたら設定を入れてくるだろ？

てかそれだつたらもう少しで戦場ヶ原はドロボウのか。

「それより問題はお前様じやよ。一番解説されやすいではないか」

「やうだなあ。八九寺に合つても、またやうだなあ

「少しひがひ我慢ができるのか

「まあ頑張つてみるよ。あとミスドも行かない方が良いな

「お前様、妹君達に処刑されるのは仕方がない」とじやな

「お前自分がミスドに行きたいだけに僕の身の安全を捨てたな！？」

「なら儂はひづけひづけミスドを食べればここにこじやーー」

「食わなくても死なねえよーー.」

「それで死んだら責任をとれるんじゃうつむか?」

「だいたいそれで死ぬんだつたらきっと前に死んでるだろ? ミスドができる前に」

「今はミスドが栄養源になつておるのじや」

完全に現代っ子じやねえか。

「もし、お前様がミスドに行かないと言つんじやつたら、僕はあの蝸牛の娘に走つていくお前様の足首を毎回掴むからな」

「よし、ミスドは行かないといけないな」

結局、僕に打開策は神からの許可が降りなかつたようだ。

そう思いながら今までと同じ生活をすることを決めた瞬間でもあつた。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「今日は都市伝説の話題だーーー！」

月火「だーーー！」

火憐「地球上のオナラを集めて爆発させると南半球がぶつ飛ぶらし
いぜ」

月火「なぜ南半球！？北半球は！？」

火憐「それでは、予告編クイズ♪ーーー！」

月火「クイズ♪ーーー！」

火憐「なぜ南半球なのでしょうか？」

月火「だからそれを聞いてるんだよーーー！」

火憐&月火「次回、『よみデイリー15』

火憐「どうなつたかはあなた次第です」

月火「ようは知らないんだね」

「じょみ」トドイリー 15（前書き）

誰かネタを提供してくれる人はいないですかねえ。

あ、ちなみに後書きを途中からアニメの化物語風にしたのはスルーして下さい www

では、「じょみ」トドイリー 15 です。どうぞ~

僕が都市伝説の中心になつつある今日の頃、さうとかいうとかで日々を過ごしていた。

そして、今日は日曜であり、神原の家に掃除をして行く日である。

そして、なぜか今日はいつもより少し早めに田が覚めた。
前にも「んな」とあつたみな?とアリアに田を向けた途端

「兄ちゃん起きるー」

「ね兄ちゃん起きなよー」

「デジヤブか?」

「あれ?兄ちゃん今田も早く起きたのかよ

「ああ、それよつ右手を上げて持つてこよ、ゴルフクラブを降りせ

「やあーー..」

ヨーハとこう音と共に僕のベッドが揺れる

「何しやがんだ！！」

「えー? だつて降らせてって言つたじやん」

「降り下ろせなんて、一言も言つてねえよ……お前は僕を殺す気があ
……」

もしかして八九寺の件がバレたのか？

「あの世にホールインワン!!」

「早くねえよ!! おい、用火ちゃんからも何か言ってやつてくれ

「ル・ル・ル」の三バード

「あ！でも大丈夫！打ち直しは向こう側にちゃんと打つから」

「渡らすんじゃねえ！」「

朝からなんだよ、『トイツ』は。

「で、兄ちゃんはな早く起きてどこか行くのか?」

「ああ、ちょっと早く起きてしまったけど」「ひー

「ふーん。まあ私達はセクハラ高校生探しに行くんだけどな

「お、おひ、気を付けてな」

「何だよ気持ち悪いなあ。いつもそんなこと言わないで」「元せ

「いや、あの、あれだよ、兄貴としての優しさを改めてわかりそうかと思つて」「

さすがにこれは無理があつたかな。

「そんなことしなくても兄ちゃんは優しいのはわかってるよ

バカな妹でよかつたとつべづべ思つた瞬間であつた。

妹達の口撃もなんとかすり抜け現在神原の家に行くために自転車を走らせていた。

その時、前にはツインテール八九寺が現れた。

僕は自転車を止めて八九寺に駆け寄つとした時、八九寺が「ちりを向いた。

「これは「れは」アラ木さんではないですか」

「八九寺、僕をバック転を何回も失敗した某野球球団のマスコットキャラクターみたいな名前で呼ぶな。僕は阿良々木だ」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みました！」

「わざとじゃない！？」

「ガチすぎた」

「本当に噛んだのかよ……」

「うん。今日も良い一日になりますだ。

「お久しごりです阿良々木さん」

「久しごりって言つても一週間ぶりぐらいじゃないか」

「いやいや阿良々木さんと会えない日が続くと長く感じるものですよ」

「嬉しい」と言つてくれるじゃないか

「はい…これで読者からの私への好感度が上がったと思います」

「山無しだよ…」

「恩人にそんなことを言つてもいいんですか？」

「恩人？」

「はい。最近都市伝説の中心になりつつある阿良々木さんが私に抱きついてくるのを止めてあげたのですよ」

「何…もうハ九寺まで話が届いてるのか！？」

「はい！それはもう、文房具少女の戦場ヶ原さんや猫耳少女の羽川さんまで」

「ふつふつふ、お前は知つてはならない」と知つてしまつたな

「いや、だいぶ前から知つてますし」

「いつなればお前の口を封じるしかないな

「もう死んでますって」

「まあ冗談はおいといて、別にぼ、ぼ、僕はき、気にしてないしな

「ぬぢやくぢや氣にしてるじやないですか」

「そりやそりだろー！犯人は僕の妹に処刑されるんだぞ…」

「いいじゃないですか。阿良々木さんは死なないんですし

「死ななくても痛みは感じるよーーー！」

「まあ自動自得ですねーーー！」

「僕の意思は無視に動いていたのか

それを言つながら自業自得だ。

「その犯人が兄だと知つたら妹さん達はどう思つが

「躊躇なく襲つてくるよ

「お見舞いは行きますから安心して下さーーー！」

「襲われる前提で話を進めるんじゃねえーーー！」

「それよつビーか行くんですか？」

「ああ、神原の部屋を掃除しにな」

「もうそんな時期ですか。」

「そんな時期つてなんで知つてるんだよ

「私を誰だと思つてるんですか？」

「さすがは八九寺P」

「私にかかれば小説の内容を変える」とも簡単です。まよいオンリーとか」

「お前しか出てないじゃないか」

「私一人で十分です」

「ただの独り言になるだけじゃねえか」

「独り言といつよつ永遠と私の良いところを話し続けます」

「ん？ 1話完結の短編小説か？」

「失礼な！ 100話までします。こざとなつたらゲストに戦場ヶ原さんと羽川さんと千石さんと神原さんと忍野さんと忍さんと火憐さんと月火さんを呼びます」

「主人公の僕がいないつてどうこいつだ！？」

「まよいオンリーは私が主人公ですの！ 阿良々木さんがいなくともなんの問題もありません」

「新手のこじめか！ ある意味公開処刑じゃねえか！？」

「まあ冗談はいいまでとして、もっとお話をしたかったんですが阿良々木さんが遅れるといけないので今日までです」

「ああ、またな」

「はい、またお会いしましょう」
八九寺と別れ、神原の家に着いた。

そして現在、神原の部屋の前にいる。

なぜ入らないかと言うと以前、開けた途端神原が裸で立っていたからだ。

八九寺と別れ、神原の家に着いた。

そして現在、神原の部屋の前にいる。

なぜ入らないかと言うと以前、開けた途端神原が裸で立っていたからだ。

僕は深呼吸をして喋りかかる

「神原入るぞ」

「ああ」

扉を開けて神原を見ると普通に服を着ていた。

なんだかんだ言ってたけど、普通に服を着ているのは意外だった。

「どうした? 阿良々木先輩。 そんな意外なモノを見たような目をして」

「いや、なんでもない」

「あーそうか。脱げばいいんだな。そうか、それは悪かったな

「僕が悪かった!! 僕が悪かったから脱がないでくれ」

「どうこう光景だよ。

女子高生が服を脱ぐのを止める男子高校生って世界中探してもいいだけだよ。

「とつあえずわざわざ手伝う

「わづだな。今日は私も手伝う

「お、おお。そつか

いや、まあ自分の部屋なんだから手伝うのは当たり前なんだが。

掃除を全くしない神原と言つても一人ですれば少し早く終わると思つていた。

がその考えはすぐに崩された。

「おー神原

「なんだ? 阿良々木先輩」

「なんで来た時より散らかってるんだよ

いや、まあ自分の部屋なんだから手伝ひのせ当たり前なんだが。

掃除を全くしない神原と言つても一人ですれば少し早く終わると思つていた。

がその考えはすぐに崩された。

「おーい神原」

「なんだ? 阿良々木先輩」

「なんで来た時より散らかってるんだよ」

「阿良々木先輩ちゃんと片付けてくれないか?」

「お前だよ! 今からお前に掃除の仕方を教えてやる」

そうして神原に掃除を教えるながら掃除をしたため終わつた頃には外は綺麗な夕焼けが広がつていた。

「もう夕方じゃないか」

「助かつたぞ阿良々木先輩。ごつ礼をしていいかわからない

「いや、いいよ。僕が好きでやつてるんだし」

「やつが脱げばこいつのか」

「お前僕を馬鹿にしてるんだな。挑発してんだな！？」

「挑発と云つより誘惑の方が合つてゐんじゃないか？」

「うぬせえ……とつあえず脱ぐな……。」

「人間とこいつのさするなと言われたらしたくなるものなのだ……反対のことをしたくなるのだ」

「いや確かに悪戯とかはわからないでもないが」

「悪戯とはなんと卑猥な……。」

「やつこいつ意味じやねえよ……。一般的な意味でだよ……。」

「私の中では一般的だと思つただが」

「一般的じやねえよ……。」

「とつあえず、脱ぐなと言われたら脱きたくなるのだ」

「わかつた、じやあ脱げ」

「脱いで良いのか……じやあ遠慮なく脱がしてもいい」

「脱ぐんじやねえよ……。」

「どつちなんだ阿良々木先輩」

「それは僕のセリフだ！…反対のことをしたくなむとじやねえのか
！…」「

「脱げと言われたら誰だつて脱ぎたくなるだろ？」「

「ならねえよ……結局、どうしたらいにんだよ」「

「要は脱ぎたいのだ」「

「僕の反論の苦労を返せ……」「

「そんなことを言われても仕方ないではないか」「

「つてそんなことを言いながら堂々と脱いでんじゃねえよ……わかつた、わかつた。僕が悪かつた」「

なんだよ。

どのルートを辿ってもエンディングは一緒だったのかよ。

なんてクソゲーだよ。

その後なんとか脱がすのを阻止した僕は少し休憩した後帰宅した。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「笑つていいともつてあるじゃん。あれのテレフォンショッキングで明日無理ですって言つた人つているのかな？」

月火「どうかなあ。さすがにいないと思うけど」

火憐「でも過去にゲストが間違い電話でかけた一般人が出たことあるらしいぜ」

月火「観客も視聴者も啞然だね」

火憐「私達も傷物語の作り間違いから偽物語にならないかなあ」

月火「200%ないよ」

火憐「それでは、予告編クイズ！」

月火「クイズ！」

火憐「笑つていいともが5000回記念の時、地球が何周回った時
だつた時でしょうか？」

月火「小学生しか出さないよ、そんな問題」

火憐&月火「次回、こよみデイリー 番外編」

火憐「次回も見てくれるかな？」

月火「いいともーーー！」

「よみ」トイリー 番外編（前書き）

最初に言つておきますが今日は今まで一番クソな内容であり、見なくても本編に全く影響はありませんので、お時間がある方は見てあげて下さい。

それでは、「よみ」トイリー 番外編です。
どうぞ。

クロネコ「今日は番外編とこうことで僕も参加して僕主体でお送りします。そしてゲストはこの方たちです！！」

八九寺「読者の皆さんコンバトラー！…皆さんのおアイドル八九寺真宵です！…」

阿良々木「どうも、阿良々木暦です」

クロネコ「では、この3人で（祝）15回記念として番外編をお送りします！…」

八九寺「それよりクロネコさん。なぜ10回目でもなく20回目でもなく15回目なんですか？」

クロネコ「良い質問ですねえ」

阿良々木「何だよその池上彰さんみたいな喋りは…」

クロネコ「いや～一回言つてみたくて～」

阿良々木「私情を持つてくるな…」

クロネコ「今回ぐらいい良いやん…話を戻すけど、なぜ15回かと1つと10回の時点で忘れてたからです…！」

阿良々木「まあそんなどうだよなあお前の場合せ」

ハ九寺「あとPVが10,000を超えたのもあるんですよ？」

クロネコ「さすがハ九寺P!!!」

ハ九寺「まあ未だにPVとニーークがわかつてないかと思いますが」

クロネコ「うん。PV13,500のニーーク1,600つて言わ
れてもさつぱりです!!!」

ハ九寺「やつぱりでしたか」

クロネコ「でも見てくれる人が1人でもいる限り書き続けます!!!」

阿良々木「閲覧者が0人になつたらどうするんだよ？」

クロネコ「止めます」

阿良々木「意思弱つ!!!」

クロネコ「だつて、読む人おらんかつたら書く氣ならんもん〜」

ハ九寺「いい年した人が駄々をこねないで下さい」

クロネコ「大丈夫！まだ高校生に見られるから!!!」

ハ九寺「そういうことじゃなくて」

クロネコ「前タバコを買いに行つたら免許証を3度見されました！」

！」

阿良々木「えー？お前タバコ吸うの？」

クロネコ「吸わんよー友達の誕プレに買って行こうかと思つて生まれて初めて買った」

阿良々木「そういうことか。てかこの回意味あるのか？グダグダ喋つてるだけじゃないか」

クロネコ「あるわー！僕が関西弁を普通に使える場であるーー！」

阿良々木「だからお前の私情を僕達の話に入れてくるんじゃねえ！」

クロネコ「だつてお前達の話つて基本標準語やから癖で日常でも標準語でツッコミを入れてしまつ時あるねんもんーー！」

阿良々木「知つたこっちゃねえよーー！」

クロネコ「そんな言い方すんねんやつたら妹達の処刑を受けるつに話を進めていいんやで！」

阿良々木「僕が悪かった。許してくれ

ハ九寺「なんですかこの情けない一人は。それよりクロネコさんにお聞きしたいことがあるのですが

クロネコ「何でしょう？」

ハ九寺「この小説つてオチといふか終わりはあるのですか？」

クロネコ「今年の夏も暑いと思わないか？阿良々木君」

八九寺「話を変えました！！あからさまに変えましたねクロネコさん」

クロネコ「この世には聞いても良いこととそうでもないことがあるんですよ八九寺さん」

八九寺「聞いてはいけない」とはないんですね

クロネコ「まあ正直に言いますと終わりは今のところ考えてないんで阿良々木さんにはもつとがんばつてもらわないといけないです」

阿良々木「例えはどうしたらいいんだよ？」

クロネコ「うーん。大学受験に落ちたり、留年したり」

阿良々木「絶対嫌だよ…そんなことしたら戦場ヶ原に何を言われるかわからんねえよ」

クロネコ「ケチやなあ。スーパー玉出は1円セールしてんねんぞ」

阿良々木「知らねえよ…なんだよスーパー玉出って」

クロネコ「何！？スーパー玉出を知らんのか…お前もう関西から出て行きやがれ！！」

阿良々木「その前に僕は関西に住んでねえよ」

クロネコ「じゃあ、お前のところある//スドをスーパー玉出に変えてやるうか?」

阿良々木「いや、僕はいいんだけど忍に何されるか知らねえぞ」

クロネコ「仕方ない諦めるか」

八九寺「というかグダグダ過ぎませんか?」

クロネコ「うん。僕も薄々は気付いていました」

八九寺「テーマを決めてやつた方が絶対良かったじゃありませんか?」

阿良々木「それは僕も思つ」

クロネコ「一人で責めるなよ。だって笑つていいともでもタモさんと千原ジュークと鶴瓶がテーマ無しで話してんやん」

八九寺「それはプロだからですよ」

クロネコ「いいよ。じゃあ次回はテーマを決めてやりますよ」

八九寺「次回は無いと思いますが」

クロネコ「この番外編がコケすぎで?」

八九寺「その前にこの小説自体が打ち切りになるかもです」

クロネコ「もう少し頑張らせて下せー」

八九寺「ところで阿良々木さん、今日はいつもより静かですけどうしたんですか？」

阿良々木「だつて変にツツ」「//を入れるとハイツに何されるかわかつたこつちやねえもん」

クロネコ「イエス！！」

八九寺「じゃあ私が良いこと教えてあげましょう。私はクロネコさんよりも立場が上です。なのでクロネコさんが決めたことでも私もみ消す」とぐらじけよちよいのけよいです」

阿良々木「て」とは僕は普通に言ひ返せることか！？」

八九寺「まあ助けませんが」

阿良々木「なんでだよ！？」

八九寺「今までしてきたことをお忘れですか？私のファーストタッチを奪い、それ以降もセクハラを繰り返してきたのに」

阿良々木「あ、あれはスキンシップだよ」

八九寺「あんなスキンシップがあつてたまるものですか！？」

阿良々木「わかった。僕が悪かった。許してくれ」

八九寺「じゃあ、もうしませんか？」

阿良々木「それはむりだ！」

八九寺「なんでそこだけ今までで一番の即答なんですか！？「反省の色が見えません！！」

阿良々木「僕の[反省の色]は透明だ」

八九寺「そんな屁理屈な答えはいりません！」

クロネコ「あ、あの～僕を忘れて一人で話さないでもらえますか？」

八九寺「あーまだいたんですか？」

クロネコ「作者の扱い酷くないですか？」

八九寺「てか私達の話に勝手に出てこないで下さい。あなたは書いてればいいんです」

クロネコ「僕の頑張りを見てないんですか！？」

八九寺「それよりそろそろ終わりですよ。最後ぐらい作者らしいことをして下さい」

クロネコ「え～本日の番外編はどうでしたでしょうか？本編以上のグダグダ感が否めませんがたまには良いかなと思っています」

八九寺「いやいつもグダグダやつたら意味ないじゃないですか」

クロネコ「そこはスルーして下さい。それでは予告編クイズ！？」

ハ九寺「それは後書きで火憐さんと月火さんがするのでやらないで
良いです」

クロネコ「うう…じゃあ、次回、いつ」

阿良々木「ストップ…それもするからやらないで良い」

クロネコ「じゃあ、何をしたら良いんですか…！」

ハ九寺「それでは今回お送りしましたのは、皆さんのアイドルハ九
寺真宵と」

阿良々木「阿良々木暦と」

クロネコ「クロネコがお送りしました。次回の番外編は20回目か
30回目か未定です」

ハ九寺「やっぱりグダグダですね。さすがクロネコクオリティ」

クロネコ「ちなみに次回の番外編のゲストはヴァルハラコンビの神
原と戦場ヶ原さんだと思います。それではまた」

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なあ月火ちゃん、この回つて15回記念なのに16回目にしているよな？」

月火「仕方ないよ作者さんが馬鹿なんだから」

火憐「あと、この回さすがにグダグダ過ぎねえか」

月火「うん。でもたぶん作者さんが一番わかつてると思つよ」

火憐「これに私達も出る口が来るのか？」

月火「望みは少ないけど、あるね」

火憐「このグダグダ感に巻き込まれると思うと憂鬱だぜ」

月火「だねー」

火憐「それでは、予告編クイズ♪」

月火「クイズ♪」

火憐「七夕の日に皆は何をお願いしたかな？」

月火「ただの質問じゃん！」

火憐&月火「次回、こよみティリーー16」

火憐「番外編には出なくて済みますように」

月火「もう七夕は終わつたよ」

「じょみ」ティリー 16（前書き）

さて大コケしたと思われる番外編から本編に移しまして、番外編の方を見た方は忘れて下さい。

では、じょみティリー 16、行ってみよー。

都市伝説の中心にならつたがまだバレていないのか、平凡な日々が過ぎ、終業式の日になつた。

終業式が終わり、H.R.も終わったため皆は帰つて行つてゐるが、僕は教室で羽川と話していた。

「1学期も今日で終わりかあ

「やうだねえ。この1学期つていらうあつたよね

「やうだなあ。この1学期で羽川とも話すよになつたし

「戦場ヶ原さんという彼女もできたしね

「一生分の出来事をこの3ヶ月に全て体験したような気分だよ

「一生かかつても普通は怪異に遭遇しない人の方が圧倒的に多いけどね。」

「そうだよなあ。地獄のような春休みも含めて

「でも、後悔はしないんだよね?」

「するわけないだろ。むしろ感謝するべきだよね?」「いるんだ。むしろ感謝するべきだよね?」

「ただ僕は忍を許すことはないし、忍は僕を許さない。
そんな関係だ。」

「そんなこと言つてると忍がやんに!!スグ買わされたるよ?」

「忍は今の時間起きてねえよ」

たぶん。

前にも似たような出来事があつたような……いや、あれは夢だ。うん、夢に違いない。
忍がこの時間に起きてるはずないもん。
頼むから寝てくれ忍さん。

「私、今から保科先生に呼ばれてるから今田はいいじで。じゃあね

「ああ、勉強の日はまた頼むよ」

「うそ」

そして、一人で呆けている

「あらびひつたの? 阿良々木君。そんな間抜け面して」

「間抜けは余計だよ。用事は済んだか?」

「ええ。お陰様で。フラス「計画は順調よ」

「「」は箱庭学園だったのか?めだかさん!?」

「何を言つてゐの?私はひたぎちゃんよ」

おつと、僕としたことがメタツツ「」になつてしまつた。
気を付けなければ。

てか自分でちゃんと付けするなよ

「てか用事終わつたんなら帰るだ

「やうね

その後、駐輪場に行き、戦場ヶ原を自転車の後ろに乗せ一人乗りの
状態で僕はペダルを漕ぎ始めた。

こんな場面、羽川に見られたら確実に説教されるな。

「といひで阿良々木君、星が綺麗に見える場所見つけてくれた?」

「あ...悪い。まだだ」

「はあ、本当に役に立たないわね。これなら石原良純の天氣予報の

方がまだ役に立つわよ」

「僕は言われるのはまだいいよ。今すぐ良純さんご謝罪をしり……」

「阿良々木君が失礼極まりないことを言つて申し訳ござませんでした。今後私が責任を持つて監視し、反省をさせます」

「なんで僕が言つたことにならぬんだよ……」

「だつて阿良々木君が言つたんぢやない」

「言つてねえよ……数行上を見てみるよ……」

「ああ、そのことなら意味ないわよ。投稿した後に「ペリーして書き替えるから」

「卑劣極まりねえよ……」

「それより8月12日から14日の間にいくからそれまで頼むわよ」

「ペルセウス流星群か」

「よくわかったわね、馬鹿なのに」

「だから一言余計なんだよ。他に言い方あるだろ」

「つましか

「その言い方じゃねえよ……バカを訓読みしただけじゃねえか……」

「よくできましたー。よくできた阿良々木君には花丸をあげましょ

「う

「お前、僕を舐めてるんだなー?」

「舐めてるこじょなこわよ。馬鹿じててるのよ

「一緒にー。」

「馬鹿が馬鹿の問題を解いたなつ

「うるせーーー! Twitterで書き込むんじやねーーー!」

「で、どつなの?決められるの?」

「ああ、7月中こまかく

「みんなへべれれ

そして、話してこねひひ戦場ヶ原の家に着いた。

「上がって行つたら?お茶べりこ出すよ

「あつがとわ。うつむかひつよ

「お茶ひ葉は150回べりこ使用したやつだな?」

「やつただのお湯じやねえかー!」

「違ひわよ。お茶風味のお湯よ」

「どうでもこことーーー。」

「嘘よ。うそとしたらやつ出すわよ」

「といひで阿良々木君、通知表の成績はどうだつたの?」

「ああ、一学期の半ばぐらいからは結構頑張ったから上がつたよ

「あらやつ、つまりないわね。私的にはあれだけ教えてもらつたのにむしろ下がつてオール1だつたていつ展開の方が良かつたわ」

「やつまで行つたらもう救しようねえよーーー。素直に留年を覚悟するよ

」

「留年したらハツ裂きにするわよ

「怖いこと聞いたなやーーー。」

「良こじやない。臨終の際に最後の立ち会いの人が彼女の私なのよ。
素晴らしき愛だよ

「至るだ愛だよ

「何よ。それとも、最後に会う人が私だつたら不満なわけ?」

「そんなことないですよーーー。」

「それとも私のお父さんの方が良いのかしら?」

「頼むから勘弁してくれ」

「何？ そんなに私のお父さんが嫌いなわけ？」

「やうじやないよ。 てかそういう問題でもない」

「じゃあ何よ？」

「なんで僕が死ぬ体で話を進めてるんだよ……」

「えー？ だつてハツ裂きになるんだから死ぬに決まってるじゃない」

「なんで僕、留年してるんだよ……」

「頭が悪いからじやない？」

「うるせえ……いや、確かにお前よりかは悪いのはわかってるナビ」

「『』めんなさい。 阿良々木君は頭が悪いんじゃないわ。 頭が弱いの
よ」

「よつ酔くなつた！？」

「とにかく阿良々木君のアホモつて生きてるのかしさ！」

「こせなりなんだよ」

「ほり、アニメの時クネクネ動いてたじやない」

「演出だよ。実際に勝手に動いてたら気持ち悪いだろ」

「そうね。だから阿良々木君の」と気持ち悪いと思つてたんだ。納得だわ」

「今サラシと悪口を言つたな?」

「言いがかりはやめて頂戴。私は生まれてこのかた悪口を言つたことなんてないわよ」

「嘘つくなじやねえよ!…少なくともこの小説だけでも出る度に毎回言つてるよ!…」

「あれは私じゃないわ」

「じゃあ誰だよ!…」

「もう一人の阿良々木君よ」

「自分の過ちを僕に擦り付けるんじやねえ!…」

「まだもう一人の私とかの方が納得しやすいよ。まあ、どっちにしろ納得はできないが。ま

「それよりアホ毛がある人つてなんでいろいろと不安定なのかしら?」

「何がだよ

「私の知っている限りでは、そふてこつの中日菜ちゃんは極度の妄想癖だし、Aチャンネルのるんちゃんはド天然だし、そして阿良々木君は頭が弱いし」

「なんで僕だけ悪口なんだよ……」

「じゃあ他に何があるっていつの？」

「自分で考えるよ……本人が言えるはずないだろ」

「言いたくもないよ。

「やつねえ……『!!』 クズ…馬鹿…『めんなさい』。悪口しか見つからないわ」

「そんなこと堂々と素直に謝るんじゃねえよ……」

逆に余計傷つくな。

「じゃあ、馬鹿の中に鹿つてあるからせんと君でいいんじゃない？」

「適当だなー！僕とせんと君の繋がりは一切ねえよ……」

「そんなこと猫でもわかるわよ」

「お前が言つたんだね! がーーー!」

「猫つて言つても羽川さんじやないわよ」

「わかつてゐるよーーー!」

「阪本でもわかるわよ」

「あの赤いスカーフがなかつたら逆に僕達が何言つてゐるかわからな
いよ」

今度は日常ネタかよ。
わかる人いるのか?

「私は阿良々木君が何言つてゐるのかちょっとわからなーいわ」

「何でだよーーー!」

「日本語で話して頂戴」

「日本語だよーーー!」*Japanese*だよーーー!」

「*Japanese*って英語じゃない

僕は馬鹿だった。

それからじょじょじょく喋つた後、帰宅した。

「よみティリー 16 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「夏だー」

月火「だー」

火憐「夏なんだよな?」

月火「なんだよー」

火憐「てか最近やたら私達の出番多くないか?」

月火「少ないより良いじゃない?」

火憐「そうだな」

月火「だね」

火憐「では、予告編クイズ!!!」

月火「クイズ!!!」

火憐「阿良々木家の昨日の晩御飯は何だつたでしょうか?」

月火「誰もわからないし、誰も興味ないよ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー 17」

火憐「昨日の晩御飯何だつたけ?」

月火「自分がわかつてないじゃん」

「よみ」トライー 17 (前書き)

ガハラさんとファイヤーシスターZが出るとネタがポンポン出でります。

面白い面白いには別にして。

それでは、「よみ」トライー 17 でーす。

家に着き、一息つくためベッドに寝転んだ。

その時、僕の部屋のドアが勢いよく開いた。

「兄ちゃん、1何個あつたんだよ? てか宿題手伝つてやつか? な
あなあなあ」

あれ? 今更だけど妹つてこんなにひるせいのか?

テレビのドラマとかアニメだと兄に對して妹が宿題がわからないか
ら手伝つてつていうのを何回も見たことあるのに……おかしいな。

いつのまにこの相場は崩れたんだ?

「勝手に入つてくるなり失礼なこと抜かしやがつて。1なんて1つ
もねえよ! 1ど1ろか2もねえよ! 1

「な、なんだと! ? これは不吉なことが起こる前兆なのか! ? 月火
ちゃんに報告しなければ! ! 月火ちゃん! 」

と部屋を出て行つた。

うるさい妹である。

本当誰に似たんだよ。

そしてすぐに、ちつこい方の妹を連れて戻つて來た。
忙しい奴らだ。

「お兄ちゃん、がな、ど、いろか、もなかつたんだつて！？」

「ああ」

「なんでそんなことするのよ……私はまだやり残したことがあるの……まだ死にたくないの……」

えつ！？ なんで僕怒られてるの？

成績が上がつて褒められるのはわかるが、怒られるつて……。

あーなるほど新しいボケだな、これは。
なんともシユールなボケをかますじゃないか。

「とりあえず、私は街の皆に避難勧告を出してくるから田火ちゃん
はネットで避難勧告を促してください」

「わかつたよ、火憐ちゃん」

え？ なんかボケ長くない？

そんな続けてたらツツ「ミ」が入れられなくなるよ？

部屋から出て行こうとする妹達を

「ちゅうと待て」「うーー。」

「なんだよ兄ちゃん、今は1分1秒を争うんだよーー。」

「争わねえよーー。僕が成績上がったぐらいで大騒ぎするなやーー。何も起じらねえよーー。」

「私的にはノストラダムスの予言の再来と言つても過言じやないと
思うぜ」

「過言だよーー。」

だいたい、ノストラダムスの予言は外れたじやねえか。

「えーー? じゃあ何も起じらねえの?」

「起じるわけねえだろ」

「なーんだ。もひ、騒がすなよな兄ちゃん」

「いやお前じが勝手に騒ぎ始めたんだろ? が

てか、やたらあつたりだな。

「あれ? 月火ちゃんは?」

「ん？あー、たぶんネットに配信しに行つたんじゃねえの？」

「行つたんじやねえの? ジやねえよ! -

と止めて行こうとした時

「ほら、見てみろよ兄ちゃん。Twitterやってんだけじ、月火ちゃんのつぶやき」

「見せてみる。」「お兄ちゃんの成績が上がったなう。明日、天変地異が起きるから皆さん逃げて下さい。」「

間に合わなかつた。

しかも、なぜかやたらとフォローされてるし。

「とりあえず今回はもつと遅れだから見逃してやるけど今後警ぐん
じゃねえぞ」

「じゃあ、兄ちゃんが成績を下げるらしいじゃん」

「なんで僕の成績を犠牲にお前らの騒ぎを防がなきゃなんねえんだよ！！」

「だつて手遅れじゃん！！」

「まだ間に合つたよー。」

「来世は頑張りませ、兄ちゃん。」

「諦めた言ひ方すんじゃねえ。」

「諦める勇氣も時には必要だ。」

「黙れ……とにかく僕は留年はしない。」

「留年したら制服を来た私と一緒に登校できるんだぜ」「いや、お前のとこ一貫校だから受験もしなくていいし、学校が違うじゃねえか」「え？ そつなの？ つづき直江津にも通えるのかと思つてた

「2つ通えるわけないだろ。留て事じやねえんだから」「じやあ、途中まで一緒に行くつ

「じて連れてこちやんか」「

「最終的にお前のお願いになつてゐるじゃねえか。てか留年した体で話してるとだよ」

「わざとじやねえか……。」

「わざとじやねえか……。」

「かこのせつとつひにかやつたよつがするだ。デジヤヴか？」

「最近デジヤヴが多いなあ、本当だ。」

「え？ デジヤヴとかじゃなくて私は戦場ヶ原さんの返し方を参考に
しただけだ」

「人のモノローグを勝手に読むんじゃねえ！ てかお前は一応まだ
戦場ヶ原のこと知らないだろ」

「私は真面目だからこの小説を読んで復習したのさ」

「しなくてこいつよ……する」とによつて時系列がめちゃくちゃにな
ってしまうよ……」

「私は歴史を変えれる女なのさ」

「頼むからそれ以上喋らないでくれ」

「これ以上こいつと話していると」の小説の今後にも影響しそうな
で無理矢理に話を終わらせ部屋から出て行かした。

「お前様よ」

「急になんだ？ 忍。あ……ミスドなら買わねえぞ」

「わかつておるわい。しかも儂は最近、我慢して我慢して一気に食
べようと考へてゐるしな」

それって次行く時にとんでもない量を買わされるつてことじやん。
その日が怖いよ。

「アハジヤなかつたらなんだよ？」

「それせ……その……」

「なんだよ、はつせつまづく

「じやあ、まづく

「ああ

「最近、儂の出番少なくなじかの？」

「.....」

「の？」

「…………知らねえよ……そんなこと僕に言われてもどうしよ
うもできねえよ」

「だつてお前様は番外編まで出でていたんじやからそれべうことは言え
るじやろ?」

「番外編は本編とは無関係なんだから話を出すな」

「なあ、アハジヤかならんのかの? なあお前様よ、なあなあ

めんじやへれこ奴だなあ。

以前の無口な忍はどこに消えたんだよ。

どいつもこいつも出たがるなあ。

千石を見習えよ。

あいつ出てきたの最初の方の1回だけだぞ。

今度、出してやらないとな。

「せうだお前様よ、これからはなるべく夜に出掛けんか?」

「なんでだよ?」

「儂が起きているからじや」

「結局お前が出番ほしいだけじやねえか。千石を見てみろよ。あいつなんて出たの1回だけだぜ」

「あの娘は内気じやから別にいいではないか。儂は社交的なんじやよ。出たがりなのじや。出たがり芸人じや」

「芸人はほとんど出たがりだよ」

その内容でアメトークでやつても参加芸人が芸能界にいる芸人ほとんどになって大変なことになるよ。

「ならミスド芸人はどうじや?」

「そもそもお前は芸人ではない」

「別にいいではないか。ちなみに作者はガリガリ君芸人じゃぞ」

「聞いてねえよ」

「お前様はロリコン芸人じゃな」

「ただの変態じゃねえか！－！だいたいロリコンではない」

「それでロリコンではないと言つんじゃつたらこの世からロリコンはいなくなるぞ」

僕がロリコンと思われているなんてこれは困ったものだ。

「それより今夏アニメの「うわさデロップ」に金髪少女が出ているのじやがあれば儂のライバルか何か？」

「こきなり何を言い出すんだよ。全くライバルじゃねえよ。てか分野が違うじゃねえか。お前は金髪幼女枠だよ」

「見た目一緒にぐらぐらの歳だったのにか－？何故じゃ－？」

「僕の判断だ」

「やつぱつか

「と」ひるでお前様よ」

「なんだよ?」

「学園都市に行きたい」

「は?」

「だから僕は学園都市に行って能力をつけたいのじゃ」

「身につけなくとも僕の血を飲めば十分強いじゃねえか」

「僕は超電磁砲を身につけて街中でぶつ放したこのじや」

「とんでもなこと」とを囁ひながらねえよ。」

「やつあれば僕の出番も増えるじゃねえか。」

「お前の出番と元を替えて街中の人があいなくなるよ」

「やれは、//スドも無くなるのか?」

「ああ、綺麗に無くなるよ」

「じやあ、諦める」

単純な考え方だなあ。

お前本気で//スドの//M狙つてゐるだろ。

「じやあ今から傷物語から傷物語に変えんか?」

「変えねえよ!……か既存の作品だし、本物の作家が書いてゐるよ。」

「！」

「でも2012年の映画公開まで待てんだ」

「今年だとハヤテの、」とくとかけいおんとか強敵ばかりだぞ」

「つむ。2012年で正解じゃな」

「ひしてさしづかた1日を無事終えることができた。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「いきなりだけど夏と言えば！？」

月火「海！！」

火憐「そうだよなあ、海だよなあ。なんで海で食べる焼きそばってあんなに美味しいのかな？」

月火「祭の屋台で食べる焼きそばも美味しいよね？」

火憐「あと焼きそばを食べたい時とカップ焼きそばを食べたい時つて別だよな？」

月火「そうだねえ。焼きそばに近いけど勝つてもいないし、負けてもいないよね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「この現象をカップ焼きそば現象と名付けたぜ」

月火「クイズでもないし何か聞いたけどあるよ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー 18」

火憐「これはみなみけから引用したぜ！！中の人繋がりで」

月火「だと思ったよ」

小、中、高生の方は夏休みに入ったんですね?

翌朝、毎度お馴染みのように妹達に叩き起しがられる僕がいた。

「お兄ちゃん、朝だよーーー！」

起始N=100

走るなー!!」

起きねえと尻せんの部屋でエロ本探しするぞ」

お前に男の子が生か!!

まあ探しても見つからねえよ。

なんせお前達の部屋に隠してるんだからな。

「兄ちゃんのことだから私達の部屋に隠してたりしてな」

「さすがにそれはないよ火憐ちゃん」

「そ、そ、そつだよ。ほ、僕がそんなとこ隠すはずないじゃないか」

「冗談だよ月火ちゃん。本当に私達の部屋に隠してたら私達は兄ちゃんに姉妹かめはめ波を食らわすぜ」

「それを言つなら兄弟かめはめ波だらうが」

「私達は姉妹なんだから姉妹かめはめ波でいいじゃん」

「悟飯と悟天の技をパクるなよ。

てかなんで劇場版で使つた技を持つてきたんだよ。

「私はさすがにそこまでの大技を出すのはお兄ちゃんに悪いよ。だから、火憐ちゃんはかめはめ波で、私はジャン拳でチョキだけを出さよ」

「目潰しつて月火ちゃんが何気に一番酷いよーー！」

とこりか、なんでドラゴンボールの話になつてんだよ。

てか、もうこれは絶対バレないようにしないと駄目だな。
見つかつたら僕は殺されるぞ。

今度こいつらが出て行つている間に場所を変えるか。

朝食を摂つた僕は羽川と勉強のため図書館に向かつた。

羽川は僕の家でも良いと言つたが、僕の家に来ると妹達に邪魔されかねないので図書館にしてもらつた。

図書館の前に着くとすでに羽川が待っていた。

「やつほー阿良々木君」

「悪いな待たせて」

「私も今来たところだから」

「そうか」

中に入ると人は全くいなかつた。
まあこれから増えるだろう。

と思いつながら一番奥の席に座り勉強を始めた。
2時間程勉強をしたところで休憩に入った。

「そういうや羽川って世界一周をするつて言つてたけどフランス語とか喋とか話せるのか？」

「英語とかならなんとなるかもしれないけどフランス語とかドイツ語は挨拶程度かな。あとは笑顔とジェスチャーだよ」

「Das ist zu teuerは覚えておけよ

「高すぎます?」

「お前は何でも知ってるな」

「なんでもはう……って言わないよ」

「クソひもう少しだったの！」

「とこりかなんでそんな言葉知ってるのよ？」

「2、3年前にドイツ語に興味を持つて調べてたらこの読み方の
ダス・イスト・ツー・トイマーをバズ・ライトイマーみたいで覚え
てしまつたんだよ」

「知つてるのはその言葉だけ？」

「ああ」

「もしかして、知つてるからそれを言つただけ？」

「その通りだ羽川。本当なんでも」

「言わなこつて言つてゐるでしょ。他に知らないの？」

「少しごりごり言つてくれよ羽川。」

作者が知つてゐるドイツ語を言わされた僕の身にもなつてくれ。
てか知つてた理由は作者の実話だよ。

「無限の彼方へ、さあ行くぞ！」

「知らないからつてバズ・ライトイマーの決め台詞を言わなくてい

いから」

「帰つて來たうどうすんだよ？」

「うーん。まだ決めてないけど世界中を見て私がどんな風に感じるかによつてこれからが変わると思つ」

「なるほどなあ。考へることが違つぜ羽川は」

「阿良々木君はどうするのよ？」

「何が？」

「何がじやなくて大学行つてからよ。戦場ヶ原さんと一緒に大学に行くんでしょ？」

「ああ。ただ僕の場合は大学に入れるかが問題なんだよ」

「大丈夫だよ。ずっと勉強してるんだから。……留年しなきゃね」

「羽川さんー？」

「冗談だよ」

「冗談でも羽川に言われると不安になつてくるよ」

「それより将来はどうあるの？両親と同じ警察？」

「なんで僕の両親が警察つて知つてるんだよーーお前が知るのは2学期になつてからのはずだぞ！？」

「猫物語（白）の」とだからあと少し良いかなと思つて

「良くないよ……それに猫物語（白）を話すと偽物語の方が先だからすでに戦場ヶ原がシン『アレからシン』ドロになつてゐよ……」

「まあ猫物語（白）つて私が一人称なんだし別に良いんじゃない？」

「やつこつ問題じゃねえよ……今日はどうしたんだよ羽川」

「たまには良いじゃない私もキャラが崩れたつて。つばさキヤットの最終回のDVDの副音声だつて最後はキャラ崩壊してたし」

「いや、まあそつだけど」

「それにこれ一次創作だし」

「その言葉だけは羽川から聞きたくなかったよ。ちょっと今から家に帰つてロメールを送つてくる」

「過去改变をしようとしたこの」

「お前もラボメンなら分かつてくれ」

「いや、ラボメンじゃないし」

「いわなればバイト戦士にも手伝つてもいいしかないな」

「西尾維新さんの物語シリーズとの小説を合わしてもバイトして

る人は一人もいないから。だいたい、その話に関係あるの中の人的に千石ちゃんだけだからね。」

羽川とは珍しい会話をしながらも、その後は眞面目に勉強に取り組み、夕方には図書館を出た。

「あー岡りん。うつうつするー」

「千石、もう完全にアウトだよ」

「だつて撫子ラボメンの一人だし」

「ラボメンは椎名まゆりだ。確かに前の中の人はまゆしいの声を担当しているがここでは関係ないぞ」

「じめんなさい。久々に登場だつたから自分が誰なのか忘れてたよ

「テンション上がるんじゃなくて！？そこは覚えておいでぜ！？」

「テンション上がるんじゃなくて！？そこは覚えておいでぜ！？」

「もうめちゃくちゃだよ」

「そうだ、暦お兄ちゃんどこか行つてたの？」

「ああ、羽川と勉強しに図書館にな

「そつなんだ暦お兄ちゃんは偉いね」

「一応受験生だしな」

「千石は何してたんだよ？」

「撫子は今から図書館に行ってるの」

「入れ違いだな。夏休みの宿題でもあるのか？」

「つづくん。夏休みの宿題を残り一日で終わらす方法が書いてある本があるか探しに行くの」

「あるわけないだろ……」とか最終回までしない気満々じゃねえか

「うそ……やる気満々だよ」

「しない方向にやる気を出すなよ。そのやる気を宿題に行かせよ

「」こんな時にドリームもんが居てくれたらアンキパンを出してしまつひの

「アンキパンを食べても暗記するだけで宿題は終わらないよ……」

「」、歴お兄ちゃんは欲しい時に欲しいソシソリを入れてくれるね。
さすがだよ

千石はお腹を抱え、笑うのを耐えながら僕を褒めた。

「僕も時間があつたら勉強教えてやるから少しは自分で頑張りたい

「本当に……」

「ああ」

「じゃあ、撫子頑張るー。といあえず自由研究は終わらせるね」

「自由研究はどこするんだ?」

「一つの畠に田はいくつあるか」

「自由過ぎるだらー。」

「じゃあ他のやつもえておへよ」

「か畠の田を数えるってだいぶハードだね。」

それから千石とは別れ、帰宅した。

帰宅後、部屋に入るやいなや忍が出てきた。

「お前様、最近携帯のコースは見たかの?」

「まあ携帯のコースは見てるよ」

「じゃあ、知つておるな」

「何をだよ?」

「ミスドで8月10日から110円にかけて日本各地の銘菓や名物の特徴を人気商品で表現したミスド味めぐりじゃー。」

「知らねえよ……」

「なんじやと……今年の10大ニュースに入るぞ？」

「どんだけだよ……？」

「ちなみに今回登場したのは、大阪のたこ焼きをイメージしたポン・デ・たこ焼き風と京都のハツ橋をイメージしたポン・デ・ニッキあすきと沖縄のなんじやつたつけ？丸い揚げたやつなんじやが……アレキサンダーじゃつたかの？」

「サーティアンダギーだろうが……」

「セツジヤ、セツジヤ。そのベイクドファッショングルーピング」

「それで何が言いたいんだよ？」

「わかつておるくせに」

「分かわってるけど分かりたくないんだよ……」

「むう……仕方ない。お前様の悪行を妹君達に教えるしかないのか」

「忍、8月10日はミスドに行くぞ」

「いひむ。よくわかつておるの」

金髪幼女に脅しをかけられた男子高校生がそこにはいた。

「それよつお前様よ

「今度はなんだよ

「儂のキャスターは結局誰になるんかの？」

「そんなこと僕が知るか！？」

「いやー、決めてもらわんと僕も中の人ネタができるないんじゃよ」

「結局出番田辺とかよ」

「「」の際伯物語の引き継ぎで平野綾とこ「」とでここかの？」

「勝手に決めんじゃねえーー平野さんの都合も考慮えり

「儂の都合も考えてほしいものじゃ」

「まあシシコミを入れたものの正直この小説のみならいいんじゃねえの？」

「一次創作じゃしなーー。」

「それは言わなくていい

「じゃあ決まりじゃな。あともう一つ

「なんだよ？」

「傷物語の主題歌は誰が歌うんじゃ？」

「それも知らねえよ」

「儂の中の最有力候補が supercole11なんじゃが最近ボーカルを募集しあつたから、 a ぱーさんがどうなるかがわからないのじや」

「それは発表があるまで待て」

「あーーーしまつた。儂したことがとんでもない失敗をしもうたたわー！」

「なんだよ急に」

「ボーカル募集に儂も応募すれば儂が歌えたんじゃないのか？」

「それは受かつたらの話だ」

「悔やまれるのよ」

「その前に誰も見た田金髪幼女は取らねえよ」

「大丈夫じゃ。中は20代の声優でありCDも出しておる平野綾じやからのお

「それなら supercole11に応募しなくても平野さん単体でいけるじゃねえか」

「つむ。それもそうじゃな」

「だいたい、可能性なら僕にもあるぞ」

「お前様には無い！！」

「即否定！？ てかなんでだよ？」

「友達が少ない変態口リコン野郎だからじや」

「全然理由になつてないよ！！」

「お前様は10月からのWORKING---で頑張つてれば良いのじゃ」

「 もひぐひせひがくせひがく過ぎてわからぬこと 」

結局、忍との会話で決まったことは8月10日にスドに行かされるということだけであった。

まあそつだろ。

その後、夜になつて僕は勉強をしてからベッドに横になつた。

さて、明日は戦場ヶ原の日か。

「よみデイリー 18（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ガツツ石松とバツクしますつて似てねえ？」

月火「似てるー」

火憐「オレンジとオレン家つて似てねえ？」

月火「似てる！」

火憐「三倉茉奈と三倉佳奈つて似てねえ？」

月火「似てる！！」

火憐「では、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私達つて似てねえ？」

月火「似てるーーー！」

火憐&月火「次回、『よみデイリー 19』

火憐「さすがに今回はふざけ過ぎたな」

月火「うん。手抜き度MAXだね」

今回ばかりたゞ \times イルムナのととなつておつまむ。

少し長いですがお付せぐことや。

今日は、戦場ヶ原に勉強を教えてもらひつ日のため、僕は戦場ヶ原の家にいるのである。

「もう終わりね」

「え？ 何？ 僕を見捨てないでくれよ。戦場ヶ原」

「え？ ああ、夏休みの宿題が終わって」とよ

「早……」

「どこの阿良々木君とは違つたよ」

「がつがつ名前を出したやつだよ」

「あら、じめんなさい。私、素直な人間だからつい

「ああ特に悪い方面で素直過ぎるな」

「私がいつも悪いことしたって言うの？」

「逆に良いことをこつしたんだよ？」

「失礼ね。さすがの良い子の私でも怒るわよ。仮の顔も二度までつて言つてしまふ？」

「お前にこつ仮の顔があつたんだよ？」

「全米が驚愕！あのひたぎクラブの続編、ひたぎブッダがついに公開」

「勝手に劇場化すんじゃねえ！？」

「おまけで短編映画、傷物語も上映決定！」

「あるとしたら逆だよ！…なんで本命がおまけなんだよ！…こんな」としてみる、全国の傷物語を楽しみにしている物語シリーズファンに攻撃されるが

「なら私は口撃をして攻撃をするまでよ」

「怖いこと言つな！…つてホッチキスを仕舞え」

「え？さすがに3次元の人に攻撃はできないから、このホッチキスを阿良々木君にじょうと思つてたのだけれどダムなのかしら？」

「良いわけないだろ！…」

「仕方ないわね。話は戻るけど仮の顔も三度までより閻魔の顔は何度でもね」

「怖いよ！…僕、永遠に罰を受けるの？」

「^{バッ}罰と言つより^{バチ}罰ね」

「なんで僕がバチを受けなきやならねえんだよ」

「小学生にセクハラをしたり妹達のファーストキスを奪つたり」

「な、な、な、なん」

「冗談よ。阿良々木君がそんなことするわけないものね？」

微笑みながら「ちらを見ながら言った。

「こいつ本当に知らないよな？」

「もし本当にやっていたなら」

その時、戦場ヶ原の携帯が鳴った。

「ど」までも続く「」の空のよつな終わりのない永遠を誓つて「

「出なくていいのか？」

「ええメールの着信音だから。それよりこのstaple staple
blette歌本当に良いわよね。歌つてる人はとても上手いし完璧
じゃない」

「せつかく触れなかつたのに自分から言つたなやーーー」

「」の歌でもしかして「」の歌でもしかして「」

「取る以前にCD化してねえよ」

「なんですかー!?君の知らない物語はCD化して大ヒットしたの
に私のstaple stapleはCD化になつてないですつて

「!？」

「OPは全部なってないよ」

「今すぐSony Music Recordsさんに行くわよ、
阿良々木君」

「行かねえよ!…まあ行つたとこで何もできなこと溜つたさ。で
か他の人はどうすんだよ」

「そのことに關しては問題ないわよ。私の中の人はとても優秀だから
神原の声だって、羽川さんの声だって、八九寺の声だって、千
石ちゃんの声だってできるわ」

「いや、そこは本人達がいいよ」

「私だと不満があるの?」

「いや、その…あれだよ…戦場ヶ原も他の人にされたら疑問に思つ
だろ?」

「当たり前よ。そんなことされたら阿良々木君をハつ裂きにするわ
よ」

「なんで僕が被害を受けてるんだよ…」

「阿良々木君だからよ」

「理由になつちやこねえよ…」

「やつ？ これ以上ないぐらい完璧な理由だと思つただれど」

「これ以上ないぐらい適當な理由だよ」

「阿良々木君の人生と一緒にピッタリじゃない」

「僕は適当に人生を過ぐしてないよ」

「あら？ 阿良々木君の人生が適當ではないんだつたらこの世からい
い加減つて意味の方の適當つて言葉を無くさなきゃいけないわね」

「そこまで…？」

「当たり前じゃない。『』のよつな阿良々木君だけのためにあるよ
うな言葉だもの」

「また『』って言つたなお前は…？」

「ほら、天空の城のラピュタであつたじゃない。ムスカが阿良々木
が『』のよつだって台詞が」

「人が『』のよつだよ…！ なんでムスカがピンポイントで僕を見
ているんだよ…！」

「『』めんなさい」

「あ、いや…いいよ」

「じゃなくて『』に謝つたのよ。阿良々木君みたいなのと同じ扱い
をしてしまつたから」

「お前と次会う時は法廷だな！！」

「私に裁判で勝てるとでも」

「証拠は山程あるよ……」

「私は戦場ヶ原ひたきよ」

「何自分が判決を下すみたいな言い方してんのだよ……」

「裁判員制度で選ばれる市民を私の権力で、神原、羽川さん、八九寺ちゃん、忍ちゃん、火憐ちゃん、月火ちゃんを選ぶようにするから大丈夫よ」

「お前にそんな権力はない！……とか千石は入ってないんだな」

「当たり前じゃない。あの子は貴方の味方よ？今は」

「今はつじじうじう」とだよ

「ああそれは囮物語を読んでからのお楽しみね」

「「」でメタネタを入れてくるか

「一つ疑問に思うのだけれど

「なんだよ？」

「「」の物語つて私と阿良々木君の絡みがやたら多くない？」

「あーそのことだけどお前と僕の「コンビだとネタが他の人よりも浮かぶらしいぜ」

「あらそつ。でも私は嫌じやないけど。むしろ好きよ、阿良々木君をいじめる機会が増えて」

「主人公なのに僕の存在つて……」

「ううあえず、作者には言いたいことが山程あるから後書きで覚えてるよ。」

「そりだ戦場ヶ原」

「どうしたの？」

「前言つてたキャンプ場の件だけど」

「ああ、見つかったの？」

「近くが良いのか？」

「日本ならどこのでも良いわよ」

「鹿児島なんだけど」

「…………」

「戦場ヶ原？」

「…………」

「戦場ヶ原さん？」

「…………」

「戦場ヶ原様？」

「ああ、ごめんなさい。寝てたわ」

「なんで寝るんだよ。人が話してるのに……怒ったんじゃないかと思つたよ」

「鹿児島ね。わかつた、いいでしょ」

「そんな簡単に答えていいのか？」

「私が頼んだんだから阿良々木君が言ったことに私は従うだけよ」

男よりも男らしい彼女である。

「田舎すは女の娘よ」

「ただの女子じゃねえか。てか勝手にモノローグを読むな」

「何よ、主人公Aのくせに」

「主人公なのにクラスメートAと同じ扱い！？てかAって何人かい
るのかよ」

「私は彼女Aだけど」

「彼女が何人もいる主人公って印象悪すぎだろーーー。」

「心配しなくても傷物語でのパンチラネタを4ページも喋つてたのと友達を作ると人間強度が下がると言つてた時点で阿良々木君の印象はどん底よ」

「あれは言わぬいでくれ。若氣の至りだ」

「若ハゲの至り?」

「ハゲてねえよーーー」

「阿良々木君つて将来ハゲるとしたらアホ毛以外のとこね」

「逆に嫌だよーーー」

「見た目は完全におやじっちね」

「例えがなんでたま」ひちなんだよ」

「久々に思い出したのよ。てか最近、阿良々木君のシシ「//」レベルが下がつてると思つただけど?」

「知らねえよ」

「生徒会役員共の津田君のシシ「//」を見て勉強しなさい」

「彼にはシシ「//」を入れ続ける気持ちが分かると思つよ」

「「」の際、生徒会役員共のメンバーを全員呼びましょうか」

「それだけは本当に勘弁して「トセ」」

「「冗談よ。私にそんな権限はないわよ」

「の人達を呼ばれたらそれ「」をめちゃくちゃになってしまつ。

「だよな」

「私が生徒会役員共みたいな人になることはできるけど」

「是非とも遠慮願いたい」

「そんなに拒むことないじゃない。阿良々木君自体下ネタみたいなものなんだし」

「お前と出合つて今までで一番理解出来ないよそれ……」

「やつぱり頭が悪いのね」

「お前の口が悪いんだよ……」

「AKBの板野友美さんみたいにアヒル口をすれば許してもうれるかしら?」

「その口じゃねえよ……言葉の方だよ」

「これは仕方ないじゃない。方言みたいなものよ」

「那儿の地域にそんな暴言を使つと」ジガあるんだよ……。」

「日本」

「黙れ……。」

馬鹿にしそぎだろ。
なんだよ日本つて。

そんな答え最近の小学生でも言わないよ。

その時、戦場ヶ原の威力抜群の右フックを食らつた。

「痛えー！…何しやがるんだ」

「えー！…だつて殴れつて言つたじやない」

「黙れつて言つたんだよー！」

「じめんなさい。阿良々木君の頭が悪いのが移つたみたいで私の耳
が悪くなつたわ。本当にじめんなわー」

「移らねえよー！…だいたい謝りながら悪口を言つつ いじんだけ器用
なんだよー！」

「そんな褒めなくてモ」

「褒めてねえよー！…怒つてるんだよー！」

「阿良々木君ダンスできるの？」

「踊つてねえよ……お前わざと間違つてゐるだろ」

「ええ、わざとね」

「堂々とストレートに言こやがつた」

「素直な子だからね」

「結局やこに戻るんだな」

その後、勉強に戻つた僕達であったが

「あら、もうこんな時間」

時計を見ると針は午後6時を指していた。

「集中すると時間経つのが早いな

「夕飯食べて行く?」

「え? 作つてくれるの?..」

「ええ、仕方がないから手料理を食べさせてあげるわよ

「それは素直に嬉しいな」

「いいからほほ日常物語ではなくて食物語・ひたぎシーフ・よ

「勝手に物語を変えるな!! 料理マンガならぬ料理小説になつちやうよ」

「美味しいんぼや味一もんめやクッキングパパをも抜く大作になるわよ」

「ならねえよ。この小説の作者にそんな能力はない」

「なり出さずまでよ」

「ついにながら包丁を取り出した。

「ちょっと待て、危ないよ。てか僕達と作者は住んでる次元が違うよ」

「なら阿良々木君が代理で受ければいいじゃない」

「なんで僕なんだよ……って包丁を持ちながら近づいてくるな……」

「だつて阿良々木君は主人公Aじゃない」

「だから、Bは誰だよ……」

「佐藤B作よ」

「何一つ上手くねえよ……とりあえず佐藤B作さん」謝れ

「阿良々木君が失礼な発言をしてしまい申し訳ありませんでした。これからは私が教育者として更生をせていきます」

「だからなんで僕なんだよ……てかこのぐだり2回田だよ」

「あ、覚えてたの？鳥頭じゃなかつたのね」

「も、僕が悪かつたから許してくれ」

「最初からそいつ言えればいいのよ。あと料理なのだけれど塩と砂糖を間違つちやつたってベタな展開を望むのならしてあげるけど」

「そんなこと言われてやつてくれと書つやつがいたら僕が説教してやる」

「そ、なら無しでいいのね」

その後はちやんとした戦場ヶ原の手料理を食べて帰宅した。

味の方は普通に美味しかった。
うん、本当にこれは冗談抜きで。

クロネコ「クロネコだぜーー！」

阿良々木「阿良々木だよ。つて紹介の仕方も妹達と一緒にー？」

クロネコ「だつて一応、次回予告だしね」

阿良々木「理由になっちゃいないよ」

クロネコ「で、なんなんすか?」「んなとこ出しありませーー！」

阿良々木「お前な、もう少しガハリをアトしてやれやんよ。あれじゅツンデレじやなくヒツンツンじやないか」

クロネコ「だつて僕には何の影響も無こですしね」

阿良々木「僕にはあるんだよーー！」

クロネコ「んじゅ、番外編で書つて下せーー！」

阿良々木「またあのグダグダするのーー！」

クロネコ「いや次は別の企画で」

阿良々木「どんな駄作になるやー！」

クロネコ「されでは、予告編クイズーー！」

阿良々木「くいすー」

クロネコ「いつ戦場ヶ原さんはテレるのでしょうか?」

阿良々木「お前次第だよ」

クロネコ & 阿良々木「次回、『よみ』イリー 20」

クロネコ「番外編は化物語×生徒会役員共の予定ですよ」

阿良々木「その回は絶対に出たくない」

「よみティリー 20（前書き）

ああ～日本のどこかに～私を待ってるヒキガエル～

では、よみティリー 20 です。

帰宅した僕は休憩しようとベッドに寝転がった。

なんだか今日は勉強以外で疲れたなあ。

勉強以外と言つのは戦場ヶ原との掛け合い以外ないけど。

しばらく休憩し、お風呂に入つとした時、携帯が鳴つた。

ん？ 神原？ 珍しいなあ こんな時間に。

「神原、どうしたんだ？ こんな時間に」

「その声と卑猥な言葉は阿良々木先輩だな」

「お前がかけたのに分かつていなかつたのかよ。てか僕の言葉のどこに卑猥な単語があつたんだよ！？」

「こんな時間と言つのはほとんどの人は夜中と思つだらう。夜中と言つのは口ことが増えるだらう。ほら卑猥ではないか」

「もうお前の頭が心配だよ。で、なんだよ？ 用件は」

「ああ、そのことだ。変態なんだ！？」

「それは知つてるよ」

「間違つた。あまりに変態なものだから大変と間違つてしまつた。

「これで2回目だな。私は意外と天然キャラなのか？」

「切るぞ？」

「あー悪かった。ちゃんと話すから……実はな」

「ああ」

「ガリガリ君で当たりが出たのだ……」

「切れば良かったとこの時、後悔をした。」

「…………」

「阿良々木先輩？」

「…………」

「何か言つてくれらぎ子ちゃん」

「それは言つなあ……」

「なんで無視をするんだ」

「もしかしてお前の用件ってそれか？」

「ああ……あまりにも嬉しくてな……これは交換してもう一本貰うべきか記念に置いとくべきか阿良々木先輩の意見を聞こうと思つていたんだ」

「知らねえよ！…好きにすりゃいいだろ！…！」

「わかった！…では脱いでから交換しに行けばいいんだな？」

「どにその選択肢があつたんだよ！…だいたい繋がりが全くねえよ」

「完全にあるではないか。ガリガリ君はダウンタウンの浜ちゃんに若干似てる。浜ちゃんと言えば芸人。芸人と言えば最近の若手芸人。若手芸人と言えば脱ぎたがる。脱ぎたがると言えば神原駿河ではないか」

「無理矢理過ぎるよ！…数学で言つと式は適當で間違つているのこ
答えだけ合つてるやつだよ！…」

「私の前では方程式や当たり前は無力化されるのさ。燃えている家
を普通は水で消すとこを、私の場合は、ガソリンで消すのだ」

「大爆発で大惨事だよ！…」

近辺の家はぶつ飛ぶぞ。

「ではわつまゝもを投げるとするか

「美味しい焼き芋の出来上がりだな

「芋と言えば阿良々木先輩、花物語なんだが

「芋はどにに行つた！？」

「芋も花も一緒にないか

「一緒にないよーー。」

「どうせだったら一緒になるんだよ。

「まあ、花物語に限らず、囮物語と傾物語の3つって化物語シリーズの私と千石ちゃんとハルサちゃんの各話を完結するための話なんか?」

「千石は最終巻になるみたいだけビ考え方によひちやそひ思えないこともないな」

「だから3つともに化の字が入っているのか?」

「たまたまじやねえの? 羽川の猫物語は化つて入っていないし、これから出る鬼物語と恋物語も入つてないし」

「結論から言うと私は脱げー」

「じゃあ、またな」

「これ以上話してると本当にダメになってしまいそうだつたので無理矢理切つた。

その後、神原からメールが来た。

「一方的に切つてしまつ新しいプレイだな。うん。悪くないぞ。むしろゾクゾクする」

「こつを喜ばすだけだつたか。

今度は違つ方法を考えとかないとな。

その時、部屋に火憐ちゃんが入つて來た。

「兄ちゃん、電話誰だつたんだ？」

「人の話を聞くな」

「悪い悪い。で、誰？彼女さん？」

「違うよ。神原だよ……ってお前知らないな」

「何…？神原さん…？」

え？何？めちゃくちゃ食いついてきたんですけど。

「なんで兄ちゃんなんかが神原さんと知り合いなんだよ…？」

「別に良いだらうが」

「兄ちゃん…」

「なんだよ？」

「一生のお願い…神原さんご余わして」

「駄目だ」

「何でだよ？」

だつてこいつらを会わしたら神原の理性が持つかわんねえもん。

「駄目なものは駄目だ」

「頼むよー。偽物語の話なのに先にしちやつてるんだぞ」

「そんなの知らねえよ！！」

「本当は月火ちゃんの服を借りてスカートで兄ちゃんに抱きつくはずだったんだけど先にしてしまったからジャージになってしまったけど」

「アーティストでアーティスト」

「わかつた！　私の処女やるから」

「いらねえよーーーてか何言つてんだよーーーいつはーーー」

「じゃあ、偽物語のアニメ化を延期でいい」

「延期も何も予定すら立てねえよ」

「でも去年の短冊に私達書いたぜ。偽物語アニメ化つて」

「書いて思い通りなら今年は大変な」とになるよーー。シャフトの皆さん過労死だよ。」

「じゃあ、短冊意味ないじゃん」

「ああこいつのは書いてそれに向けて頑張るもんなんだよ」

「えー。あ、それより兄ちゃん、セクハラ男子高校生なんだけどもう少しでわかりそうなんだぜ」

「Realtor?」

「なんで英語なんだよ? まあ、本当だよ」

「おー、どうかいの」

「なんだよ?」

「今度、神原を紹介してやるからその検査は打ち切りにしや」

「えー? マジでー? 神原さんで会わしてくれんのー?」

「ああ、もちろんだ。だからその検査は打ち切り」

「わかったー! 検査は今をもつて打ち切りにするーー迷宮入り決定だ」

「んじゃ、神原に会ってる日を聞ことくからまた教えるよ」

「頼んだぜ兄ちゃんーー!」

「ああ」

「さすが兄ちやんだぜーーー本当頼りになるよ。私の処女いるか?」

「いりねえよーーー！ とりあえず、部屋から出でこけ」

「イヒツサーーーー！」

とりあえず、これで僕の命は助かつた。
妹達を神原に会わすのは気が引けるけど今回ばかりは仕方がない。
そして、戦場ヶ原と鹿児島へ旅行に行く前日、戦場ヶ原に呼び出された僕は戦場ヶ原の家にいた。

「さて、阿良々木君」

「なんだよ？」

「なんでこるの？」

「お前が呼び出したんだろーーー！」

「私、召還技とか使えないわよ」

「その呼び出すじゃねえよーーー！ 電話で呼び出しだらうが」

「知ってるわよ。阿良々木君みたいに馬鹿じゃないんだから」

「うるせえーー！ 僕に馬鹿馬鹿言つただい！ これでも小学校の頃はお利口さんって言われてたんだぜ」

「口コロンさん？」

「お利口さんだよーーー！ 誰が口コロンさんだよ」

「阿良々木君、今高校三年生だから口っこいの高校三年生で駄して
口っこいのな」

「上手こじと書つてんじやねえよーー。」

「アダ名は任せなさい。なんて書つたって私は直江津の有吉弘行よ」

「じゃあ、羽川はなんだよ」

「猫耳委員長」

「う……思ったよりも良い。じゃあ、神原は？」

「露出狂」

「そのまんまじやねえか」

「なら自分はどうなんだよ。自分にアダ名をつけるなんてとてもじ
やないけどできなにけどな」

「ひたぎ様よ」

「躊躇せずに書こいやがつたーーしかも、様つて

「当たり前じゃない。神は私の下僕よ」

「失礼なことを書つんじやねえよーー。罰が当たるだ。てか、この中
じゃ僕の酷さが際立つてゐよ」

「ああ、頭の悪さが際立つてゐるわね」

「アダガの話だよーー。」

「明日の話なのだけれど」

「無理矢理話を変えるなーー。」

「阿良々木君と無駄話してゐる時間は私にはないの。」その後、私はこの畳の目を数えないといけないのよ」

「ぬひやぬひや時間あるじやねえかーー。」

「冗談よ。」

「何故疑問系ーー。」

「人生には正解の答えはないのよ。それと一緒によ

「これに関しては正解の答えが出せるよ」

「じゃあ、正解は本気ね」

「セーは冗談にじとけよーーまあ、いいや。それより明日の事なら別に電話で良いじゃないか」

「阿良々木君に飽いたかったのよ

「僕に飽きたのかーー。」

「「めんなさい。漢字が間違つてたわ」器用な間違いをするなあ。
僕は初めてだよ。

喋つて漢字を間違えるやつなんて。

てか、間違つたかすら普通わからねえよ。

「会つたかったのよ

「僕の考えが間違つていた。許してくれ

その後、明日の時間やその他のことを話して帰宅した。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「前は乗つ取られて私達の出番がなかつたな」

月火「そうだつたねえ。しかも、下手だし」

火憐「もつやらぬ方がマシだつたよな？」

月火「本氣でやらぬ方がマシだつたよ」

火憐「後で兄ちゃんには説教をしないといけないな」

月火「うん。とことん反省をしてもらおう」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「次回はどうすんの？今回で20回目だから例のやつなの？」

月火「まあ、一応あれでいいんじゃない？」

火憐＆月火「次回、『よみデイリー 番外編2』

火憐「やらない方が良いと思うけどな」

月火「もしかしたら、変更で本編をするかもね」

田口さんがだいぶ空きましたね。

わあ、黒歴史の開幕です？

戦場ヶ原「今回、『よみ』ティリー番外編2を担当するのは、神は私の弟子。戦場ヶ原ひたぎと」

神原「特技は、ファイヤーボール。神原駿河だ」

戦場ヶ原「今回は、あなたと二人での進行なのね」

神原「ああ。ヴァルハラコンビ復活だな」

戦場ヶ原「そうね」

神原「ところで戦場ヶ原先輩、生徒会役員共のメンバーを出す案はどうなったのだ?」

戦場ヶ原「ああ、その事ね。実は、アドバイスをもらつたり、考えた結果見送ることになつたみたいよ」

神原「そうだつたのか」

戦場ヶ原「ええ。だから、今回は今までの『よみ』ティリーを振り返つて適当に話をするみたい」

神原「化物語のDVD or Blu-rayの副音声みたいなやつだな」

戦場ヶ原「簡単に言つと『よみ』ティリーとね」

神原「それと、戦場ヶ原先輩、阿良々木先輩は何故出ないのだ？」

戦場ヶ原「阿良々木君は絶対に嫌だと拒否したみたいよ」

神原「確かに以前から出たくないと言っていたな」

戦場ヶ原「や、前置きを」れぐらいで本題に入りましょ

神原「そつだな」

戦場ヶ原「さて、今回まめけやくせにならなによいテーマを決めましょ」

神原「なんだか今日は戦場ヶ原先輩が頼もしいな」

戦場ヶ原「当たり前じゃない。私はいつも頼もしいのよ

神原「いつもはめちゃくちゃなこと言つてゐるのこ

戦場ヶ原「で、テーマはどうある？」

神原「うーん。今、作者の世界では夏だし海とか夏をテーマにしたやつでいいのではないか? ちよつとひこちらも海とかの話も出てゐるし」

戦場ヶ原「そうね。そつしましょ」

神原「夏と言えばやはり脱ぎたくなるなー。」

戦場ヶ原「神原、いきなり脱線してゐるわよ」

神原「脱線つてなんだか工口いな」

戦場ヶ原「どこの工口要素が入ってるのよ」

神原「だつて、脱線の脱つて脱ぐつて漢字ではないか」

戦場ヶ原「神原」

神原「线を脱ぐとは工口いではないか。线といつことは似ているものは紐だな。うむ。戦場ヶ原先輩、私は今からヒモパンを買ってくる」

戦場ヶ原「神原」

神原「上トセツトになつてゐやつとかあるのかな」

戦場ヶ原「か・ん・ば・る・お・」・る・わ・よ」

神原「す、す、すまなかつた」

戦場ヶ原「で、海なんだけど私と阿良々木君が海に行つてた時、貴方は何をしていたの?」

神原「私はもちろん1日中B」本を読んでいた」

戦場ヶ原「貴方らしこつて言つちや貴方らしこわね」

神原「戦場ヶ原先輩は海で何をしたのだ?」

戦場ヶ原「永遠に遠泳よ」

神原「恋人同士のやることじやないだろ」

戦場ヶ原「冗談よ。さすがにそんなことしてもつまらないもの」

神原「まあ、恋人同士で行つてすることじやないしな」

戦場ヶ原「だつて阿良々木君つて泳げるから溺れたりしないから遠泳なんかしても意味がないじゃなし」

神原「二人は付き合つているというより吐き合つてる氣がするのだが」

戦場ヶ原「失礼ね。一人で暴言を吐いていないわよ。阿良々木君に言わすわけないじやない。私が一方的に言つてるのよ」

神原「相変わらずの関係だな」

戦場ヶ原「それから、前から思つていたのだけれど海で食べる焼きそばはなんであんなに美味しいのかしら」

神原「以前、ファイヤーシスターズも後書きで言つていたな。私もそれは思う。焼きそばに限らず全てが美味しく感じる」

戦場ヶ原「私はこれを海の家焼きそば現象と名付けたわ」

神原「完全に桜庭」「ハルさんのみなみけに出てきたカップ焼きそば現象のパクリだな」

戦場ヶ原「これはパクリではないわ。オマージュよ」

神原「逃げ道を作ったな。ところで戦場ヶ原先輩、作中に出でてきた都市伝説なんだが、私だけ微妙ではないか？」

戦場ヶ原「確かに電車より早く走る少女って微妙よね。なんかリアルというか」

神原「そうなんだ、戦場ヶ原先輩。私に関してはただのスポーツ少女ってどちらかと言うと普通の扱いになつていてるのだ」

戦場ヶ原「これを聞いた限りでは、ずば抜けてスポーツが出来るスポーツ少女って感じね」

神原「ああ。だから露出癖があり、ビニでも全裸になる少女の方がまだ良かつた」

戦場ヶ原「いや、貴方は「脱げばいいのだな」って言いながら結局脱いでのないじゃない。だから普通の扱いになるのよ」

神原「それは阿良々木先輩が脱がしてくれないので……」

戦場ヶ原「その言い方だと、阿良々木君の手で神原の服を脱がせてあげないみたいな言い方になるから辞めて頂戴」

神原「では、今後は強制的に脱ぐとしよう」

戦場ヶ原「神原、脱ぐのは勝手だけど下手したら条例違反だと言われて某知事にこの作品を消されるわよ」

神原「それは困る。私の露出する場面が無くなつてしまつ

戦場ヶ原「あくまでも脱ぐのは辞めないのね」

神原「ところで、戦場ヶ原先輩。夏と言えば海もあるのだが他に何があるか?」

戦場ヶ原「そうね、私は花火も良いと思つわよ」

神原「うむ。花火も夏の定番だな」

戦場ヶ原「線香花火なんかとても良いじゃない」

神原「ああ。確かに線香花火つて良いな」

戦場ヶ原「でも、線香花火つて儂いわよね」

神原「そうだな。だが、そこも良い」

戦場ヶ原「まるで阿良々木君みたい」

神原「本人がいなくても言つんだな。いや、わかつていただけど」

戦場ヶ原「それより神原、そろそろ今回は終わりみたいよ」

神原「何か早くないか?」

戦場ヶ原「作者がこれ以上はネタが思いつかないみたい」

神原「なんか本当駄目だな」

戦場ヶ原「ええ、クズね。阿良々木君と同類よ」

神原「私はそこまで言つてないが。そして、阿良々木先輩も何故か被害を受けてる」

戦場ヶ原「まあ、最後ぐらいちゃんとして終わりましょう」

神原「ああ、そうだな」

戦場ヶ原「じゃあ、一言ずつ言つて終わりましょう。では神原から」

神原「何かあつたらエロいな。神原駿河と」

戦場ヶ原「何かあつたらハツ裂きよ。戦場ヶ原ひたぎがお送りしました」

「よみデイリー 番外編2（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「懲りもせずに2回目をやつてしまつたな」

月火「馬鹿だねえ」

火憐「前よりかは少しさはマシだったと思うけど」

月火「これで前より酷かつたら本当に打ち切りだよ」

火憐「まあ良くなかったけど」

月火「そうだね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「パンはパンでも食べられないパンは？」

月火「予告じやなくて、ただのなぞなぞだね」

火憐&月火「次回、『よみデイリー21』

火憐「答えは腐つたパンだぜ」

月火「リアルな方！？」

れで今回ばかりで話が進むのぢやないか（、）

当口、僕は少し早めに駅に着いていた。

ここは田舎町ではあるが市街地へ仕事に行く人と駅で何人もすれ違つていてる。

すると戦場ヶ原がやつて来た。

「何で私より早く来てるのよ」

「朝一で会つて一言田がそれかよ！…遅れて怒られるならまだしも、早く来て怒られるつて前代未聞だよ！…」

「もしかして、早く来て私に罪悪感を感じさせよつとしてたの？陰険ね阿良々木君」

「そんな」とするか……

「朝からつねさいわね。鶏と一緒にね」

「鶏と一緒にするなや……」

「鶏…鳥…鳥頭…すぐ忘れる…馬鹿…ああ仕方がないのよね」

「そんな哀れな田で見るな……」

「人偏に哀つて書いてなんて読むんだつたかしら」

たぶん、僕だな。
たぶん、あらう。

「のまめいじこーのもあれなんで、ホームに移動した。

「阿良々木君つて怪我しても治るのよね?」

「ああ、大抵のことは」

「じゃあ、電車が来たら飛び込んでも治るの?」

「バラバラになるよー! ただの人身事故だよー!」

「一回やつてこよ」

「やんねえよー!」

確實に死ぬわ!!

でも、忍に血を飲んでもうつたらどうなるんだ?。

たぶん、跳ねられる前に電車を止められるな。

「もし、やつて生きてたら、良かつたわねって言つてあげるわ。死んでしまつたらそれが阿良々木君の寿命つてことよ。どう?」

「どうじゃねえよー! ハイリスクノーリターンじゃねえかー!」

「大丈夫よ。お葬式は出てあげるから」

「やつこつ」と言つてんじやねえよ」

「さう。じゃあ、次の急行が来た時にやつましが

「僕の話を聞いてましたか？ひたぎさん？」

「ええ、聞いてたわよ。そのまま、逆の耳から出て行ったけど

「聞いてないじゃねえか！？」

「昔流行つたじゃない。右から左へ受け流す歌

「ずいぶん懐かしいな」

「最後は自分が時代に受け流されたみたいだけど

「思つてゐるほどそんなに上手くなつよ

その後、無事に電車に乗ることが出来た。

この無事と言つのは例の実験をせずのことである。

「それよつそろそろ私が偽物語で下してゐる時期ね

「話の展開が目まぐるしいな。まあ確かにそんな時期だな

てか最近、何の抵抗も無くメタ話に入つていつてる自分が情けない。

「じゃあ、今から阿良々木君の頭を殴つて拉致して良いかしぃ？』

「良くねえよ！…なんだよ、その新手の拉致の仕方は

「もしくは、鹿児島で殴打して拉致りましょうつか？」

「いろいろと話が進まなくなるよ」

「大丈夫よ。私一人でキャンプを楽しむから」

「一人でキャンプって強い心臓の持ち主だなーー」

「いや、前からわかつてたけど。

「だいたい、僕はどうすんだよ」

「山に棄てて帰るわ」

「やめるーー」

「『めんなさい。阿良々木君は』『だから棄てるじゃなくて捨てる
だつたわ』

「いつになつたら僕はまともな人間扱いになるんだ」

「えー？ 阿良々木君つてまだ人間扱いされることに希望を持つてい
たの？」

「純粹に驚かれた！？」

「『』で戦場ヶ原ひたぎの化物語クイーズ」

「なんだよ、いきなり」

「『アリ』は『アリ』でも人間の形をした『アリ』ってだーれだ

「完全に僕じやないか！！」

「あー、自覚してたのね」

「自覚されたんだよ」

「そんな阿良々木君にジンデレサービス」

「前にもあつたなこんな」

「阿良々木君つて本物『アリ』ね。でも『アリ』は『アリ』でも捨てられない大切な『アリ』なんだからね」

「今日は酷い！…結局、終始言つてたのは僕が『アリ』ってことだけじゃねえか！…」

「アリ以上、アリ未満」

「アリじゃねえか！…」

「疲れたから寝てもいいかしら？」

「お前が言い出したんだろ！…」

「もつとクールにアリが出来ないのかしら？」

「あやかのアリにアリに對してのダメ出し！？」

「生徒会役員共の津田君を見習になさい。あの神ツツ「ハリ」を」

「どんだけ津田君を推すんだよ」

「そろそろSYD48って、AKB48の姉妹ユニットかなんかか？」

「なんだよSYD48って。AKB48の姉妹ユニットかなんかか？」

「S（生徒会）Y（役員）D（共）よ」

「あのマンガに48人も出たの見たことないぞ」

「大丈夫よ。適当に水増しするから。最悪、私達が入ればいいですよ、直江津メンバーが」

「それでも足りないよ」

「じゃあ、足りなかつたら足りなかつたで別にいいじゃない。そんなの適当で」

「今すぐ、SYD関係者と秋元さんに謝れ……」

「E s t u t m i r l e i d . 」

「日本語で謝れ……誰がドイツ語がわかるんだよ」

「よくわかったわね。阿良々木君のくせに」
「くせにってなんだよ」

「何で知ってるの？」

「まあちよつとな

「ああ、あれね。アスカに会いに行きたくて必死に勉強したのね。でも、それは叶わないことよ。アスカは実在しないのだから。この現実を言つことで阿良々木君を傷つけてるのはわかってる。わかっているけど阿良々木君に気づいてほしかったから

「ちよつと待て！－なんで僕がアスカに会いたくて勉強した体で勝手に話を進めてるんだよ

「えー？違うのー？」

「本日2回目の純粋な驚き！？」

「でも、阿良々木君つてパソコンに向かってギャルゲーしながら人で「設定の勝利ですな。うえつへつへつへつて言つて」

「ねえよーーーお前のせいだ僕のキャラがどの方向に進んでるかわからなくなってるよー！」

「隠さなくていいのよ。私はどんな阿良々木君でも受け止めるから

「隠すも何も事実無根だよ

「徹底して否定するわね

「徹底して攻めるんだな

「それよつ、阿良々木君」

「なんだよ?」

「前回の番外編2の時に私は阿良々木君が泳げる発言したけど、化物語アニメコンプリートガイドで書いてある、なでしこプールを読み返したのだけれど、阿良々木君泳げないみたいじゃない」

「ああ、吸血鬼の後遺症でな」

「これじゃあ、私が嘘つきみたいになるじゃな」

「いや、まあ作者が忘れてたんだからお前は関係ないよ」

「それでもよ。それでも私が言つたのに違ひはないから

「から?」

「言つたのに違ひはないから、今すぐ泳げるようにならせる? いえ、泳げるにしなさい」

「無茶を言つな!」

「そうすれば私が嘘をついたといつこの既成事実を隠蔽することができるわ」

「公の場で何堂々と隠蔽宣言じてるんだよ!」

「つひばっくれるよつまシよ」

「いや、まあそうだけ」

「今起きてるこの現状を解決するには阿良々木君が泳げるようになるのが一番なのよ」

「でも、さすがにそれはキツイぞ」

「わかったわ。なら、これからは泳ぐ時は体の周りに泳ぐペッシュトルを巻き付けて泳ぎなさい」

「このこの言ひ方をたけど結局、なんの解決にもなってないような気がするが」

「これで良いのよ別に。ややこしくする」と読者は読む所を無くして、ああ結局泳げるんだとなるのよ」

「誤魔化してるだけじゃねえか」

「まあ結論から言ひ方を、言ひてしまつた」とは仕方がないから後はノリでどうとかかるのよ」

「じゃあ、このやつとは一体なんだったんだ」

「文字稼ぎよ」

「ただの時間の無駄使いだよ……読者に謝れ……」

「ハイハイ、サーベン、サーベン」

「謝る気ゼロだな」

やつこひの内に東京駅に着き、そこから新幹線に乗った。

贅沢だなって？

まあ、貯めていたお年玉とかあつたし、基本僕はあまりお金使わないから余っているんだよ。

使つって言つてもエロ本…………おつとこれ以上は言えないな。

それより最近つて便利なんだな。

いつの間にか東京から鹿児島まで新幹線が通ってるんだもん。まあ、新大阪で乗り換えはあるけど。

「よみティリー 21（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「私達も鹿児島に行きたかったなあ」

月火「行きたかったねえ。でも、今回は仕方がないよ」

火憐「兄ちゃんの鞄の中に入つたら行けたんじゃねえか？」

月火「私は、そんなエスパー伊東みたいなことしてまで行きたくな
いよ」

火憐「私は兄ちゃんの為ならなんだつて出来るぜ」

月火「素晴らしい兄妹愛だね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！？」

火憐「今回のクイズはお休み！？」

月火「休み！？」

火憐&月火「次回、『よみティリー 22』

火憐「作者がクイズのネタが本当に浮かばなかつたんだって」

月火「まあ、今回だけは許してあげよう」

1. ジャムトレイー 22 (前書き)

いろいろ忙しくて遅くなりましたm(—_—)m

また、今回はグダグダになつたんですが今日は見逃してやつて下さい(^\o^)

目的地、1991年から4年連続で日本一星空が綺麗な場所にもなった輝北つわば公園についた。

周りには、キャンプに来たであろう家族や友達グループがいた。

「恥ずかしいわ」

「何が？」

「いや、ほら周りは家族や友達グループじゃない」

「ああ、確かに恋人同士っていうのは少ないけど別に気にすることないだろ？お前にしては珍しいな」

「あの子あんな生きたアホ毛を生やしててる男を連れて来てるって思われないからしら」

「思われねえよ！…だいたい動くのはアーメだけだよ！…何回言つたらわかるんだよ」

「何回言われてもわかりたくないわよ」

「なら」のくだりは一生終わらねえよ…！」

「ところで阿呆良木君」

「僕がアホだと皆に勘違いられるだろ。一応言つておく、僕の名前

は阿良々木だ

「失礼、噛んだわ」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「狩り出した」

「何を！？」

「阿良々木君を。通称、阿良々木狩りね」

「そんな通称聞いたことねえよ！！」

「ちなみにネットで、アホ毛、馬鹿、狩りと調べると阿良々木狩り
が出てくるわよ」

「適当なこと抜かすんじゃねえよ！？」

「もう一つ、阿良々木狩りとは全国の直江津高校3年の阿良々木暦
が狩られることよ。不意にやられるために犯人はわからないみたい

by・Wikipedia

「Wikipediaにそんな情報はないし、完全に僕しか被害者
いないじゃないか！！それに犯人はいるとしたら戦場ヶ原、お前だ
よ！！」

「え！？何でわかつたの！？」

「素でびつべつあるなや」

「もしかして、阿良々木君って名探偵なの？」

「小学生でもわかるよーーー！」

「名探偵」よみ……ダッサ」

「自分で語っておいでタサいはないだろ」

見た目はアホ毛
頭脳は空っぽ

「それ何の生き物だよ!!」

院内々木君に決まつてゐる事なし

僕の本体がアホ毛だと！」

還元法

「違ひ」
—
—

「」の毛の部分が阿良々木君でそつから下が「え！？何」の物体
つてやつじゃないの？」

「そうだったから僕の評価がわからなくなってきたよ」

「そんなんに知りたいなら死んでみたらわかるわよ」

「なんで死ななきゃならねえんだよ……」

「ほら、蓋棺事定つて言ひじやない。生前の評価は当てにならない。一生が終わり棺にふたをして初めてその人の真の値打ちが決まるのよ」

「へえ。初めて聞いたな」

「だつて馬鹿だもの」

「わざと懸口を言いやがつた」

「じうする。知りたければ私が手伝つてあげるわよ。まあ、そうしたところで阿良々木君が知れるわけでもないし私も知りうとしないけど」

「それが本当の無駄死にだな」

「評価なんて気にしなくていいのよ。私は阿良々木君が必要だから側にいるの」

「戦場ヶ原」

「アホ毛が阿良々木君だろ? と阿良々木君がアホだろ? とどつちでもいいのよ」

「おー、悪口入ってるぞ」

「『1』みんなさーご。つにこつもの癖で言つてしまつたわ

「もう一回言つてくれないか?」

「恥ずかしいけど仕方ないわ。アホ毛が阿良々木君だひつと阿良々木君がアホだろひつとびつちでもにこのも」

「それだよーーーその最後の部分が今までの言葉を帳消しにしてるんだよーーー」

「アホよりバカの方が良かつたからしぃ」

「やうこりう」と言つてんじやねえよーーー

「やうよね。アホをバカにしたらバカ毛になるから変になるものね

「アホ毛でもバカ毛でもどつちでもいいよーーー」

「何をそんなに怒つてるのよ」

「……もう、いいです」

「そ、なら良いわ

結局、今日も言つて負かされた僕がそこにいた。

「そういうなんとなく思つたのだけれど私達の話つて阿良々木君と忍野さん以外女の子しか出ないのだけれど、私達の高校の男女比率つてどうなのかしら?」

「知らねえよ。それ」そ本家である化物語を書いている西尾先生に
聞けよ」

「なら、この話だけでも決めておきましょ」

「まあ、いいけど」の日常物語に関係あるのか？

「全く関係ないわ」

「ならなんで決めるんだよ」

「だつて他の人にもし聞かれたら答えられないじゃない」

「聞くやついねえよ。まあ、その辺はお前が決めてくれ」

「そ、じゃあ……私達のクラスは男子18人、女子17人」

「おお、意外とまともだな」

「阿良々木一人」

「なんで僕だけ別枠！？」これはイジメだろ……」

「え……だつて……阿良々木君だもの」

「理由になつちゃいねえよ」

「仕方ないことよ。これは直江津高校の校則なのだから」

「そんな校則ねえよ……学校ぐるみでイジメに参加してんじゃねえか！」

「阿良々木君がこの学校に受かったのは、この校則を作るためよ

「どこのまで僕をイジメたいんだー!?」

「実は学校が決めたんじゃなくて国が決めたことよ

「僕が何をしたって言つんだー！海外へ逃げなきゃならぬのかよ」

「ちなみにその他の国へは報告済みだから逃げても意味ないわよ」

「遠回しに地球外退去通告ーーーの国のトップは何してくれてんだ

「

「あと、この国や他の各国を動かしてるのは私よ

「やつぱお前かー！てかどんだけ権力あるんだよ」

「まあ冗談はおこないで、さつさとテントを張るわよ

結局、言いたいだけ言った戦場ヶ原はせっせとテントを張り出した。

「こいつはまだデレないのか？」

「むしろ日に日にシンの部分が侵食していくのか？」

テントを張った後、近くを散策しに行き、帰つて来た頃には夕方になつていた。

夕食なのだが、キャンプ場と言えばやはりカレーが定番である。

「キャンプ場と言えばやっぱりカレイよね」

「えー？」

「私としたことが間違つたわ。カレーよね」

「器用な間違いをするんだな。それよりお前カレー作れたのか？」

「当たり前よ。私にとつてこれぐらい日常異端児よ」

「ああ、お前は迷うことなき、これ以上ない異端児だよ」

それを言つながら日常茶飯事だろ。

「失礼。噛んだわ」

「違う。わざとだ」

「噛みまみ……それより一人だからカレーの量は少なめで良いわよね」

「途中で飽きるなや……」

「私のネタなんだからどうしようと勝手でしょ」

「違う。それはハ九寺のネタだ」

「ハ九寺?誰よそれ」

「いや、お前知ってるだろ？あいつの母親の家を一緒に探しに来ただろ？」「うが」

「5年3組のハ九寺真宵ちゃんなんて一切知らないわよ」

「めちゃめちゃ知ってるじゃないか」

「正直、私は田々久クビクしながら生きてこるのは」

「なんでだよ」

「噛みネタを最近多用しているから、いつハ九寺の圧力がかかって私が降板させられるか心配なのよ」

「いやその心配はないだろ」

「ほら、八九寺ちゃんが使うの、もう定番だから噛みネタと言つより神ネタなのよね」

「そんなんに…？」

「ええ。あと生活には関係ないけど阿良々木君が降板しないかワクワクしてくるのよ」

「ワクワクするな…！だいたい主人公が降板する小説がどこにあるんだよ」

「ううん」

「断言しやがった…！」

「大丈夫。阿良々木君の代わりに私が最後までやつてあげるから。
だからもう、ゆっくり休んで頂戴」

「えー？ 死ぬのー？ 僕死ぬのー？」

「タツチであつたじゃない。カツちゃんが交通事故で亡くなつてタ
ツちゃんが靈安室で「綺麗な顔してゐるだろ？死んでるんだぜ、それ。
大した怪我もないのに、ちょっと打ちどころが悪かつただけで、も
う……動かないんだぜ」と言つたゼリフが

「だからつて関係ないだろ。どに繋がりがあつたー？」

「私は直江津の浅倉座よ」

「誰でもわかるよつな嘘をつく感じやねえーーー」

「とつあべず言つべりこ良いじゃない」

「まあ、言つべりこ好きにしちゃよ」

「だからその為にゆつくつ休んで頂戴と言つてこるのよ」

「なんでお前の言つたい言葉を言つ為だけに死ななきやならねえん
だよ」

「霧岡氣でないじゃない」

「霧岡氣出すためだけに人を死なすんじゃねえーーー」

「仕方ないわね。じゃあ、そのままで良いわよ」

「当たり前だよ」

「じゃあ、言つわよ」

「お好きにどうぞ」

「綺麗な顔してるだろ？アホ毛なんだぜ、それ。大した学力も無い
くせに、ちょっとトライに訳のわからない物体が付いてるだけで……動
くんだぜ」

「てめえこじまでの僕と読者の時間を返しやがれ……」

「何を怒つてるのか私にはさっぱりだわ。ただ私は阿良々木君を馬
鹿にしただけなのに」

「それだよ！！それが大きな原因でハチャメチャになつてんだよ！
！もう収集つかねえよ」

「そんなもの私がどうにかしてあげるわよ」

「やつてみるよ」

「阿良々木君、カレーが出来たわよ。『飯にしましょ』」

「…………ああ、やうだな」

無理矢理話を落としやがった。

そんなこんなで僕達は夕飯食べながら、星が見えるまで待つので
つた。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なあ、月火ちゃん。なんか話が進むペース遅くないか?」

月火「そうだねえ。いつになつたら1日が終わるんだよってなるよね?」

火憐「他のメンバーの登場時間が大幅に減つてているから一回デモを行うといけないハメになるぜ」

月火「特にハ九寺ちゃんは最近めつきり減つたもんね」

火憐「そろそろハ九寺Pの圧力がかかるな」

月火「そうだね」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「夏の大三角形の反対は?」

月火「冬の大三角形!!」

火憐&月火「次回、『よみデイリー』23」

火憐「正解は形角三大の夏でした！！」

月火「インチキクイズだ！！」

勝手に改ページせねばつして直されてしまつたが何回やりても駄
目だったので諦めました。

「あれが『テネブ。アルタイル。ベガ。有名な、夏の大三角ね。』って以前も言つたから言わなくても良かつたのよね」

「いや、それでも話してくれて良い」

「ああ、鳥頭の阿良々木君だから忘れてしまつたのね。可哀想だ」

「雰囲気ぶつけ壞しだよーー！」

なんだよ、せつかく」の小説にしては珍しく良い感じの話の雰囲気になりかけたのに。

「冗談よ。それより小学生の時、流れ星が流れてる間に願い事を3回呟えると叶うって言われてたわよね」

「ああ、そういうやうなこと言われてたな」

「流れ星つて宇宙に漂つてゐる塵とかの宇宙」などじょ

「まあ、宇宙」などじょて言わると小石とかもあるから少し違つかもしれないが、まあ当てはまらなくもないかな」

「あの光つてる」などじょにお願いをしてたのよ。今思えば滑稽よね」

「いや、まあ夢があつて良いじゃないか

「地上で走つと、全力で走つてゐる阿良々木君にお願いをしてる様な

「あら」

「最終的にやつぱつ先は僕に向くんだな」

「遠回しに言つてやがる。

「よくわかったわね。自分が言われてるなんて」

「名前を言われてるこの状況で自分が言われてないと思つてる奴は話を聞いてこないやつだけだよーー。」

「阿良々木君の分際でよくなれ。頭が回つたわね。口コロコロさんね」

「口コロコロさんやねえーー。」

「「あんなやつ。間違つたわ、お粗口さんな」

「どうにじる僕の「」とほなーのかーー。」

「やうね。言つてることはなーどがあるものね」

「「まつてはいけない」とほなーのかーー。」

「でもね、阿良々木君」

「あん~」

「私は阿良々木君との流れ星を、この空を見れたことを本当に良かつたと想つてこるの」

「ああ、僕もだよ」

だから、この場所を選んでくれてありがとう

「おめでとうござります。」

夏の大三角形を見たのなら冬の大三角形も見たいですね。

・また探しでおくよ

ええ お愿いが叶わ

それからじはらぐ星空眺めた僕達は眠りについた。

でした

途中 ツイントリ川の小学生が目の前に現れた

ちよこと相手をしてやるが

そう思ふたと同時にボルトもヒックリの速度で駆け出した。

卷之三

「会いたかつたぞ八九寺ー！！久々だなー！！もつと触らせろ。もつ

と揉ませろ。」

「那樣————那樣————」

八九寺は叫んだ直後、

ガリツ

痛いのも何しやがるのも僕だつた。

落ち着け 落ち着くんたハ九寺

ああこれはこれはタヒオがさん

「戻るの早！－てか、僕を熱帯地方のキヤツサバの根茎から製造した澱粉みたいな名前で呼ぶな。もう一度言つが、僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

違う、わざとだ

「醫めいみみた」

「わざわざじゃない!?」

「去りました」

「出番が無かつたからかー? 戻つてこいー!」

久々に本家のネタを聞けて和んだ僕がいた。

「お久しぶりです。阿良々木さん」

「本当、久々だな」

「ええ、最近は阿良々木さん×戦場ヶ原さんの「コンビしか出でていませんでしたしね」

「戦場ヶ原が不安がつてたぞ。ハ九寺Pの圧力で消されるつて」

「戦場ヶ原さんを消す前にこの作者を表社会から葬ります」

「IJの小説がそこで最終回を迎へちゃつよ」

「私が後を継ぎますから大丈夫です」

「お前が書いたら絶対、違つ話にするだろ」

「よく分かつてているではありますんか、阿良々木さんの分際で」

「誰だつて分かるよーー!」

「まあ、まあ!」よみ^テイリーからまよ^コオンリーにしますね

「一人称が女子小学生の話かよ。ただの作文みたいになるじゃねえか」

「大丈夫です。私は阿良々木さんより語彙が多いのです」

「小学生のお前に負けるはずないだろ」

「前にも言いましたが私は生きていれば阿良々木さんより年上なんですよ。ちなみに徳川家康は私のパシリです」

「分かりました嘘をつくんじゃねえ！…てかお前何歳なんだよ…。それなら完全に忍と同じ様な年じゃねえか」

「嘘ではありますん[冗談です」

「冗談つて言葉は便利だな」

「阿良々木さん並に便利です」

「どういってんだ？」

「頭が悪いなと言われたら頭悪いんじゃない阿良々木なんだと言え
ば良いからです」

「あ？…………ああ、なるほど、お前は僕を馬鹿にしてるんだな？」

「馬鹿になんかしてしませんよ。馬鹿なんです」

「お前は戦場ヶ原か…。」

「阿良々木さんはTwitterやブログで見つかりやすいですね」

「それも意味わかんねえよ」

「Twitterやブログでは個人情報を漏らしたり、悪さをしたのを武勇伝みたいに書き込んだりしているの知っていますか？」

「ああ、最近多いな」

「そのことからバカ発見器と言われてるんですよ。わかりましたか？」

「ああ、分かったよ。お前が何を言いたいのか分かったよ。僕が馬鹿だと言いたいんだな」

「賢いですね」

「うるせえ……これは出るとこ出るしかいけねえみたいだな……！」

「出るといじ出るですって……いやらしくです……！」

「やういつ意味じゃねえ……法廷だよ……！」

「良いですが、今まで阿良々木さんがしてきた悪事を」こちらの弁護士が見逃すと思いますか？」

「八九寺、アイス買つてやるうか？」

「この人最低です……アイス1つで自分の悪事を揉み消そうとしてます……！」

「ハーゲンダッツでもいいぞ。なんならハーゲンダッツのバリュー パック買つてやるうか？」

「高級アイスを出してても悪事は消えませんよ」

「ハハなつたら泣き寝入りするしかないな」

「本来ならその言葉は私が言はずの言葉です。戦場ヶ原さんに半殺しにされても仕方ありませんよ」

「大丈夫だ。僕はコキブリ並の生命力があるからな」

「ああ、新聞紙で叩かれると死ぬんですね」

まさかの一本取られた状態になつてしまつた。

「それより、今日も勉強ですか?」

「ああ、昨日まで旅行だつたし切り替えて勉強しないといけないからな」

「そういや、鹿児島へ行つてたんだしたね」

「あれ?お前には会えなかつたから言つて無かつた気がしたけど」

「こよみティリーを毎回読んでますから」

「偉いな」

「ハ九寺ヤとしての仕事です。それよりビリでしたか?」

「ああ、良かつたぞ」

「そうですか。面白くないですな」

「いや、普通に旅行行つただけだから変な期待されても」

「流れ星が一つ二つ阿良々木さんに衝突してれば面白くなつてたのに」

「事件だよ！」「ニュースで放送されるわ」

「良いじゃないですか有名になつて」

「有名になる前に大惨事になるよ！」「私から話題を振つといてあれなんですが、長い間話していますが時間は大丈夫なんですか？」

「ああ、……じゃあ、そろそろ行くわ」

「わかりました。それでは、また」

「ああ、またな」

八九寺と別れた僕は図書館へ向かつた。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「そろそろ夏も終わりだな」

月火「そうだねえ。早かつたよ」

火憐「皆は宿題終わつたかな?」

月火「終わつたかな?」

火憐「ちなみに私は終わつたぜ」

月火「私も! !」

火憐「小学校の時の日記つて大変だつたよな?」

月火「そうだね。最後の日までやらずに置いてたら天氣がわからず困つてしまつよね」

火憐「それでは、予告編クイズ! !」

月火「クイズ! !」

火憐「私は今までの天氣のデータを元にその日の天氣がわかる! !」

月火「何その特技！？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー 24」

火憐「いや、まあ嘘だけど」

月火「だろうね」

間隔が空きすぎたのかな? とも思ったな。

まあ、まあいいやつさ。

「やつはー、阿良々木君」

「久しぶりだな」

「やうだね。ここのこと勉強も休みがちだったからね」

「今日からまたよろしくお願ひします」

「うふ。よろしくー」

しかし、これだけ勉強から離れてると本気で不安になつてくるな。

「それより阿良々木君、宿題は終わつた?」

「あー、少しだけな」

「宿題は早く済ました方が後から楽だよ」

「それは分かつてゐるんだけどさあ、なんか宿題つてなると勉強をする気が減るんだよなあ」

「まあ、わからなくもないけどな」

「妹の方が先に終わつちやつたから、早くやれ早くやれつてあつひつるやく」

「阿良々木君も大変だね」

少し雑談をした後、勉強をし始めた。

そして、気付くと数時間が経過していた。

「そうだ、阿良々木君。勉強するのも良いけど、自分の力を試すのに模擬試験を受けたらどう?」

「模擬試験なあ。そうだな、受けてみようかな」

「うん。そうした方が良いよ」

「それより羽川、話は変わるけどお前はもう少しうん宿題終わってるよな?」

「うん。終業式から帰った後に終わらせたよ」

「えー? 1日でー?」

「うん」

「お前な、先生の立場も考えてみる。夏休みに遊んでばかりいると駄目だから宿題を出して勉強をさせるのを目的としているのに、それを夏休みどころか夏休みの前日に終わらせてしまつなんて先生は涙目だぞ」

「なんで宿題を終わらせた人間が宿題を終わらせない人間に怒られるのよ」

「まあ、何が言いたいかと言つと 宿題を見せてくれ」

「自分でやりなさい」

その後、羽川から説教をされた僕は家路についた。

あれだぞ？羽川に起こられたくて、あえて宿題を見せてくれと言つたわけではないからな。

「そうだ。僕は出来ない子だから、駄目発言をしたわけに
て叱られたくて言った。」

お前様よ

「なんだよ忍。珍しく夕方になんか出て来やがつて」

「今日は3時のおやつがまだなんじやが」

「今じゅ」

「勝手に作るんじゃねえ！」

「まあまあお前様よ。」リリは一旦、話しえつために라도スグへ行こうではないか

「僕に何のメリットがあるんだよーーー！」

食つ氣満々じやねえか。

なんだかんだ言つても忍に甘い僕はミスドへ向かつた。

「お前様よ、そろそろこの店」と買つてくれんかの?」

「これなつ向をせがせがめの吸血鬼だ」

「ケチな主様じや。ミスドの一軒や二軒、べりこここではないか」

「ミスドもミスドでも単位が違つよ。一ミスドを軒で置くせつなんていねやよ」

「うむ。今いままで言ひなはりはな。こなが方を軒で置くせつなんへして許して」

「ひひせ

「5個な

「10個」

「えー、いらないの？」

「「めんなさい」、「めんなさい」、「めんなさい」。5個でもこことです。いや5個がいいです」

その後、ミスドを買つて家に帰り、現在自分の部屋で宿題をしていふとこりだある。

「ほふあへほふあほ

「お前様よ。ミスドを買つてくれたお礼に宿題を手伝つてやるつか
「ジーナツを食べながら話せ。何を言つているか全くわからぬ」

「えー、マジで、かお前出来るの？」

「？」

「歴史なら大丈夫じゃよ」

「やつこやつ〇〇年も生きてるもんな」

「つむ。歴史だけで良ければ手伝つてやる」

「お願こします」

「ちなみに豊臣秀吉は儂のパシリじゅよ」

「分かつきつた嘘をつくじやね」

「しかも、あやつは大根を空中で切りたくて、自分の刀で斬れなかつたから刀狩りを始めて全部試していたのじゅよ」

「兵農分離政策じゃなかつたの…?なんて自分勝手な理由でアホみたいな理由なんだ…!」

「秀吉は厨一病じやからな」

「いやだー、もひひひつな。有名な戦国武将が厨一病だなんて聞きたくない」

「まあ、全部嘘じやがな」

「分かつてたよ」

その後は、ちやんと手伝ってくれた忍であった。
その後、忍と喋っている時であった。

「兄ちゃん……」

でつかいの方の妹が扉開けて入った瞬間、上から見てすぐに出た。

「ヤバい、早く中に入れ忍」

「もう遅いと思うがなあ」

忍が影に入った直後、でつかいの方の妹がまた入ってきた。

「兄ちゃん！今、超絶美人の女の子が居なかつたか！？」

「い、い、いるわけないだろ」

「私見たつて」

「あー…あの、あれだ！幽靈じやねえのか？」

「これは分かりやすい嘘だつたか。
さすがに気付くだろうなあ。

「あー幽靈か！…なら私だけ見えても納得だな」

馬鹿な妹で良かつた。

「兄ちゃんの部屋に幽靈が出るとはお祓いがいるんじやねえか？
りあえず、月火ちゃん呼んでくる」

「ちよ、ちよっと待て」

「なんだよ」

「大丈夫だ。被害は無いし見えていないから何の問題もない」

「じゃなくて、見えた時のその女の子に危険が及ぶじゃん」

「どうこの意味だ！？」

「どうこの意味って兄ちゃんがその女の子を襲ひじゃん」

「襲わねえよ……」

「絶対嘘だ！……だって兄ちゃん口コロノだもん」

「口コロノハジやねえよ……」

「じゃあ、今回また見逃してやるよ」

話のわかるやつだな。

「ここまで素直だと逆に心配になつてくるな。

「何か用があったんじゃねえのか？」

「ああ、そのことだ。神原さんここで会わせてくれるんだ？」

「完全に忘れてた。

「え、あ、その」

「まあか忘れてたわけじゃないだろ？」「

「や、そんなわけないだろ」「

「だよな！これで忘れてたら明日の朝、起いすの『ダンベル使ってやる』ことだつたよ」

「ハ、ハハハ」

あれ？ 何かわからないが体から変な汗が出てきたぞ。

ああ、あれだ。

夏だから暑いから仕方ないな。

そうだな、僕が妹が怖くて冷や汗をかくはずがないじゃないか。

「で、いつなんだ？」

「え？」

「え？ じやない。連絡してるんだり？」

「え？ あ、ああ、ああ！ つ、次の田曜に会わせてやる……」

「本当か！？」

「ああ」

ヤバい。

神原に連絡もしていないのに勝手に決めてしまった。

「いやー、やっぱ兄ちゃんは最高だな。愛してるぜ兄ちゃん……なん

ならキスしてやろうか?」

「いらっしゃるよ……。どうあえど、さうして出ていきやがれ」

妹が出て言つた直後、僕は神原に電話をした。

「神原駿河、特技は掃除だ」

「嘘つけ！！どちらかと言つたら散らかすのが特技じやねえか！！」

「やの瓶とシシ パリセムモモナカハ んだな」

「そのあだ名は一生封印しといてくれ」と

—どうしたんだ一体?—

「ああ、今週の田曜つて空いてるか?」

「空いてる何も私は阿良々木先輩が呼ぶのであればいつでも時間を作ると言つてるではないか」

「ああ、助かるよ。実は、妹達と会ってくれないか?」

「む？重婚は法律で認められていないぞ？ましてや妹さん達となん

「お前は僕の 一体なんなんだよー！」

て
」

戦場ヶ原みたいなことを言つた。

どんだけヴァルハラ「ンビはそつくりなんだよ。

「それよりいきなりビーフしたんだ?妹さん達と会つてくれなんて」
「いや、妹達がお前に会つたがつてつるわいから
「まあ、私は構わないが」
「そりが、助かるよ」
「で、どうまで良いくんだ?」
「何が?」
「何がって、妹さん達に手を出して良いがビーフか」
「良いわけねえだろ……」
「そんなん。私に拷問を受けるとでも言つのか」
「どんだけだよ」
「大丈夫だ。口説くぐらこだから」
「やつぱつお前に妹達を会わせるのは考へ直す必要があるみたいだ
な」
「すまない!私が悪かったから、許してくれ……」
「じゃあ、手を出さないと約束するな?」

「ああ、約束ある……手は玉ねぎ」「口も足だけ」「ああか」

「悪い、妹達には都合がつかなくなつたと云つてみる

「わああ、手も足も口も足もなこからあ

「絶対だからな

「はーー

「なんだよその返事は。まあいいや、そういうことだから頼むよ

「つむ。」了解した

「うつてなんとか畠田の朝の身の危険は回避できた。

田曜……不安しかねえ。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「久々の出番だつたぜ」

月火「私は出番なかつたけどね」

火憐「まあまあ、次回は出ると思つし」

月火「そうだね。それになんと言つたつて神原さんに会えるんだからね！」

火憐「うんうん！！テンション上がつてきたーーー！」

月火「上がつてきたーーー！」

火憐「ようし！！予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「神原さんに会いたいがーーー！」

月火「会いたーーー！」

火憐&月火「次回、『よみデイリー』25」

火憐「ニュー・ヨークへ行きたいかーっ！」

月火「なぜ、ウルトラクイズ！？」

ふとお氣に入り件数を見ると40件を越えていました。

この小説なんかをお氣に入りに入れていいただき、また読んでいただき本当にありがとうございます m(—_—)m

待ちに待つたの日曜日。いや、待ちに待つた気持ちは妹達であつて、決して僕の気持ちはない。どちらかと言つて、来ないで欲しかった日曜日である。

僕は、不安でいつもより早く日が覚めた。

それはそうだ。

僕の妹達の身がどうなるか心配になるのも無理はない。なんて言つたつて相手があの神原駿河である。

「何、シリアス展開に持つていてんだけ、兄ちゃん

「おー、でっかいの。ノックもせず勝手に部屋に入ってきたうえに、僕の心の中を勝手に読むなーー！」

しかもなんだ、その右手に持つてるパンパンに張った水風船は。

「ノックしたのに反応無かつたから寝てると想つて起こして来てやつたんだよ」

「起こしてに来るのに何で水風船がいるんだよーー！」

「じゃあ、なんだよ」

「ちひり。兄ちゃんも甘いな。これはただの水風船じゃないぜ

「中身は水ではなくセメダインだ……」それを鼻と口に落としたよつて
しょうとしたのを」

「僕を殺す気が……寝てるやつにこきなりそんなことをしてみる。
頭が回らないから窒息死するわ」

「いや、人間は頭回らないし、回るとしたらマジシャンぐらいだよ」

「あー、ああ、僕の言い方が悪かった。思考回路の方だよ」

「もう言つてくれないとわからんこよ

普通の人はわかるんだよ、これで。

「どうあえず、起きたんだからもうここだらうへ出て行けよ」

「えー別にこいちゃん。もつと私に絡もつ」

「お前に絡んでる暇があれば僕は今から勉強する」

「いいじちゃん、いいじちゃん。せつかく可愛い妹が絡もつて言つて
んだからよ。もつとイチャつこうぜ」

「僕は妹とイチャつくなつたシスコンじゃない……」

「私がブラコンなんだからいいんだよー」

「やつ言いながら後ろから絡んできた。

いや、この場合は絡み付いてきたの方が正しいかもしない。

普通ならば、妹が後ろから兄に抱きついてるような微笑ましい見えるかもしない。

しかし、体勢はチョークスリーパーみたいな感じである。

「どういう理屈だ……とりあえず、離れる……」

「妹がこんなに抱きついてあげてんだからもうと喜べよー」

「だから僕にそんな趣味はない……」

そして、身長も僕より大きいかつ力も上の妹の腕が僕の首を徐々に絞めていたのもまた事実である。

「おい、でつかいの離せ……死ぬ……死ぬ……」

「嬉しそぎて悶え死ぬって……？そんなに誓めなくともいいんだぜ」

「違う……入ってるんだよ……本気……で……ヤ……バ……イ」

ああ、僕死ぬんだ。

妹がイチヤついてきた時のチョークスリーパーで死ぬんだ。
主人公なのに酷い扱いだつたなあ。
情けなさすぎるよ。

その時、急に体が楽になつた。

ああ、死んだのか。

せめて死ぬまでに羽川の眼球を舐めたかつたなあ。

「……ちや……ん」

ん?なんだ?誰だよ。

せっかく思い出して漫つてたの!」。

「兄……ちや……ん」

あ?段々はつきり聞こえるよになつてきましたわ。

「兄ちゃん……田を覚ませ……」

その瞬間ほど、吸血鬼の後遺症があつて良かつたと思つ時が無かつた。

このおかげで避けることができたのだ。

何故かと言つと、田を開けた瞬間、ダンベルが上から落ちてきた。いや、降り下ろされたの方が正しい。

「お前は僕を殺す氣があ!! 何でもん降り下ろしてんだ!! てか前にも同じこと言つたはずだぞ」

「兄ちゃんが急にぐつたりして動かなくなつたから衝撃を!! よつかなと思って」

「衝撃がデカ過ぎるわ!! せっかく帰つてきたのにそのままあの世に送還されそつだつたよ!!」

「てか兄ちゃん動かなくなつたけど誰にやられたんだ!!?」

「てめえだよ、馬鹿妹!!」

「何で私なのや?」

逆に、この部屋に僕とお前しかいない時点で他に誰がいるんだよ。

「自分のしたこと覚えてねえのか！？」

「えーと、兄ちゃん絡んでチョークスリーパーをかけた

「わざとだったのか！？僕が何をしたって言うんだ」

「でも兄ちゃん嬉しそうだつたじゃん」

「どに死ぬつて本氣で言いながら喜ぶやつがいるんだよーー！」

「私なら兄ちゃんに元回じ」とされたら嬉しいな

「やまでもこくと変態と言つよつ、逆にカツコイイよ」

その後、火憐ちゃんと月火ちゃんと連れて神原の家に行つたのだが
それまでが苦痛であった。

そりやそつだる。

八九寺を見かけたにも関わらず戯れることが出来ないんだぞ。

これ以上の苦痛があつてたまるものか。

しかも、八九寺のやつは僕に気づいて周りをチョロチョロしゃがる
んだよ。

ここで相手をすると妹達にセクハラ高校生が僕だとバレてしまつた
で必死に耐えたが。

いや、セクハラ高校生に關しては潔白だ。
あれは誰に何と言われようとスキンシップだ。

そして、もう一つしてくるのは神原の家に着いたのだが、ここからが第2関門といったところである。

「やあ、阿良々木先輩」

「おう」

「どちらが妹さん達か」

「ああ。ここちのでつかいのが火憐で、ちつこいのが月火だ」

「阿良々木火憐です！…よろしくお願ひします！…」

「阿良々木月火です。よろしくお願ひします」

「神原駿河だ。呼び方は好きな様によんしてくれ」

「駿河さんって呼んでもいいですか！？」

「ああ、構わない」

「「やつたーーー！」

「さて、立ち話もなんだから私の部屋に行つて良いことをしようではなー」

僕は躊躇せず神原にラリアットを喰らわした。

「何をするんだ阿良々木先輩」

「何をするんだじやねえよ……お前完全に妹」

その瞬間、僕より身長の高い女の子から飛び膝蹴りを喰らった。
犯人はでっかい方の妹である。

「駿河さんになんてことするんだ！」

「やつだよ……お兄ちひやん」ときが何駿河さんにしてんのを

え！？ 何！？

僕何か悪いことしましたつけ？

むしろ妹達を守りつしたんですけど。

「や、駿河さん。」んな馬鹿兄ちゃんはほつといて遊ばまつよ

「ああそうだな。では阿良々木先輩、妹さん達は預かった

そう言いながら、家の中へと消えて行つた。

僕は仕方なしに来た道をトボトボと帰つていた。

「あー、暦お兄ちひやん」

「ん？ おお、久しぶりだな千石」

「本当久しぶりだね」

「宿題は終わつたか？」

「ううん、まだ。少しあやつたんだけね」

「やうか。あと少ししか夏休みはないけど頑張れよ」

「うそ。そうだ、曇お兄ちゃんは何処か行つてたの？」

「ああ、神原の家に妹達を連れて行つてた」

「うららちやん達を？」

「やう。あいつら神原に会わせうつてうるわへしてた」

「神原さん人気者だね」

「女子中学生の間ではかなり人気らしいな」

「それに比べて撫子なんて」

「おい、いきなりどうした千石ー？」

「撫子なんて囮物語で本当のラスボスになつてしまつたから撫子を好きな人なんて絶対いないよ」

「それ以上話を進めるなー！大丈夫だー！お前を好きなやつなんて山ほどいるから」

「もし囮物語がアニメ化とかしたらどうしよう。余計に評価下がつて最低のパラメータが振り切れちゃうよ」

「それアニメ化してほしいように聞こえるぞ。心配するな、七夕の短冊に囮物語アニメ化禁止って書いておいたから」

「まあ、撫子のことを歴お兄ちゃんが好きでいてくれたらそれでいいや」

「ん? 何か言ったか?」

「ううん、何でもないよ」

「そうか。それじゃあ、宿題頑張れよ」

「うん」

千石と別れた後、本日2回目の八九寺を見る「ことになる」。てか、今日はやけに人に会つなあ。

「はーちーく『』」

「あーらーりーぎーすわーん」

「グハツ」

八九寺は僕を見るなり魚雷の「ごとくみぞおちをめがけて飛んできた。

「イッテー。人間魚雷みたい……というより完全に人間魚雷だよ!」

「すいません。滑りました」

「違う。わざとだ」

「滑りまみた……」

「わざとじゃない！？」

「すべりました。阿良々木さんが

「僕がいつすべったんだよ……。」

「今日はこつもと違うパターンでやつてみました」

「急に違つのきたからビックリしたよ

「毎回同じような展開だと飽きられるので」

「考えてるんだな。さすが八九寺」

「まあ、結局のところ阿良々木さんのオチ次第なんですが

「そんな」と言わると次からフレッシュナーがかかるじゃないか
「心配しなくても大丈夫です。阿良々木さんはいつも失敗します
から」

「辛口……」

「それよりアバラ木さん」

「僕を骨の名前みたいな言い方をするな。僕の名前は阿良々木だ」

「妹さん達と何処へ行つてたんですか？」

「スルー！？」

「ほり、せりを言つたじやないですか。いつもと違つパターンもいるつて」

「だからってスルーはねえだろ。泣くぞ？本氣で泣くぞ？」

「やめてください。こちらが恥ずかしいです。どうか引きます」

「ちなみに、八九寺や忍に冷たくあしらわれても嬉しく感じるだけだ」

「ロリカツコイイー！」

「せりきの話だけど、妹達を神原の家に送つていたんだよ。あいつに会わせろつてつむるせいから」

「あの方に年頃の女の子を預けて大丈夫なんですか？」

「大丈夫なわけねえだろーー！」

「今頃、妹さん達は神原さんの餌食ですね」

「帰つて来て変態の世界に引き込まれてたら僕はあいつらの兄を辞める」

「いや、そこは受け入れてあげて下せこよ」

「やだよーーあいつが言つて！畠山は「脱げばいいんだな」だぞ！」

？

「あ…あ…御愁傷様です」

「見捨てるな…」

「まあ、大丈夫ですよ。なんだかんだ言ってあるの方は」

「やうだと呉こんだが」

「それよつ、阿良々木さん」

「私はハーゲンダッツが食べたくなりました」

「だからなんだよ」

「買つてや…」

「知るか…」

「たまにはこじやないですか…」

「何でお前に買わなきやならねえんだよ」

「忍さん」ミスドを買つのに私には無しだすか

「忍とお前は別だよ」

「忍のなればロリカツ ロイイの称号は外して」これからはロツ氣持ち悪いにしますから

「ただの変態じゃねえかーー！」

「いや称号を変えなくても現在進行形で変態ですかーー？」

「僕がいつ変態みたいなことをしたって言つただーー！」

「逆につしなかったんですかーー！」

「だからあれはスキンシップだよ」

「あれがスキンシップと認められるなら世の中から痴漢といつ犯罪が無くなります」

「良かつたじゃないか無くなつて。痴漢はダメだからな」

「どの口が言つたですかーー！だいたい無くなるの意味が違います」

「わかつた、わかつた。これからは僕は紳士になる」

「紳士と云つよつ瀕死になつてほしいです」

結局、その後僕はハ九寺にハーゲンダッツを買つて家に帰つた。

てか幽靈つてアイス食つのか？

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「やつと神原さんに会えたな！！」

月火「うん！！本当楽しかったね」

火憐「そうだな！！あんなことやこんなことまで」

暦「お前達何をされたんだー！？」

火憐&月火「（お）兄ちゃんは出でくるな！！」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「神原さんと私達は何をしたでしようか？」

月火「何をしたんだろうねえ」

火憐&月火「次回、『よみ』ディリー 26」

火憐「ナニをしたんだろうな」

月火「その言い方はアウト！！」

ガハラやくせこひ、エリヤウトレンがわぬかを一番悩んでこま。

家に帰つて勉強でもしようつたとした時、忍が飛び出してきた。

「つこにじゅ」

「何がだよ」

「つこに儂が話す姿を世の中の忍野忍ファンにお届けする」とがで
あるのよ！――

「何の話だよ」

「何つて偽物語アニメ化の件じゅが」

「ああ、偽物語アニメ化の件な…………え――――――？」「冗談だよ
な？な？エイプリルフールまでにはまだ半年以上あるぞ」

「何を言つておる。事実に決まつてゐではないか

「ちよ……え……あれを映像化する『仮』なのか」

「つむ。儂の可愛い姿を視聴者にお届けじゅ。サービスショットの
お風呂の場面もあるしな」

「アウトだ――！アウト――！」

「お前様よ。儂のがアウトならばお前様と妹御との歯ブラシプレイ
なんぞもつとアウトじゅだ」

「何！？あれがアウトだと！？あれは国技だろ！？」

「そんなわけあるか！？」

「嘘だ！…だつて僕はオリンピックの種目で見たぞ」

「古代オリンピックですらそんな競技はないわ！…」

「嘘だ！…何かの間違いだ！…」

「まあ、何はともあれ僕もよしあく話せるよ！」なるごじやな。ミスドも食べ放題じやし」

「なんで食べ放題になるんだよ」

「え！？だって原作でお前様がミスド食べ放題つて

「言つてねえよ！…」

「なら書き換えて再出版じや」

「無茶を言つな！…」

「2012年のヒロインじやつてのに扱いが酷くないかの？」

「お前はど！」まで大物なんだよ

いや、まあ怪異の中では大物だけじや。

「当たり前じや。偽物語でテレビにも出るし傷物語で映画にも出

るし、今年ブレークした武井咲ちゃんをも超える勢いの女優なんじやぞ」

「その前にお前は女優じゃない。それにそれなら主人公の僕の方が出来る場面多いじゃないか」

「お前様の中の神谷浩史さんは需要はあるが、お前様自身には全く需要がないわい。物語シリーズがお前様で成り立つてると思つておるのか！？」

「残念過ぎる主人公だな！－いや、まあ僕で成り立つては思つたことないけど」

「同じ男でもあの小僧は需要はあつねつじやがな」

「ああ、忍野か。そつこやーの話で忍野つて出でちゃつてないよな？」

「つむ。実は筆者が出すタイミングを逃して出せずに結局夏休みもあと少しで終わるつとしてるんじやよ」

「原作ならその時期ぐらじに偽物語に入るからーの街から出て行つてるからもつ出るタイミングないじやないか」

「やつなんじやよ。まあ、筆者は無理矢理出すと思つがな」

「てか、フラグを立てるな」

「まあ、儂はどいつも良いわい。とりあえず、儂は今からモンハンをするから邪魔をするではないぞ」

「しねえよ。てかモンハンつて…完全に現代っ子じゃねえか

忍が影に戻り、一人になつた僕は勉強をするため机に向かつた。

勉強を始めて数時間後、妹達が帰ってきた。

階段を走つて上がつて来る音を聞いてすぐに僕の部屋の扉が勢いよく開かれた。

「ただいまんぱるーーー！」

「テンション高つーーー！」

「そりや そりや だらり兄けやんーーーまあ、友達のいないお兄けやんこはわからぬいだらうけど」

たんだから

「せうだよお兄けやんーーーまあ、友達のいないお兄けやんこはわからぬいだらうけど」

「その神原は誰に紹介されたと思つてやがる」

「えーと羽川さん？」

「違つ」

「撫子ちゃん？」

「違つ」

「戦場ヶ原さん？」

「違つ！…だいたいお前達にはまだ紹介していない

「じゃあ、ハル寺ちゃん?」

「それもお前達はまだ知らないはずだ……」

「じゃあ、忍野さんだ……」

「それじゃ一番違うよ……原作でもお前達は見たことがないからな。なんで知ってるんだよ」

「あれ? 何でだろ? てか、知ってる中で神原さんと関係がある人はもうこないぜ?」

「僕だよ……」

「またまた[冗談を。それが本当だつたら]口でスペaghettiを食つてやるよ」

「ただの食事だよ……」

「[冗談だよ。兄ちゃんには感謝しているぜ。 なあ、月火ちゃん」

「うん……生まれて初めて私達の役に立つたよ……」

「笑顔で酷い」とを言わないでくれ

「それより本当楽しかったなあ。あんな」とや」「んな」として

「あんなことやこんな」として何だ? まさか神原のやつお前達に手を出したのか!?

「そんなわけないじゃん。兄ちゃんじゅあるまこと」

「やうだよ。手を出すのはお兄ちゃんぐりこだよ」

「僕は兄としての立場がなんでこんなにもないんだ。
僕ほど好青年はいないぞ。」

「やうだ。これからは私達を敬つた方がいいぜ、兄ちゃん」

「何が嬉しくてお前達を敬わなければならんのだよ
「ふつふつふ。聞いて驚くな兄ちゃん！－なんと私達姉妹の話である偽物語がアニメ化が決定したのだ！」

「あ…ああ」

「反応薄！－もつと驚きとかツッ」「とかしろよ…」

「仕方がないよ火憐りや。お兄ちゃんの頭じや思考回路が追いつ
かないんだよ」

「ああ、なるほどな。悪かつたよ兄ちゃん」

「おい、お前ら。どれだけ実の兄を馬鹿にするんだ」

「か、忍に一回聞かれてるから驚けねえんだよ。」

「馬鹿なのは事実じやん」

「馬鹿じやねえよ…－少なくともお前よりかはマシだよ、この鳥頭」

「そんなこと言つてもいいのかな？偽物語の主人公は私達なんだし、兄ちゃんが出なくても問題はないんだぜ？」

「いや、主人公は僕だから」

「そんなわけないじゃん！そりゃ化物語は兄ちゃんが主人公だつたけどさあ、偽物語は、サブタイトルがかれんビーとつきひフュニックスだぜ？完全に私達じゃん」

「じゃあ化物語の各話のサブタイトルを言つてみる」

「えーと…ひたぎクラブ、まよこマイマイ、するがモンキー、なでこスネイク、つばさキャットじゃん」

「お前達と一緒に全員名前が入ってるだろ」

「なんと…」

「じゃあ、結局はまたお兄ちゃんが主人公ってことなの？」

「ああ、そうだ」

「いや、兄ちゃんが居なくても話が進むはずだ…」

「進まねえよ…」

「ちえつ。なんだよ兄ちゃんばっかり誰が怪異を対処するんだよ。

「ちえつ。なんだよ兄ちゃんばっかり

「いや、そんなこと言われても」

閑話休題

「それより神原の家で何してたんだよ？・神原の家ってゲームとかも無いし」

「ひーみーつ。あれだよ、女同士の秘密つてやつだ」

「まあ、神原に何もわれてないんなら別に良いけど」

「しかも、また遊ぶ約束をしちゃつたんだよ」

「でもさあ、その時に何故か駿河さんごとに会つ時はスクール水着を持つて来てほしごって言われたんだけ何でだろ？」

「つーん。あれじやない？駿河さんの中学とは違つかったから『なつて見たいんじやない？』

「あーなるほどな。さすが用火ちゃん」

「おー、我が妹達よ」

「何だよその喋り方は」

「今言つてた」とは本当なのか？

「うん。帰り際に言われたけど

「よく教えてくれた。僕は今から用事があるから部屋から出て行つてくれるか？」

「何だよ急に。せっかく話をしてくれたのにな」

「話ならまた後で聞くからとつあえず、今は撤退してくれ

「仕方ないなあ。行」^{ハフ}火ちゃん

「そうだね」

そう言つて妹達が部屋から出て行つたのを確認してから僕は携帯を手にし、アドレス帳から神原の電話番号を押し電話をかけた。

「神原駿河、阿良々木先輩のH口奴隸だ」

「誤解されるから頼むからやめてくれ」

「その声と性癖は阿良々木先輩だな」

「お前は声で性癖がわかるのかー？」

「H口の貴公子をなめてもらいつは困るぞ」

「お前は女だから貴公子って時点で間違つてるよ

「ひむう。ならH口の貴公子は阿良々木先輩に譲るつ
「こりねえよーー。」

「遠慮はいらないぞ。私は阿良々木先輩なら喜んで譲るつ」

「だからこりねえよ……。」

「な、私が女である以上エロの貴公子の称号はつけられないのだからどうしたらいいのだ……？」

「知るか……！」

「じゃあ、永久欠番ならぬ永久欠名だな」

「もう勝手にしてくれ」

「それより話があるのでなかつたのか？」

「ああ、思わず切りそつになつたよ。お前、妹達の帰り際に言つたことわかるな？」

「ああ。次に会つ時にスクール水着を持って来てほしいと頼んだ！」

「包み隠さずストレートで言つてがカッコイイ……。」

「楽しみにしてるわ」

「おお。楽しみにしておこしてくれ…………じゃねえよ……お前はなんで妹達にそんなこと言つてんだよ……。」

「なんでって下心丸出しだからに決まつてゐではないか。ダメなんか？」

「ダメに決まつているだろ？が……。」

「しかし、阿良々木先輩は妹達に手を出すなどは言つたが衣類を借りるなとは言つてなかつたではないか」

「普通に考えればわかるから言わなかつたんだよ」

「でも、手を出してはいけないし衣類も借りてはいけないし酷だぞ」「当たり前のことだ……」

「とりあえず、次回は持つて来てもらひつけて良いんだな」

「会いたくないんだな？」「すまない、私が悪かった。お詫びとして裸で体に阿良々木先輩と書いて街中を走ろう」

「僕の評価が瞬殺だよ……なんでそんなことをするんだよ」

「私がしたいからだ」

「お前の私欲のために阿良々木家はこの街から出て行かなきゃならねえよ……」

「それは困るな。阿良々木先輩が居なくなられては私が困る

「私の部屋は誰が片付けるんだ」

「神原……」

「お前がやれよ」

「それより話を戻そ�ではないか。何の話をしてたのだったつけ…ああ、そうだ私が今裸かどうかの話だったな」

「違うよ…お前が妹達に言つた内容についてだよ…」

「残念ながら私は服を着てゐる」

「何が残念だよ…別に残念だとは思つてないよ」

「せうか、なら私は脱げば良いんだな?」

「頼むから投げたボールを投げ返してくれ。まあ、いいよ。それより次会うときはスクール水着は禁止だわかつたな?」

「なら聞くが阿良々木先輩は火憐りちゃんや月火ちゃんの水着を見ても思わないのか!?」

「思うわけねえだろ…どんなシスコン野郎だよ!…」

「何!/?阿良々木先輩ともあろう人が妹の水着を見ても何も思わないだと!/?私なんか今この話をしているだけで興奮してきたや。とりあえず、服を脱が!」

「とりあえず、わかつたな!/?持つて行かさねえからな」

「そう僕は言い放つと電話を強制的に切つた。

これ以上話していると僕まで変態と思われてしまうからな。

こうして不安な日曜を終え、その後は平穏な日々を過ごし、夏休み最後の日を迎えるのであった。

宿題を残して。

暦「暦です」

忍野メメ「メメでーす」

暦「なんだお前がここにいるんだよ……」

メメ「そんな必死になつてどうしたんだい。何か良いことでもあつたのかい?」

暦「だから何でお前がここにいるんだよ」

メメ「いやー僕が一番ビックリしてるよ。なんて言つたつて本編末登場なのに初登場が後書きなんだからねえ」

暦「断れよ……」

メメ「ここに断つたら次がこいつになるかわからなーだら?」

暦「まあやつだね」

メメ「僕だつてやつや少しあ出したこものぞ」

暦「忍野からその言葉を聞いたくなかったよ」

メメ「そつかい?」

暦「そうだ。予告編クイズは無しで良いよな?」

メメ「ああ、僕はそんなキャラじゃないからねえ」

暦「えーじゃあ、次回、『よみナイトイワー27』

メメ「次回は忍ちゃんが活躍かい?」

「じゆみトドイリー 27（前書き）

鬼物語、読破しました。

ネタバレになるのであんまり言わないですが感動しました。

鬼物語のやりとりもネタバレにならない程度に若干使わせていただきました。

夏休み最後の日、僕は絶望を感じていた。前話を読んでもらえてたら予想はつくとは思つが僕が何故絶望を感じているのかを一応言つておこう。

「宿題が終わつてねえーーー！」

「こきなり大声を出すでない。せつかくクレヨン shinちゃんを見ておるのに

忍は今、僕の携帯でテレビを見つめている状態であった。

「僕が絶望を味わつている時にお前は夏休み恒例のアニメ大会見やがつて」

「お前様が悪いんじやろ。儂には関係ない」

「助けてよーのぶえもん」

「ドラえもんみみたいな言つ方をするでないーーー！」

「別にいいだろ。そろそろ傾物語の時期だし」

「そんなメタな理由で呼ばれるとは思わなかつたわい

「それより何か道具を出しちよー」

「そんなものあるかーーー。ドラえもんは未来から来たロボットじやが

「僕は過去からこる座異じやぞ」

「僕の忍が怪異なわけがない……」

「某アーメの名前みたいに言ひでない」

「過去に戻れたりとか出来ないのか?」

「できるべ」

「だよなあ。さすがに過去に戻れたりできるよなあ……えー…? 今
なんてー…?」

「だから戻れるべ」

「マジでー?」

「つむ。ただし、それは原作の傾物語で書いてあるからやらないほ
うが良いな」

「確かにそれもやうだな。じゃあ、ざつすんだよー」

「僕に馬鹿な相談する暇があれば宿題をすればよーじゃやうが」

「お前はミスアの恩を仇で返すのか!?」

「それとこれとは別じや」

「しかし、これは本物ヒレンチだな」

「そんなんに残つてあるのか?」

「3分の「べっぴん」

「なら本氣を出せば終わる範囲じゃね」

「僕の辞書に本氣と「文字」はない」

「ものすげ」にカツ「悪…ナポレオンの価値が下がるわい」

「僕の辞書に不可能はある…」

「一般人じゃな。そんなアホなこと言つての暇があればさつと宿題をせんか」

「やれやれと言われたらやりたく無くなるんだよ」

「お前様は子供か!…」

「少年の心を忘れていいのぞ」

「救いよつのない男じゃな」

「なあ、忍一手伝つてくれよ」

「知らん。儂には関係のない」とじゅ

「手伝つてくれたらキスしたり全身揉んでやるから

「お前様しか得していないじゃん、それ

「何故バレた！？」

「じゃあ、もし僕の宿題が終わったら刃、八九寺、余接ちゃんを一つの部屋に集めたボーナスステージを用意してくれーー！」

「ネタバレとは最低じゃの」

「大丈夫だ。それほど本題には影響はないから」

「まあ、これから読む人の影響に出ないんじゃつたら構わんが」

「ただ、僕が興奮していただけだ」

「気持ち悪い！！」

「金髪幼女に気持ち悪いと言わたた！？」

しかし…なんだろう。

このゾクゾクする気持ちは。

忍に冷たい目で見られるとなんだか興奮する。

「だんだんと猿の娘みたいになつてきておるが」

「僕は神原みたいに変態ではない！！」

「十分変態ではないか。それが変態でないならこの世に変態は存在せんわ」

「僕のどこが変態なんだ。僕は金髪幼女に冷たい目で見下されたり、

裸足キックを喰うのが好きなだけだ

「儂が間違つておつた。お前様は変態ではない」

「わかつたなら呪つこだ」

「変態ロココン野郎じや」

「何か増えた……」

「人間に對して儂は別に思つ」とはないんじやが、最近は何故か委員長の娘や蟹の娘のことが可哀想になつてきたわい……はあ」「ため息をつくな。ため息をつくと幸せが逃げていくらしこせ」

「まあ、お前様の場合幸せより周りから人が逃げて行くと思つがな」

「つぬせえ……」

「お前様の相手をしてたら腹が減つたわい。//スド[に行くべ

「ちよつと待て」

「何じゅ？早く行かんと閉まつてしまつぞ？」

「閉まらねえよ……今何時だと思つてるんだよ……まだ朝の10時だぞ。それより今まで黙つてたんだが……なんでお前は吸血鬼なのに朝起きてんだよ……」

「何を言つておる。早寝早起きをしなければ体調を崩すぞ」

「吸血鬼の口から一番やの言葉を聞きたくなかったよ……」

「生活リズムも崩れてしまつしな」

「吸血鬼は夜起きて朝寝るのが基本だから、逆にお前のリズム狂つてゐんだよ」

「仕方ないじゃん。早く起きながつたらしきやんもプリキュアも見れんからな」

「別に見なくて良いだら」

「儂の楽しみなのじゃ」

「じゃあ、夏休みが終わつたらどうすんだよ？ それも8月いっぽいがやつても9月の最初の方までだぞ」

「じゃつたら、スッキリ……を見てから少し休憩してからひるおび！を見る」

「主婦か……」

「主婦つて、別にお前様と結婚なんてしておらんぞ。いや……その……お前様がしてくれと言つんじゃつたら……してやうんでもないが」

「匂つかあ……」

「に、頬を赤くしてモジモジしてゐんだよ。可愛い過ぎるじゃねえか。」

「さて、それじゃあ落ち着いたところでもミスドでも行くかの

「行かねえよーーー。」

「ミスドを買つてもらひお礼に宿題を手伝つてしまひかと思ったの
じゃが」

「忍、何じてるんだ？早くミスド行くぞ」

「単純な奴じやな」

そうして僕はミスドへ行き帰つて来た頃には平日ならひるおびが始
まりつとある時間になつていた。

「わい、忍。宿題するぞ。歴史は前に忍が教えてくれて終わつてゐ
から、後は国語と英語だ」

「言つておくれが儂は歴史以外わからんぞ」

「は？」

「当たり前じやろ。儂は人間ではない。怪異じやぞ？しかも儂は日
本語を主として生きておらんかったし。ちゅーかほとんど使つてお
らんかったし」

「じゃあ、英語なり」

「英語もよつわからん」

「お前、さては確信犯だなーー。」

「なんのこじじゃ？」

「出来ないのわかつて僕にミスドを買わしたや。」

「ミスドへ向のこじじゃ？」

「あの田の前にあるミスドの」と……「て無こー…?」食つたんだ

「…」

「儂には何のことかわづまじや」

「…」

「わあ、儂には難しそ過ぎて手伝えんからお前様ががんばってくれ

「わかつたよ。わからぬものを手伝えつて言つても無理だしな。
ミスドのお礼はキスで許してやる」

「結局そこかい…」

「まう早く僕の口にい」

「吸血鬼ばんや」

金髪幼女のアッパーを喰らつた僕は意識を失いベッドの上に倒れこんだ。

そして、田を覚ました僕は外を見た。

「あー一氣を失つてたのか。まだ明るいことはそんなに時間は立つてないのか。さて、諦めて宿題をするか」

と、時計に目をやる。

7時10分。

あれ? 時計壊れてるのか?

それとも、空がぶつ壊れてるのか?

「兄ちゃん起きるー」

「お兄ちゃん起きなよー」

「え?」

そう。

壊れていたのは、時計でもなく空でもなく僕の頭であった。

「なあ、今日つて何日だ?」

「8月29日だナビ

「始業式の日がある?」

「うふ。まだ、寝ぼけてるのかよ」

僕が意識を無くしてた時間は数時間ではなく、丸一日であった。

そして、

宿題終わってねえ————!

「あー一体がダルいなあ。風邪かなあ。今日は学校休まなくつひや」

「何言つてんだよ兄ちやん。馬鹿が風邪ひくはずないだろ」

「それは間違つてるよ火憐ちやん」

「おつ、まさかの月火がフォローしてくれるとま。」

「馬鹿だから体調管理が出来なくて風邪をひくんだよ」

「するわけねえよな。」

「うん。わかつてたよ。」

「わかつてたけどもしかしたらつて希望を持つていていたのに。」

「ああ、なるほどーーですが月火ちやんーー！」

「ああ、なるほどじやねえよーー！」

「元気じやねえか兄ちやん」

「しまつた。ついツツ「//」を入れてしまつた。」

「今治つたんだよ」

「そつか。ならよかつた」

「こつらにはもう少し人を疑うこと」を教えた方がいいのか?」

結局、学校を休めなかつた僕は宿題を終わらせていないままで登校することになつた。

学校に登校したら羽川と戦場ヶ原に2回ずつ殺されることになるんだろうなあ。

登校して羽川と戦場ヶ原に投降か。

と黒鹿な」ことを考えていると田の前に久々に姿を見る女子小学生か
いた。

まあ、八九寺だけど。

悪いがハ九寺、僕は宿題が終わってないせいで憂鬱なんだ。
構ってる暇なんて無いんだよ。

いつも通り八九寺に向かつて。
そう思いながら走り出した。

「それもあればいいの……。」

「もうと触らせろー！もうと揉ませひー！もうと舐めさせひー！」

「ハフ——ハフ——」

「コラ、暴れるな。キスが出来ねえだろ」

「ガブツ！！」

やつぱり、痛いのも何なんだこいつも僕であった。

「ああ、阿良口つさんでしたか」

「僕をロッコンみたいに言つたな。僕の名前は阿良々木だ

「違います！－阿良口りです！－」

「本人が言つているのに否定された！－」

「阿良々木さんはもう阿良口りとして市役所に名前を変更してもらいましたから」

「他人が言つて変更出来るの！－？しかもやむを得ない理由もないのに！？」

「阿良々木さんが小学生以下の女の子にセクハラばっかりしてしますと言つたらなんか受理されました」

「市役所の人達仕事をしろ！－つか、逆にそれだけでよく済んだな。警察とか動きそうな理由じやねえか」

「そこ」は私の権力です」

「ハ九寺Pの力は市役所までも動かせるのか！－？」

「当たり前です。それより遅れましたが阿良々木さんお久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな。もう会えないかと思つたぜ」

「心配しなくてもこの話では私はずっとといますから。この話にルールはありませんから」

「ん? 何を言つてゐかよくわからないんだけど」

「わからなかつたわからない方がいいんです。現実世界の方では感動の話になりましたからね」

「まあ、良いけど。それよりずっといるのは当たり前だ。お前がいなくなつたら誰が僕の嫁になるんだよ」

「なんで勝手に私と結婚することになつてゐんですか!...!」

「約束したろ?。昔、ハ九寺が大きくなつたら暦お兄ちゃんと結婚するつて言つてたぢゃないか」

「言つてもないし、私と阿良々木さんが出会つたのは3ヶ月前です!...!」

「じゃあ、前世で約束したんだな

「前世がミジンコの阿良々木さんになんで私が結婚の約束をするんですか。だいたい私は暦お兄ちゃんなんて死んでも呼びません。まあ、もう死んでいますが」

「そんな自虐ネタいらねえよ。...てか僕の前世ミジンコ...?」

「知らないかったんですね? ちなみにミジンコの前は単一電池ですよ」

「日常生活で必要性があまりない!...!」

「今の阿良々木さんにピッタリです」

「僕は」の話には必要性がある……」

「それより、阿良々木さん」

「あん？」

「学校に行かなくていいんですか？」

時計を見ると8時10分を回っていた。

「やつべー。もうこんな時間かよ

「まあ、宿題が終わっていない阿良々木さんが行つても意味ないで
しううけど」

「なんで終わつてない」とお前が知つているんだよ

「そんなこと100人中101人が夏休みが始まる前からわかつて
いたことです」

「超えた1人はどうから湧いて出てきた……てか、どんだけ僕はダメな奴だと思われてるんだよ」

「実際その思つてた通りになりましたけどね」

「だからこれ以上反論が出来ない」

「それではこれ以上話していると阿良々木さんが遅刻してしまいますので私はこれで失礼しますね」

「ああ、じゃあまたな

「またお会いしましょう」

そうつられて別れた後、僕は学校に向かって再出発した。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ついに偽物語アニメ化決定！！イエーイー！！」

月火「イエーイー！！」

火憐「ついに私達が主役の話だな！！」

月火「そうだね。今までお兄ちゃんを起こすところしか場面がな
かつたからね」

火憐「暴れまくつやるぜーーー！」

月火「やるぜーーー！」

火憐「それでは、予告編クイズーーー！」

月火「クイズーーー！」

火憐「最近たまに兄ちゃんに後書きを乗っ取られてねえ？」

月火「確かにそれはそうだーーー！」

火憐&月火「次回、『よみ』ディイリー 28」

火憐「逆に本編を私達が乗つ取つてやろうつか?」

月火「賛成ーーー!」

「さむじトイリー 28 (繪書)

今日は若干長めです。

長めと言つてもグダグダですが。

学校へ着いた僕は自分の教室へと向かった。教室に入ると羽川と田があつた。

「おはよう阿良々木君」

「おはよう」

「どうしたの？元気が無いみたいだけど」

「うつ…いきなり気付いたか。

「い、いや…別に何もないよ」

「もしかして宿題やつてないとか？」

「え？」

「冗談だよ、冗談。いくら阿良々木君でもさすがにちやんとしてきてるよね」

「あ…あの…」

「もしかしてやつてきてないの？」

「すいませんでした…」

その瞬間、直江津高校のある教室には直江津史上一番綺麗である

う上う上座姿の僕がいた。

「いや、私に謝られても」

「羽川にあれだけ早くやれと言われてたのにやらなかつたんだから羽川にも謝るのが筋だ。怒られる覚悟はできている。むしろ怒ってくれ、説教をしてくれ、罵つてくれ……」

「ごめん。阿良々木君のキャラが改めて掴めない。いや、だいたいはわかつてんんだけれど」

その後すぐに、羽川は始業式の後に配る資料を取りに職員室へ向かつて行つた。

「あー早く今日が過ぎてくれねえかなあ」

そう机の上で頃垂れていふと

「あらあら、大きいゴキブリの死骸かと思つたら阿良々木君じゅない

「新学期早々ゴキブリの死骸発言かよーー相変わらずの毒舌だな」

「この話ではそう簡単にはテレないわよ

「何の話だ?」

「偽物語では夏休みにテレしたけれど、あれは若氣の至つよ

「いや、偽物語でもこの物語でも年齢は一緒だから」

「阿良々木君のくせに反論をする気?」

「事実を言つただけだろ」

「それより阿良々木君。頃垂れていたけれどどうしたの?」

「え? あ…いや…なんでもない」

「なによ、すつきりしない言い方ね。はつきり言ひなやつよ、はつきり。あ、でも存在がはつきりしてないから無理なのよね。」めんなさー」

「謝るな!…それにはつせりしてるよ!…確實にここに生きてる証を示してるよ!…」

「生きてる証? まずは その幻想をぶち壊す」

「お前はどうぞの幻想殺しだよ!…だいたい幻想じゃねえよ!…現実だよ!…」

「え? 阿良々木君つて現実に生きてるの?」

「当たり前だ!…なんなら戸籍謄本持つて来てやひつか!…?」

「そんな必死にならなくとも」

「お前が疑うだからだらうが!…何呆れた顔してるんだよ!…」

「本氣で疑う氣あるわけないじゃない。嫌がらせで言つてこたのよ」

「それを最近ではいじめと書つのですよ戦場ヶ原さん」

「いじめじゃないわ。いじりよ」

「こんな嫌がらせのいじりがあつてたまるかーー！」

「で、本当の理由はなんなの？頃垂れてた理由は

「申し訳、やいませんが宿題が終わっていません」

「今日、学校が終わったら私の家に集合」

「はい」

「うして僕は戦場ヶ原から召集命令が下された。

宿題を忘れたといつても僕の評価は無いに等しいと言つてもいいぐらいだつたため、先生からはあまり言われることは無かつた。
どちらかといふと見放されてるというか、これ以上言つと情けなくなるので辞めておこう。

学校が終わつた後、僕は戦場ヶ原の家へ向かつた。

「あら、思ったより早かつたわね

「駄目だつたか？」

「阿良々木君のことだから先生に怒られ…………ああ、見放されてい
るから怒られないんだつたのよね

事実のため言い返す言葉が見つからない。

「それより早く入つて頂戴。阿良々木君なんかを家に入れているのを周りに見られたら恥ずかしいじゃない」

「どうこつ意味だーー。」

「どうこつ意味よ」

「さて、優しいひたき様が今から阿良々木君の宿題を手伝つてあげます」

「マジでーー。あつがとつ」わこますーーそして、すこませんでした

「生きてて?」

「そつちに對して謝つてなこよーー。」

「そつよね。阿良々木君は存在がはつせつしていないのでつたわね

「その設定まだ生きてたのーー。」

「ええ。阿良々木君は生きてないけど設定は生きてこるわよ……なんちやつて

「僕は確實に生きてるよーー。」

だいたい最後のなんちやつてつて何だよ。

無表情で言つ言葉じやねえだろ。

「で、何が終わっていないのかしら？」

「国語と英語です」

「まあ、終わらなかつたのは学校のせいでもあるわね」

「何でだよ」

「考えたらわかることじゃない。偏差値〇の子に勉強しないで言つ方が間違つているのよ」

「だから10の位を四捨五入するんじゃねえよ……だいたい今は50以上あるよ」

「何ですかー!? 阿良々木君の偏差値が50を超えたのー!?」

「素でビックリするなやー! てか、お前や羽川に勉強を教えてもらつてるんだからそりや上がるだろ」

「私は最初から上がるなんて思つていなかつたわよ。阿良々木君だし」

「酷い現実だー!」

「酷いのは頭の方でしょ?」

「お前の性格よりかはマシだよ」

「あらあらあんなこと言つひやつて良いのかしら? 阿・良・々・木・

君。 そうね、ちょっとした実験をしましょ？」

「実験？」

「ええ。 」Jのシャープペンシルを阿良々木君の目の3センチ前から芯を出して言つて何回目で阿良々木君の眼球に届いて刺さるかの実験よ」

「失明するわーー！」

「失言するからよ」

「お前から先に言つてきたんだろうが」

「力チ…力チ…力チカチカチカチカチカチカチ」

「『めん…』『めん…』『めん…』『めん…』僕が悪かった…」

「最初からそう素直に謝ればよかつたのよ」

その後、戦場ヶ原に手伝つてもらいながら何とか宿題を終わらせてることができた。

「阿良々木君、」J飯食べていいく？

「良いのか？」

「ええ。 もちろん」

「じゃあ、いただくよ」

「キャットフードとドッグフードとが混いちゃって」ペッシュ
ト扱いかよ……。」

「冗談よ」

その後はもうひたすら飯を食べることができるた。

「ねえ、『マリマリ良木君』

「記念できてないぞ」

「あらあら、私としたことがNGを出してしまったわ。仕方がないからがんばった大賞にでも回して頂戴」

「僕達は『テレビドラマを撮つてゐるんじやねえよ』

「何よ。自分は来年は映画『』も出て1月から連続アニメにも出るからって天狗になつてるわけ?」

「意味がわからねえよ!…か、連続アニメを連続ドラマみたいな言い方をするな」

「天狗みたいに鼻を伸ばしてこるとこつか折るわよ。首を

「怖いわ!…鼻は?…鼻じやねえの?…」

「鼻鼻つるといわね。そんなに折つてほしいなら折つてあげるわよ。今すぐこ」

「単なる傷害事件だよ」

「生涯事件？それは大袈裟よ、阿良々木君」

「ああ、お前と会つたことでこれから生涯は事件ばっかり起つ
そうだよ」

「あらあら、厄介事に首を突つ込んではるのは阿良々木君でしょ？蟹、
蝸牛、猿、蛇、猫、不死鳥、蜂一体何体の怪異と遭遇してきたのよ。
逆に関心するわ」

「一いつ言いつおぐが」の話では不死鳥と蜂はお前は知らない設定だ

「私を誰だと思っているの？」

「まさかお前までPが付くのかー？戦場ヶ原P」

「いいえ。戦場ヶ原ADよ」

「まわかのアシスタントティレクターーー？」

「違うわよ。A（阿良々木）Dよ」^{ディレクター}

「確かに僕を指導してるけど」

「ちなみに羽川さんは羽川Pよ」

「Pは八九寺じゃないの？」

「八九寺ちゃんはPだけれども、羽川さんはPの方だから」^{プロジェクト}^{プロジェクト}

「羽川にはぴつたりだな」

「アフターストーリーでつばさパーフェクトが発表されてもおかしくないわね」

「凄い作品になりそうだな」

「ちなみに私はひたぎピーグよ」

「何だよそれ」

「文字通り私の出番が今まで一番ピーグになる作品よ。簡単に言うなら語り部も私で阿良々木君なんて脇役よ」

「酷い作品になりそうだな。特に僕に対して」

「ちなみに阿良々木君はこよみ『ナッシュ』よ」

「主人公なのに僕死ぬのー!?」

「ああ、安心して。命を落とす方の死ぬじやなくて社会的に死ぬ方だから」

「僕は何の犯罪を起こしたー!?」

「小学生にセクハラをして」

「リアルだー!..」

「リアル？貴方まさか本当に信じるんじゃないでしょうね？」

「や、やだなあ。するわけないだろ」

「そうよね。まあ、そんなに口づが良いなら私が小さくなつてあげるわよ」

「できるわけねえだろ」

「できるわよ。チユウセんに薬を貰えば」

「I JI JIでSKET DANCEネタを挟んでくるなよ。だいたい僕達の世界にその薬なんかねえよ」

「ボッスンやヒメ」「わやんは小さくなつたのにヤロコじやない」

「まあ、世界が違つからな。てか、なんで僕が口づコソヒていう設定で話が進んでるんだよ」

「え？自分で言つてなかつた？」

「言つてねえよ……」

「「僕は阿良々木賛。好きなタイプは小学生です」って言つてたじゃない」

「頼むから。頼むからそれ以上暴走しないでくれ。この作品が消されてしまつ」

「そうなればひたぎピークが連載開始よ」

「これはお前が仕組んだ罠だつたのかー!？」

「言つておぐが僕は決してロリコンではない。

ハ九寺の件があるからそりや誤解はされても文句は言えないが、あれはれつきとしたスキンシップだ。

ほら、ライオンだってじやれる時は噛みついたりするだろ? あれと一緒になんだよ。

まあ、いつも噛まれているのは僕なんだけど。最近の世の中は嫌になったもんだよ。

小学生と話していたらロリコン呼ばわりだもんな。

「やつ言えば阿良々木君つて怪異に取り憑かれてるんじゃない?」

「いや、まあ吸血鬼はお前も知ってるだろ? どうしたんだよ急に

「いえ、吸血鬼の方じやなくて

「それ以外は僕は無いぞ」

「おかしいわね。馬と鹿に憑かれてると思つたのだけれど」

「馬と鹿なんて見に覚えが…………ってお前やつは馬鹿つて言つたいんだなー!?」

「もしかて生まれ持つた馬鹿なのー!?」

「まあ馬鹿と天才は紙一重つて言つから僕も天才になるかもよ」

「つてこいつは自分が馬鹿つて認めてこる」とになるのよ

自分でフォローをしようとしたが失敗してしまった。

「話は変わるのだけれどジャコビー流星群って知ってる?」

「ああ、それは田名で今はりゅう座流星群って言うんだつたつけ?」

「あら、知っていたの?」

「まあ一応」

「何故か分からぬけど腹が立つたから殴つて良いかしら?」

「良くないよ!…めちゃくちゃだ!…僕の人权はどこに行つた!?」

「はあ? 知ってる? 阿良々木君。人权と言うのは社会的に人間と認められる存在が生まれながら持つていると主張される社会的権利のことよ」

「僕は人間と認められていないのか!?」

「認められて!」とでも思つてたわけ?」

「当たり前だ!…」

「でも心配しないで良いわよ。阿良々木君が例え野良犬だろうと野良猫だろうと私は愛し続けるから。だから安心して保健所に行くわよ」

「処分する気満々じゃねえか!?!」

「実際に直接処分するのは私じゃなくて保健所の人よ」

「そんな屁理屈はいらない！－」

閑話休題

「で、ジャムデー流星群がどうしたんだよ」

「ああ、なんだつたかしら。ただ、今何故か気持ちがスッキリしたから別にいいわ。忘れて頂戴」

ああ、どうちにしろ悪口に繋がつてたのか。
聞かなきや良かった。

「お前が何を言おつとしてたかだいたい予想がつくよ」

「阿良々木君！」と机に読まれるなんて私も落ちたものね。もつ殺すしかないわね」「

「物騒なことを言うな！！てかなんで僕が殺されなきやならないんだよ！！」

「だつて私が死ぬのは嫌だもの」

「ストレートでわかりやすい答えをありがとう」

「ところで阿良々木君はなんで私にタメ口なのかしら?」

「は？ いきなりなんだよ」

「…………ひたきちゃんの質問タイム。私18歳、あなたは？」

「……17歳です」

「そうよね？歳下の人があなたに敬語を使うのが普通なのだけれど」

「学年は一緒だらうが！！」

「学年以外はどうなのかしら？歳、身長、成績、持つてる文房具の量」

「最後のは完全にお前有利じゃないか」

「お前？歳上の人をお前呼ばわりとはいただけないわね」

「貴方が有利じゃないですか！！」

「確かに文房具店を作るだけの量は持つてるわね」

「この狭い部屋のどこに隠し持つてるんだ！？」

「収納上手なのよ」

「いや、収納上手ってレベルじゃないと思つけど」

「さて、阿良々木君をイジメるのはここまでとして、私は今からお風呂に入るけれど阿良々木君も入って行く？」

「一緒にー？」

「一緒に入りたいの？」

「あ……いや……その……えっと……」

「冗談よ。入るなら先に入つて来ていいわよ」

「いや、今日は帰ることにするよ。時間も時間だし」

「あら、そう。それじゃあ、気を付けて帰つて頂戴」

「ああ」

アパートの下まで見送りに来た戦場ヶ原と別れ、帰宅した。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「今年も残すとあと2ヶ月半!!--」

月火「1年つて早いよね」

火憐「今年やり残したことは今のうちにやつておこう!!--」

月火「まだ間に合つもんね」

火憐「ここで予告編クイズ!!--」

月火「クイズ!!--」

火憐「私が今年やり残したことはなんでしょう?」

月火「なんだろ?」

火憐&月火「次回、『よみティリー』29」

火憐「正解は今のところ無いでした」

月火「クイズとして不安定だよ」

「じゅみトドリー 29 (前書き)

更新遅くなつてすいませんでした m(— —)m

まあ、誰も待つていなうだううばどねー!

2学期が始まり、時間とは早いもので平凡な日々を過ごしてゐるうちに2学期の終業式も間近になつていて。

1年でも早く感じるのだから3ヶ月はもつと早く感じるに決まつてゐるよな。

ちなみについ先ほど書いた「平凡な日々」とは怪異関係の出来事がなかつただけであつて、戦場ヶ原からの毒舌を受けたり、神原の脱衣を止めたり、羽川からの「褒美の説教」を受けたりはしていた。

始業式直後とは違い、現在は冬であるため生徒はもぢりん冬服である。

どれだけ僕はこの季節を待つていたか。

何故かと云つと、わかる人は言わなくてもわかると思つが、僕は忍に血を飲ませていて、首には傷があるため夏場にそれを隠すのは結構考えなくちゃならないから大変なんだよ。

僕達の学校の男子の冬服は学ランだから首を隠せるから楽なんだけど夏はさすがに学ランを着ていると浮くし、変な目で見られてしまう。

冬は楽で良いよ本当。

「阿良々木君、私の左手が寒いと言つてゐるわよ

「は？」

「だから、私の左手が寒いと言つてゐるのよ。どうかしなさい。

それとも阿良々木君には日本語が通じないのかしい」

僕がこの状況に至るまでの過程を話そう。

僕はかくかくしかじがあり、現在は自転車が無いため徒步で通学している。

そして、戦場ヶ原も徒步なので一緒に帰っているのである。

「いや、どうにかって……僕の手袋を貸そつか？」

「阿良々木君って本当鈍感よね。けやんと神経があるのかじらそのアホ毛は」

「アホ毛は関係ねえよ……」

「それより、手袋じやなくてまだあるでしょ」

まあ、こいつが言いたいことはわかつてゐるけど、このまま従つのも面白くないからもう少し反応を見るか。

「カイロは持つてないし……

「本当に阿良々木君って馬鹿ね。馬鹿野郎日本代表で背番号10を付けるべらじよ」

「馬鹿のHースト？」

「そんなことより阿良々木君

「あん?」

「その……手を握ります。違うわね。いつじゃないわ。手を……手を握つたら……どうな……です……手を握りなさい」

結局そこに落ち着くんだな。

ちなみに三つのを忘れていたが、最近今年一番の出来事があった。

戦場ヶ原が若干だがデレしてきた。

「何よ。嫌なの？」

「嫌じゃないけど」

「嫌じゃないけど何？それとも阿良々木君は、お前みたいな美少女は鉄の酸化反応を利用した携帯して身体を暖めることのできる発熱体でも持つてろって言いたいわけ？」

「素直にカイロって言えよ、ややこしい。てか、なにどうさ紛れに自分で美少女って言つてるんだよ」

「ややこしいのは阿良々木君の頭よ。結局そのアホモはただの髪の毛なの？それとも阿良々木君の本体なの？」

「見りやわかるだろ！……ただの髪の毛だよ……」

「ただの髪の毛なの！？それは驚きだわ。まあ、これで私は思い残すことなく次の年を迎えることができるわ」

「僕のアホ毛が今年の思い残すことだったとは悲しい現実だ」

「それより、話を戻すけど嫌じゃないけど何？」

「いやーほり、学校の近くで手を繋いで歩くのが恥ずかしくて」

「恥ずかしいですって？心配しなくとも大丈夫よ。阿良々木君なんかと歩いている私の方が恥ずかしいから」

「じゃあ、尚更手を繋ぐなよ」

「じゃあ、彼氏の手を繋いじゃいけないわけ？」

「『まつり』と『がめり』はどちらだれ？」

「とにかく私は」よみんと手を繋ぎたいだけなの。わかる？」

戦場ヶ原は最近、一人きりだとたまに僕のことを「よみん」と呼ぶ。なんだよこの変わり様は。

「ちなみにこよみんの歌もあるわよ」

「歌? どんなんだよ」

「愛のうたよ」

「はあん。じゃあ、聴かせてくれよ」

「仕方がないわね。特別よ……引っこ抜かれて、あなただけについて行く。今日も運ぶ、戦う、増える、そして食べられる」

「ピクミンじゃねえか！－全く僕関係ないじゃないか」

「え？ ピクミンの正体って阿良々木君じゃなかつたの？」

「違うよ…－大いに違うよ…－ビクミンをどう見たら僕と間違えるんだよ…！」

てか誰かピクミンネタわかる人いるのか？

「だつて頭にアホ毛があるじゃなし」

「あれはアホ毛じゃなくて、葉っぱや薔薇や花だよ…」

「『』めんなさい。ずっと阿良々木君だと思つていたわ

「てか、ピクミンが出た頃はお前は僕のこと知らないじゃないか」

「だから入学式の時にビックリしたのよ。直江津高校にピクミンがいるつて。でも黒ピクミンなんて見たことなかつたから疑問に思つていたのよ」

「人間だという選択肢はなかつたのかよ」

「あの頃の私はすでに体重を無くしてスーパー私からウルトラ私になつていたから人を人と思つていなかつたから」

「ああ、シンシアになつた時期ぐらいだつたか」

「でも羽川様…羽川さんは別よ。羽川さんはもう女神ね女神。羽川さんと比べたら私なんて『』よ『』」

「本当に前と羽川との間に何もないのかー?」

「でも、私が『△△』だと阿良々木君の立場が無くなるのよね。どうしよつかしい」

「そんなことを本気で悩むなーー」

「でも、あの頃は阿良々木君の『△△』だなんて思つていなかつたから別に大丈夫よね」

「最初は評価良かつたんだな」

「ちなみに最初は阿良々木君の『△△』とダイオキシンだと思つていたの△△」

「簡単で『△△』と僕を有害で不必要だと言いたいんだな△△」

「それに比べたら今は『△△』よ。肥料にだつてなるのよ。ちやんと必要性があるわ。だから『△△』と呼ばれる『△△』を持つんなさい」

「普通に考えたら悪口なのになんて誇りを持たなきやなんねえんだ△△—そんな理由を言われても納得はしないよ」

「じゃあ、埃を持ちなさい」

「汚いよーー」

「△△が埃を持つて滑稽ね」

「黙れ……。」

「今では田、ゴミが新、ゴリを愛してくるのよ。」
「われは運命よ。赤い糸で結ばれてたのかしら？」

「赤と黒とより黒だよ……。」

どの状況で言いやがるんだ」「こつば。
悪口の間に挟んでくるなんて。

「何？ 私と赤い糸で結ばれる」とに不満でもあるわけ？

「な、ないです……戦場ヶ原と赤い糸で結ばれてるのが嬉しいです
……。」

「こんな道端でそんな恥ずかしい」を叫ばないでくれるかしら？
「ちが恥ずかしいわ

あれだけ手を繋ぐのが恥ずかしいと言っていた僕が結局自分で恥ず
かしいことを言ってしまった。

「それよりもうすぐクリスマスよね」

「ああ、やうだな」

「」の時期になるとケンタッキーのCMで竹内まつやのすてきなホ
リデイを聴くともここの季節なのかと毎年思つのは私だけかしら
？」

「確かに冬になると毎年聞くからそれは僕も思つよ」

「あら、阿良々木君も同じ」と思つていたの？それは残念だわ。死ぬしかないわね」

「同意を求めてきたくせに嫌がるなやーー。」

「まあ、去年までの阿良々木君だつたらクリスマスがクルシミマスだつたのが今年は私がいるからちゃんととしたクリスマスになるわね」

「クルシミマスってギャグも定番中の定番だよな」

「そうね。まあ、リア充の私達には関係のないことだけれど」

「自分でリア充とか言つなよ。」

「だから、クリスマスは予定空けておきなさいよ」

「はいはい」

「はいは一兆8596億4570万9610回よ」

「言えるかーー。」

そういうしていふうちに戦場ヶ原の家に着き、そこで戦場ヶ原とは別れた。

今年ももう少しで終わりなのか。
今年はいろいろあつたなあ。

一生分の出来事が今年に集まつた気分だな。
いや、一生かかっても怪異なんかと関わらない人の方が圧倒的に多いだろうな。

戦場ヶ原じゃないけど僕も今年やり残したことがないか考えるか。

そんなことを思いながら歩いていると覗覚えのある胡散臭い中年の男が歩いてきた。

「お、忍野……」

「そんな大きな声を出しちビツしたんだい？阿良々木君。何か良いことでもあったのかー？」

「お前なんでここにいるんだよ」

「ちよつとね。それとも僕がいちやいけない理由もあるの？」

「ちよつわけじやないけど、ただ急だつたからビックリしたんだよ」

「ちよついや、あの照れ屋ちゃんとはどうなつたんだい？大変だつただろつ？」

「千石か？千石がどうしたんだよ」

「あ、いや、この話ではなかつたことにするんだつたのか……今の話は忘れてくれて良いよ。たぶん、今後も関係のない話だから」

「まあ、関係がないんだつたら深くは聞かないけど……それよりさすがに冬は厚着をするんだな」

「当たり前だよ阿良々木君。僕はこれでも良い歳したオッサンだか

らねえ。自分の体調は自分で管理できるよ。てか、真冬にアロハシヤツ一枚で過ごしている奴がいるなら逆に知りたいよ」

「沖縄の人ですら着ないんだから当たり前か。それより、いつまでこの街にいるんだよ」

「しばらくはいるつもりだよ」

「もしかして、また怪異絡みなのか?」

「ここや、今回は怪異は関係ないよ」

「じゃあ、どうしたんだよ」

「どうもじてなこよ」

「お前が来るつてことは何かあるんだろう?」

「いや、今回は本当に何もないよ。それとも何かい?僕は何かなければ来ちゃいけないのかい?」

「そうこうわナジヤなコバ」

「まあ、強いて言つならこの街のことを思つ出して懶に来たくなつただけだ」

「お前でもやつこいとあるんだな

「これでも人間だからね。それより忍ちゃんは元氣かい?」

「ああ、まあな

「そうか。ならよかつたよ。忍ちゃんに何か変化はあったかい？」

「変化あり過ぎて何をどう言つていいかわからねえよ。

「まあ、相変わらずミスド好きは変わらねえよ。おかげで財布が寒くなる時があるよ」

「阿良々木君も大変だねえ」

「それより、この街にはいつまでいるんだよ」

「特に考へてはないけど、もう少しはいるつもりだよ」

「そうか。やつぱりいつもの場所か？」

「ああ。他に場所もないしね」

「わかつた」

「さて、僕はそろそろ行くとするよ」

そう言いながら、忍野は僕の前から去つて行つた。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ここにきて新キャラ登場かよ！！」

月火「まあ、原作を見ている人からしたら別に新キャラじゃないんだけどね」

火憐「しかも、兄ちゃんは年上に向かつてタメ口かよ！！」

月火「お兄ちゃんが敬語つていうのもなんだか違和感があるけど」

火憐「それでは予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「もう、これはこの小説のこれからについて月火ちゃんとは今晩飲み語り明かさないといけないな」

火憐&月火「次回、『よみ』ディリー 30」

火憐「まあ、私達は未成年だから飲むのはウーロン茶だけど」

月火「健康的だね」

七十

ネタがない。

まあ、いつも通り面白くないですがどうぞ………。

クリスマス・イヴ当日、神原や羽川を誘つてクリスマスパーティーでもしようかと戦場ヶ原と考えていたのだが、神原は新作のBL本を読むので忙しく、羽川は予定があるとかで結局戦場ヶ原と二人になってしまった。

そんな僕はと言つと、戦場ヶ原の家に向かつている最中である。今年は、ホワイトクリスマスになつた。

雪自体は僕達の地域では珍しいはないのだがクリスマスに雪が降るとなんだかいつもよりもテンションが上がつてしまつ。

ただ、雪道は滑ら……コケな……気をつけなければならぬため歩くスピードが遅く、いつもより時間がかかるから嫌になる。これだけ寒ければ外に出る人がいるわけもなく……と思つていての前に赤いちつこい物体が動いている。

僕は間近に近付くことでようやくその物体がわかつた。ハ九寺である。

「何してるんだよハ九寺」

「これはこれは腹巻きさん

「僕をお腹に巻く布みたいな名前で呼ぶな。何度も言つていいが僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「歯もまた！！」

「わざとじゃない!?」

「解食べた」

「えらく豪勢な食事だつたんだな」

「どうしたんですか？今日は」

「何がだよ」

「いつもならを強制わいせつをしてくるじゃないですか」

「その言い方は辞めろ！僕が捕まるだろ！？」

「無能な奴が何をこなすか」と誰ですか？」

「さて? なんの冗談だらう?」

「最低です！！」の男、とぼけやかりました！！

それより
ハガ寺何たよその格好は

「ああ。どうですか?クリスマス仕様でサンタコスプレをしてみました」

「誰得なんだよ」

「何を言つてゐるんですか！－今頃、八九寺ファンは私のサンタコスを想像してハアハアしてゐるといひですよ」

「ちなみにその表現はアウトな」

「阿良々木さん」何をしてゐるんですか？」

「ああ、戦場ヶ原の家に行く途中なんだよ。ただ雪だから歩くのがな…」

「ああ、雪だから滑らないよつて気をつけなければなりませんね」

「う…そ、そ‘うなんだよ」

滑るとこつ言葉に敏感になつすぐして反応してしまつ。

「口ケると危ないですから滑るのに気をつけないとこね…滑るのには」

今、僕は確實に口つとわかったことがある。
ここつ、わざと言つてやがる。

「お前、わざと滑るとか言つてんだ」

「何を言つてゐるんですか！－私は阿良々木さんが大学に落ちないよつて気をつけて下をこなして一回も言つてないですよ」

「それだよーーー！」

「すみません、噛みました」

「違つて、わざとだ」

「はい……わざわざ

「そこは嘘でも否定してくれ……」

「それより、私のサンタコスは貴重ですよ。この際、Q10のカードやポスターを作りましょう。そうすれば私は印税生活を送ることができます」

「何、勝手に話を進めてるんだよ」

「特別に今ならタダで写真を撮らせてあげますよ」

「僕はロリコンではないからそんな趣味はない」

一本並にいいんですか？ 真宵サンタを撮るチャンスは一度とないですよ。真宵サンタ……阿良々木さん！！ 偽物語の次にまよいサンタをアニメ化しましょうー！」

「するわけねえだろ。原作すらないのに」

「なら、本家の西尾先生に次の恋物語と同時進行で書いてもらいましょう」

「西尾先生を殺す気か！！」

「なら、IJKの日常物語の小説の作者に書いてもらいます」

「まともな話にならないぞ」

「う……確かにその可能性は大ですね」

「だいたいどんな内容になるんだよ」

「私のクリスマスの日の行動を分刻みで書いていきます」

「誰も興味ないし、細かすぎだよ……」

「だつて、一日の出来事だとすぐ終わるじゃないですか」

「なら、短編小説でいいだろ」

「それは駄目です……」

「なんでだよ」

「阿良々木さんは」よみテイリーで連載している「私のまよ」サンタが短編小説だなんて負けた気分になるからだよ」

「知ったこっちゃねえよ……」

「仕方がないですね。今年のサンタさんへの願い事は」よみテイリー打ち切り、まよサンタ連載開始にしましょう」

「その願い事はたぶん叶わねえよ」

「願い事は叶えても、うそじやないんですよ。自分の手で叶えるん

です「

「綺麗に終わらそうとしたのはわかるが、意味がよくわからないから結局決まっていなーぞ」

「それは阿良々木さんが馬鹿だからです」

「人のせいにするな」

「それでは阿良々木さん。ここずっと話してるとさすがに寒いし遅れると戦場ヶ原さんに悪いので私はここで失礼しますね」

「ああ、じゃあまたな」

その後、僕は無事戦場ヶ原の家に到着した。

「」の天氣の中よく来たわね阿良々木君。滑つてコケて落ちてない
?」

「お前もかーー。」

「何がよ。私はただ大学に滑つてコケて落ちてない?と聞いただけ
なのよ。別に雪で滑つてコケて落ちてない?とは言つてないわよ」

「それが一番駄目なんだよーー。」

「冗談よ[冗談]

「で、なんだよその格好は」

「ひたきサンタよ。良かつたわね阿良々木君。美少女が阿良々木君

のためにサンタの「スプレーをしてくれてこるのよ。感謝しなやこ」

「だから自分で美少女って言つたなよ」

「じゃあ、阿良々木君は私のことを美少女だとは思つたことはないのね。彼氏にそんな」とを思われているだなんて悲しいわ」

「思つてます！…世界で一番の美少女です！…」

「あら、あつがどう」

「言わされた感が否めないが、まあ良しとするか。

「そう言えば、子供の頃つてクリスマスによく赤鼻のトナカイを歌つていたわよね」

「ああ、僕も歌つていた記憶がある」

「どんなのだつたかしら……真つ赤なお鼻の阿良々木君は、いつもみんなの笑いもの」

「やめひーーーてか、トナカイはビリに行つたんだよーーー。」

「あら、間違つていたかしら？」

「逆に間違つていないと思つてこりのかよ」

「ビリが間違つていたのかしら？……ああ、あそこね。わかつたわ。真つ赤なお鼻の阿良々木君は、やっぱりみんなの笑いもの」

「だからトナカイ関係ないじゃねえか！－！結局僕のことがよ－－てか、やつぱりつて前から笑われたの－？」

「笑われていないとでも思っていたの？友達を作ると人間強度が下がるつていう迷言を言つてた人は誰かしら？」

「あれは僕の黒歴史だから言わないでくれ」

「それより、私のサンタコスを〇〇〇カードやポスターにしようと思つてているのだけれどどうかしら？」

「知らねえよ」

「二つとも二つも何で商売にしようとしてやがるんだ。

「それを売ることで印税が入つてくるから生活が少し楽になるわよ。そして、将来は働き口が見つからない二ートの阿良々木君は私のヒモになるのよ」

「勝手に僕を二ートにするな－－」

「黙りなさい。このヒモ男」

「まだヒモじゃねえよ－－」

「まだつてことは今後なるのね

「なるわけねえだろ」

「とにかくヒモ良木君」

「アホみたいだなーー！」

「阿良々木君。今日の夕食の材料を買いに行くから付いてきなさい」

はい

僕は、雪が降りしきる中戦場ヶ原と共に買い出しに行つた。

スーパーでいろいろと材料を買った後、定番中の定番のケンタッキーを買って戦場ヶ原の家に帰った。

荷物を持ってくれてありがとう阿良々木君

いや、これくらいなんともないよ。

「じゃあ、ここからは私の出番ね。夕食を作るから阿良々木君は適当に会社をリストラになって、毎間に暇そうにしているサマリーマンの、」とくつろいでて

「言い方が酷い！…くつろぐ『氣無』くすわー…」

そう言つたものの、僕が台所に行くと逆に邪魔になるので戦場ヶ原の言葉に従い、くつろぐ僕であった。

そういうしていながらうちにテーブルの上が料理の皿で埋まつていつた。

「これで全部ね」

『支那の歴史』、1933年、上巻、100頁。

「さて、阿良々木君」

「はい」

「先にいい飯にするつ。お風呂にするつ。それとも……」

え？ なにこの展開。

テレビとかである、それとも私の展開じゃねえか！！
ヤバいやばいめっちゃ緊張してきた。

「それともタ・ワ・シ？」

「タワシって何だよ……」

「え？ 阿良々木君、タワシ知らないの？ タワシってこののは洗い物
をする時に使う纖維を固めた道具よ」

「知ってるよ……タワシぐらい僕、だって知ってるよ……」

「だつて阿良々木君が「タワシって何だよ……」って叫んださじや
ない」

「そういう意味の何だよじやないよ……てか似てないモノマネをする
るな……」

「じゃあ、どうこの意味かしら？」

「普通あの場面だと……その……あれだよ……その……それとも私つてと
じやないのか？」

「はあ？ 何言つてゐる阿良々木君。私がそんなことを阿良々木君に
ときひ言つてみたのでも？」

「『』とやつて一応彼氏なんですが？」

「私は、『』飯にする？ お風呂にする？ それとも、阿良々木君の顔を
思いつきつタワンド擦つて洗つてあげようまじょうか？ つて意味で
言つたのよ」

「そんなことされたら顔が傷だらけになるわーー！」

「心配しなくともいいわよ。剣心みたいに左頬にカツコイイ傷にし
てあげるから」

「何の心配だよーー完全に傷を付ける気満々じやねえかーー！」

「あの傷を付けるとカツコイイ阿良々木君がさらにカツコよくなる
わ」

「タワンドあんな傷がつくかーー！」

「言われてみればそうよね

「先に氣づけよ」

「じゃあ、包丁でしまじょうか？」

「怖い怖いーーただの事件だよーー！」

「大丈夫よ。私は阿良々木君がカツコよくなるなら犯罪だつてできるわ」

「なんだよそのヤンデレキヤラは……」

「外は雪が降つて、中では血の雨が降る……風流ね」

「風流じゃねえよ！－！単なる傷害事件現場だよ！－！」

「さて、[冗談は]この辺にしどこで温かい内に食べてしまいましょ」

「あ…ああ」

「そんなにビビらなくても大丈夫よ。そんなことするわけないじゃない。むしろ、そのカツコイイ顔に傷を付けるような人がいるなら私が一人残らず切り刻んでやるわ」

その言葉を以前の戦場ヶ原にそのまま聞かせてやりてえよ。

その後僕は、戦場ヶ原と夕食を済ませ、またくつろいでいるのだった。

てか戦場ヶ原の料理の腕が日に日に上がっていふよつた気がする。

「阿良々木君、今日ビビつるのは帰る？」

「ビビつんのかなあ」

「泊まつてこつたら？」

「うーん……じゃあ、今口直りにお前とこよつかな

「べ、別に私は阿良々木君といたいから言つたんじゃなくて、夜道を歩いて帰つて口ケて怪我でもしたらせつかくクリスマスなのに私が帰らせたから怪我をしたんだと思つて台無しになるから私のために言つたのよ。か、勘違いしないでよね」

「今度はシンデレラですか……忙しいやつだな」

「わかつたら返事」

「はいはー」

「はいはーは4分の3回」

「中途半端だな……はーのーの発音どしきすればーいんだよ」

「何言ひてるの?」

「いや、ここです」

そして、僕と戦場ヶ原の一人のクリスマスは過ぎていった。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ついに現実世界の季節を追い越したな」

月火「そうだね。作者がネタが無くて仕方がないから季節を進めたんだろうね」

火憐「11月下旬にはこの話は春になつてんじゃねえの？」

月火「リアルにありそうだね」

火憐「でも、春だつたら卒業するよな？ そうしたらどうするんだろう。大学編とか？」

月火「どうなんだろうね。まさかの新章突入だつたりして」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「春からはどうなるでしょ？ つか？」

火憐&月火「次回、『よみデイリー 番外編3』」

火憐「あ、次また番外編だ」

月火「作者は完全に忘れてたみたいだから内容が変更するかも」

今回の「JANM」トライラーは誰なんでしょうつか！！

では雑談の始まりです！！

羽川「さてさてー今回も始まりました番外編。本日、『じょみ』ティイリー一番外編3をお送りするのは私、羽川翼と」

八九寺「『じょみ』ティイリーを読んでくださってる皆さんコンバトラー。八九寺真宵です!!」

羽川「ついに、これも3回目をやつちやつたね」

八九寺「作者は馬鹿なんですか?真正の馬鹿なんですか?いつもの本編でも誰得状態なのに、この番外編なんてそれこそ誰得なんですか!!」

羽川「最初から飛ばすねえ、真宵ちやんは」

八九寺「番外編をするなら、まよいサンタをするべきだと私は思っています」

羽川「この場で自分の作品をアピールしないで。いや、作品はないけど」

八九寺「羽川さんも黙つていないでもつと黙つべきです。つばさパーフェクトをやれと」

羽川「私は、別にやりたい気持ちがないから」

八九寺「羽川さんは本当謙虚ですね。そんなことだから戦場ヶ原さん阿良々木さんを盗られるんですよ」

羽川「その話はしていいのかよくないのか分からなければ、とりあえず無しの方向でお願いします」

八九寺「それで、今日は何について話をするんでしたっけ?」

羽川「基本はフリートークだけど、こよみデイリー 21~30についての裏話とか…まあ、化物語 Blu-ray or DVDのオーディオコメントタリーみたいな感じでいいんじゃないかな?」

八九寺「前回のヴァルハラコンビは大丈夫だったんですか?」

羽川「うん。神原さんはいつも通りだったみたいだけど戦場ヶ原さんが眞面目にしていたみたいだよ」

八九寺「戦場ヶ原さんが神原さん側になつていたらもうめちゃくちゃだったでしょうね」

羽川「止めてくれる人がいなくなるからね」

八九寺「まあ、阿良々木さんと羽川さんのコンビも結構不安ですけどね」

羽川「どうして?」

八九寺「阿良々木さんは羽川さんを愛しそうでいるんですよ。いつも暴走するかわからないですよ」

羽川「確かに私もわからない」

八九寺「実は今回は八九寺&羽川ペアではなくて阿良々木&羽川ペ

アの案もあつたんですよ」

羽川「え!?. そうなの?」

八九寺「はい。ですが、阿良々木さんの暴走はもちろんですがBlu-ray or DVDの時みたいに羽川さんが暴走してしまつ可 能性もあつたので私の権力で白紙に戻しました」

羽川「さすが八九寺P。ただ、お願ひだからあれば話さないでほしいな」

八九寺「いいじゃですか。阿良々木さんは喜んでいたと思いま すよ。羽川さんを足に座らせたことを」

羽川「リアルに喜んでそつだからなんか不安になる」

八九寺「話は変わりますがこの小説、最近やたら季節が進むのが早 くないと思いませんか?」

羽川「そう言えればそうだね。つい最近まで夏休みの出来事だったの に今ではクリスマスだからね」

八九寺「火憐さんや月火さんも後書きで仰られていましたが、この ままだと少なくとも年内には阿良々木さんは卒業してしまつて新章 突入とかになるんですかね」

羽川「真宵ちゃんまで新章突入って言い出すともうフラグとしか思 えないよ」

八九寺「もしくは、阿良々木さんが留年して戦場ヶ原さんと羽川さ

んだけ卒業するパターンの新章もあります」

羽川「そんな」としたら阿良々木君は戦場ヶ原さんに半殺しにされかねないよ」

八九寺「そう言えばクリスマスの話に羽川さんは出でさせんでし
たね」

羽川「逆に私が出れそうな場面がなかつたしね」

八九寺「羽川さんのサンタコスも見てみたかつたです」

羽川「私は絶対にしたくない」

八九寺「そんな恥ずかしがらなくとも。とても似合つと思います」

羽川「恥ずかしいとか似合つとかの問題とかではなくて、阿良々木
君の問題が…ね」

八九寺「ああ。確かに羽川さんのサンタコスを阿良々木さんに見せ
でもしたらもうそれこそ暴走しますね。初号機のように」

羽川「どうこうこと?」

八九寺「食べられてしまします」

羽川「エヴァネタを挟まないで。ていうか食べられるつてどんだけ
よ」

八九寺「食べられるというのは冗談としても、サンタコスは有りだ

と思います。クリアファイルとかにして売つたらかなり売れると思いますよ」

羽川「うーん。確かに千石ちゃんとか爆発的に売れそうだね」

八九寺「いえ、以前までならそうですが千石さんは囮物語の影響もあるのでどうなるかわかりませんよ。1番人気は羽川さんでダークホースは忍さんですね。てか、羽川さんのやつは阿良々木さんが全て買い占めそうですけど」

羽川「そこまで影響はないと思うけどなあ。あー忍ちゃんは人気ありますだね。少女バージョンと大人バージョンの2パターンあるし。買い占めたら本気で引く」

八九寺「まあ、最終的には1番は私になりますが」

羽川「結局は自分なんだ」

八九寺「当然です」

羽川「もしかすると、阿良々木君が一番になつたりするかも」

八九寺「ありえません!! そんなことがあるなら死んだ方がマシです」

羽川「そんなに…なんか阿良々木君が可哀想に思うよ」

八九寺「まあ、私は死んでるので死んだ方がマシといつのは的確ではないですが」

羽川「そこはあえて突つ込まないから大丈夫」

八九寺「というか阿良々木さんがサンタのコスプレをして誰が得をするんですか？」

羽川「意外と一部では人気があるみたいだよ」

八九寺「世も末ですね。あんな変態口リ「コン男が人気があるとか」

羽川「まあ、被害を受けてるのは私達だけで現実世界の人達は知らないからね」

八九寺「これはもう、阿良々木暦被害同盟を作つて抗議をするべきだと私は思います」

羽川「少なくとも、戦場ヶ原さんと神原さんと千石ちゃんは入らないと思うけど」

八九寺「重要な戦力が減るじゃないですか！！」

羽川「ちなみに、火憐ちゃんや月火ちゃんもなんだかんだ言ってプラコンだから入らないと思う」

八九寺「入らない人が過半数を越えました！！」

羽川「あと忍ちゃんも無いと思つ」

八九寺「残るは私と羽川さんですね」

羽川「あー私はどちらにも入る気ないから」

八九寺「裏切りです！！」

羽川「大丈夫、大丈夫。たぶん、最終的には戦場ヶ原さんが阿良々木君をいじめるために入ってくれると思うから」

八九寺「戦力的には100人分なんですが、の方は私のこと嫌いですからねえ」

羽川「そこは八九寺Pの腕の見せびらんでしょ」

八九寺「いえ、今回は諦めます」

羽川「まあ、もう少し様子を見ようよ」

八九寺「そうですね。八九寺裁判官の判決は保護観察処分に決定です」

羽川「完全な無罪にはならないんだ。」

八九寺「それは覆りません。少しでも何かやらかしたらこよみデイリーからまいオンリーに変更です」

羽川「私欲が丸見えだよ。てか、なんだかんだ言つているうちにもうそろそろ終わりみたいだね」

八九寺「結局、私達もあんまり日常物語には触れませんでしたね」

羽川「まあ、仕方ないんじやないかな。どうせ日常物語だし」

ハ九寺「羽川さんには『おまで言わせるんだから』の小説が悪いんですね」

羽川「最後ぐらにはちゃんととして終わるつよ」

ハ九寺「そうですね」

羽川「ではでは、今回こよみティワー番外編をお送りしましたのは私、羽川翼と」

ハ九寺「皆のアイドル、ハ九寺真宵でした！！」

「よみデイリー 番外編3（後書き）

火憐「火憐だぜ！！」

月火「月火だよ！！」

火憐「今回、番外編3だつたんだな！！」

月火「無事終わつたね！！」

火憐「内容も終わつてたな！！」

月火「そんな」と言つと、羽川さんやハ九寺ちゃんが可哀想だよ」

火憐「でも、作者が書いたことを言わされてたんだから羽川さんやハ九寺ちゃんも可哀想と言うことも事実だよな」

月火「うん。それは言えてる」

月火「クイズ！！」

火憐「次回は、ついに年が明けます！！」

火憐&月火「次回、『よみデイリー 31』

火憐「A HAPPY NEW YEAR！！」

月火「A H A P P Y
に早すぎ！！」
N E W
Y E A R ! ! つて言うのさすが

やつと……やつと書けた。

とりあえず、読んで頂けたら嬉しいです。

「新しい年を迎える瞬間が阿良々木君とだなんて」

時刻は0時00分。

僕が新年一発目に聞いた声であった。

「彼氏に対する新年一発目がそれかよーー！」

「新年早々ツツツ「まないでくれるかしら?」

「ツツツ「まないでくれるかしら?」

「貴方の横には私しかないじゃない」

開き直りやがった。

とりあえず、ここまでの経緯を話そう。

12月31日、大晦日の昼頃に戦場ヶ原から電話があり、夜7時に
家に集合と言われ、そこからガキ使を見ていた。

ちなみに、僕は紅白歌合戦を希望したんだが戦場ヶ原がどうしても
見たいと言つことで見ていたんだが、結構酷かつた……戦場ヶ原が。

「阿良々木君、ガキ使つて面白いわよね

「ああ、最近では大晦日の定番だな」

「私達もこれしない?」

「笑つたら叩かれるやつか?」

「そう。でも、一つだけルールを変更しましょ?」

「どうするんだよ」

「どうやらかが笑つたら阿良々木君が叩かれるルールを追加します」

「僕のお尻が新年の幕開けと共に崩れ落ちそうだよ」

「仕方ないじゃない。私が叩かれるの嫌なんだもの」

「自分勝手過ぎるー!」

「それに阿良々木君の趣味はお尻を叩かれることでしょう?」

「いつも言つたんだよ!…いつそんなドM発言したんだよ!…」

「まさか私の言つことが間違つてるつて言つの?..」

「ああ、大いに間違つてる」

「といひことは、別ルートに入り込んでしまつたのね」

「『きなり厨』発言をするな。だいたい、それならその入り込む前の僕はどんななんだつたんだよ」

「親のスネをかじり、口クに学校にも行かず、彼女である私にもお

「金をもりこ生活をしてる男」

「クズじやねえか！..」

「自覚しているのね

「あ、こ、せ、今の僕じやなへてそのルートの僕に言つたわけ

「は、別ルート、何言つてここの馬鹿は

「ま、泣いていいですか？」

「冗談よ冗談。それより、呂くのは痛いから辞めこしない？」

「お前にては良い案だな

「その変わりに田ん前に置いたシャーペンを一回笑う」と口を一セんチ出してこへつてこいつのせどつへ..」

「そんな命がけでやるものじやない！..」

「良心じやない。命がけのゲーム。眼球に近付く」と口をわざわざ言
い出すわよ

「とりあえず、お前は金輪際カイジを見るな」

そして、今に至る。

「ガキ使もあと30分ぐらこよ。終わったらどうすみへ..」

「何が？」

「初詣に行くか行かないかよ」

「ああ、行つてもいいよ」

「なら、これが終わつたら行きましょつ」

「ああ」

ガキ使が終わり、戦場ヶ原が準備をしている間、ゆく年くる年を見てから神社へと出発した。

ゆく年くる年つ結構良い番組だと僕は思う。
ゆく年くる年について熱弁をしたいところだが、ここは重複しておひ。

神社に着いたのだがやはり人が多く、僕達は列に並んでいた。

「阿良々木君は何を願うの？」

「やつや、大学合格だろ」

「あひ、やつ

「やつこつお前はびうなんだよ」

「私は、素敵な彼氏ができるよつてお願いするわ

「……」

神様、仏様、大学合格とは別に察して頂けたら嬉しいです。

「黙つてどうしたの？阿良々木君」

「わからないのかーー！」

「ええ。阿良々木君みたいに馬鹿だからわからないわ」

「何故、自分のことを言つのに僕が馬鹿にされなきゃならない。てか、今年こそは汚名返上してやる」

「どの汚名？」

「何個もあるのかーー？」

「とにかく、汚名返上って名誉が失われた状態から巻き返しを図ることを囁つのよ」

「まるで僕に名誉なんてなかつたって言い方だな

「あつたの？」

「素で聞くくなやーー！」

「どうやらかと囁つと、汚名挽回の方が阿良々木君に似合つているわよ

「その辺で勘弁してもうえませんか？ひたぎさん」

「仕方がないわね。優しいひたぎりやまだから」おぐりこじておいてあげるわ」

「優しくやつはそんな」と言わねえよ。

「やつはまだ言つてなかつたわね」

「あん~」

「ああ。明けましておめでとう。今年もよろしくね阿良々木君」

「へこひみねはひがひ」

「阿良々木君はもつ一回3年生をようじへしないでね」

「新年早々縁起でも悪こいとを言わないでくれ」

「それより、どうするの?」のあと。私の家に戻る?・それとも自分の家に戻る?」

「お前さえよければ戦場ヶ原の家にお邪魔してもこいけど」

「私は構わないわよ」

「じゃあ、やつあるよ」

「あら、起きたの?おはよ!」

その後、戦場ヶ原の家へ戻つた僕達はテレビを観ていたが、いつの間にか寝ていたらしく朝になつていた。

「ああ、おまよつ。いつの間にか寝てたみたいだな」

「もうね。私も気付いたら朝だったわ」

「今何時だ?」

「10時過ぎね」

「もうか」

「お前はこれからするんだ?」

「お父さんは仕事だし、特にせんじとはないわね。阿良々木君は?」

「とつあえず、家に帰つてから考える予定だ。勉強は夜する予定だし

「じゃあ、どこか出掛けない?」

「いいナゾ、何処へ行くんだよ」

「特に決めではないけれど、さすがにショッピングモールに行けば何があるでしょう」

「ああ、もうだな。じゃあ、準備が出来たらまた連絡するよ」

「よろしくね」

帰宅した僕は自分の部屋に入り、ベッドに寝転がった。

その瞬間、階段を駆け上がりてくる、足音が一人分聞こえた。

「兄ちゃん……帰つて来てたなら先に言つてあるだろ……」

「アリだよ……」

「あー……ただこま」

「「違つ……」「

「確かにそれもアリだけど、新年早々言つてあるだろ……」

「あーはーはー。あけおめ、ハピバニ

「適当過ぎだる兄ちゃん……そんな適当だと今年一年よろしくって
やんねえぞ……」

「逆にしてくれとは頼んでねえよ」

「私達がしたいんだよ……」

「アリだよ……お兄ちゃんがしたくなくても私達がしたいからお兄
ちゃんもちゃんと言わないとダメ……」

「わけがわからん」

「今年一年はダンベルで起りこまじこみたいだな、兄ちゃんは

「明けましておめでとアリガト。今年もよろしくお願いします」

「あけおめ、」とみんな兄ちゃん……。」「

「あけおめ、ことわりお兄ちゃん……。」

「お前ひま言わんのかい……。」「

「なんで兄ちゃん相手に言わなきゃならんんだよ」「

「わざこわざ。用は済んだだろ」

「何だよー。せっかくだから遊びまつせ」

「何が嬉しいて元日から妹と遊ばなきゃならねえんだよ。だいたい、僕はこの後予定があるんだよ」

「何の?」

「戦場ヶ原と出掛けてくる

「勝手にしてくれ」

「ふーん。まあ私は月火ちゃんと初詣に行つて来るけど

「何お願いするんだ?とか聞いてくれてもいいだろ?」

「何お願いするんだ?」

「新一とバレませようと」「

「お前は「ナンセンじやない!」……。」「

「いやーだつて毎年5円頃にバレかけるじやん」

「まあ、毎年『ゴールデンウイークに映画をやるからなあ

「兄ちゃん知つてるか?」

「何が?..」

「黒幕つて阿笠博士なんだぜ」

「それは都市伝説だ」

「何ー? セウなのか!..? ジやあ、ジやあ、ジやあ、怪盗キッドの正体が新一
つていうのむか?」

「当たり前だ。てか新一が怪盗キッドならコナンは誰なんだよ」

「都市伝説ばっかりだな」

「ああ、だからいつものは嘘じつやでだよ」

「じゃあ、お兄ちゃんが彼女いるのも都市伝説なんだね」

「事実だよー!..いい加減認めやがれ!..」

それから、僕は準備をして再び戦場ヶ原の家へと向かった。

「こいつしゃい。とりあえず、上がつて」

「ああ」

「「ナンの道具の一つでもある追跡メガネってヤンデレ道具にしか思えないわ」

「急になんだよ」

「か、こいつは僕と妹の話を聞いてたのか？」

「だつて、あれって発信器を付けるとビビンてるかわかるのでしょ？」

「ああ。距離は決まってるがな」

「恋人の持ち物にこいつそり発信器を付けると見張れるじゃない」

「ビバそのアプリなんだよ」

「そうこやカレログってどうなったんだろ。」

「あれこそ完全にストーカー＆ヤンデレ道具にしか思えないけど。まあ、戦場ヶ原が知ってるわけないと思つたが。」

「現実世界で言つとカレログってこうアプリみたいなものよね
知つていた。」

「カレログがあるなら由乃は絶対ユッキーの」とずっと見てつづるわ
よね」

いきなり未来日記のネタを放り込んでくるな。

「まあ、私はヤンキーと書いつぶつシンキーだからそんなもの使わなければね」

「テレの部分が非常に少ないがな。

「何よ、さつきから黙つて。引き受けたわよ」

「『ど』ですか！？」

「アホ毛」

「辞める！…僕の大切な髪を引き抜こうとするな！…」

「僕の大切な本体の間違いではなくて？」

「本体じゃねえよ！…髪の毛だよ！…」

「それより準備できたから行くわよ」

「今年も相変わらずだな」

「なに？何か文句……いえ、意見があるの？」

「いいえ」

「や、ならいいけど」

今年も戦場ヶ原の尻に敷かれる一年になることが決定した瞬間でもあつた。

「尻に敷かれるってそんなに私の椅子になりたいの?」ドムね

「勝手に人の心の声を読んでおいてそれか!」

「私は心の声を聞くことができるのよ

「お前にそんな能力はない」

「新しい年になつたから私も」「ユー私にならなこと」と思つてこの能力が使えるようになつたのよ

「そんな理不尽な理由で能力を身につけるなー!」

「つぬせーわね。捻り潰すわよ

「お前が『巨人ではない限り捻り潰される心配はない』

「化物語のOPの私ならできるわよ

「あれは驚愕だったな」

「戦場ヶ原ひたぎの驚愕よ」

「すぐに他作品をパクるな

「阿良々木君は警察にパクられなによつこね

「うるせえ……」

その後、買い物へと出掛けた。

「よみティリー 31（後書き）

火憐「火憐じやないぜ！！」

月火「月火じやないよ！！」

火憐「年が明けたぜ！！」

月火「明けたね！！」

火憐「現実世界はまだだけどな！！」

月火「まだだね！！」

火憐「予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「さて、私達は一体誰でしょう」

火憐&月火「次回、『よみティリー32』

火憐「実は火憐だぜ！！」

月火「実は月火だよ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1128u/>

日常物語

2011年11月27日10時00分発行